

エスパー少年とオカルト少女

リョーマ(S)

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

サイキッカー（少年）とオカルトマニア（少女）のほのぼの物語。

目次

エピソード 0	
始まりの話	
これから的话	
裏話 : ラルトスのいちにち (短話集)	
裏話 : オカルトマニアのレポート	
第1章	
1. 旅立ちの話	51
2. 船での話	58
3. 良くないことの話	64
4. バトルの話	72
5. やきもちの話	81
6. いしのどうくつの話	91
7. 精神統一の話	102
8. ポケじやらしの話	114
9. 彼女(?)の話	106
10. おどろかすの話	120
11. ミミツキユの話	137
12. ジエラシーの話	126
13. 仲間の話	142
14. ゲットの話	148

エピソード 0

始まりの話

ホウエン地方トクサネシティ。本島から少し離れた平坦な島にポツンとある街だが、宇宙センターがあるお陰か、けつこう都会の街だ。ジムもあるため、ポケモントレーナーの往来も多い。

そのジムがエスパータイプを専門にしているためか、この街に住む人達も、心なしかエスパータイプのポケモンを持つ人が多い気がする。

ウチの家族もそうだ。母さんはサーナイトとエーフィを持つているし、父さんもチャーレムを持つてる。爺ちゃんなんて本人そのものが“サイキッカー”で、手持ちすべてがエスパータイプのポケモンだ。

まったく迷惑この上ない……。

この世界で、サイキッカー、いわゆる超能力を持つ人間は、そう珍しくない。トクサネジムのトレーナーにも超能力を持つエスパータイプ使いのトレーナーが何人かいと聞く。

俺、カズヤもそうだ。爺ちゃん譲りなのか、俺自身も超能力を持っている。具体的にはテレキネシスとマインドコントロールとかだ。赤ん坊の頃は見境なく物を動かしたりして、母さん達も（主に爺ちゃんが）手をやいたみたいだが、自我がしつかりし始めた時を境に、コントロールできるようになつた。いまではレベルの低いエスパータイプのポケモン並みに超能力を使えるようになった。

だが、その影響なのか、あるいは代償というのか、現在の年齢が7歳にも関わらず、精神年齢はそれ以上にまで成長してしまつた。これが良いことなのか悪いことなのかは分からぬが、とりあえずポジティブに受け止めて「皆より少し早く大人になれた」と考えてる。

そんな少し大人びたサイキッカーの俺、カズヤ。今日は手持ちのラルトスと一緒に、公園へ遊びに来ている。ちなみに、このラルトスは今年の誕生日に母さんがくれたポケモンだ。母さんのサーナイトの子供というわけではないけど、まだ小さな子供のラルトスだ。最近【ねんりき】を覚えたばかりで、自分のモンスター・ボールを使って俺とキヤツチボールをするのがマイブームらしい。

「いくよー、ラルトス

「ラルう！」

俺も自身のテレキネシスを使ってラルトスにモンスター・ボールを渡す。ラルトスは【ねんりき】で飛んできたモンスター・ボールをキヤツチすると、「ラルう、ラルう」と鳴きながら、自身の周りをゆらゆらと浮遊させる。

まだ少し安定して浮かせることに慣れていないみたい。

「大丈夫?」

「ラル!」

手元はおぼつかないが、ラルトスは『うん!』とはつきりとした返事をする。やがてモンスター・ボールが一点に固定して浮遊するようになると、ラルトスが胸を張るポーズを取つてこっちに顔を向けた。

「ラル!」

「はははっ。うん、うまい。上手になつたね」

「ラールー!」

ほめられて嬉しいらしく、ラルトスは明るい声で鳴いた。そして今度は、ラルトスが【ねんりき】で浮いたモンスター・ボールを俺の方へ飛ばす。俺はその飛んでくるボールに手をかざすようにして、テレキネシスでコントロールするよう意識を飛ばした。

ラルトスの念力のコントロールから外れたボールは、今度は俺の放つ念にコントロールされ、宙に浮く。ラルトスが【ねんりき】で浮かせたモンスター・ボールは上下をしつかりと固定して浮遊するが、俺のテレキネシスで浮いたモンスター・ボールは、まるで無重力中にあるみたいに浮遊している。同じ超能力でも、ポケモンと人間とでは微妙に何かが違うらしい。

俺はジャグリングのよう自身の周りにボールを浮遊させた後、再度ラルトスに渡した。すると今度はラルトスが俺の真似をして、ジャグリングのようにボールを操った後、ボールを返す。

そんな不思議なキャツチボールをしばらくした後、やがて俺は自身の手で、飛んできたモンスター ボールを掴んだ。

「……ラルトス」

「ラル？」

『なに？』と訊くように、ラルトスは顔を傾けた。

「ごめん、ちょっと休憩。疲れた」

「ラールー」

額から出てきた汗をぬぐい、俺はモンスター ボールを懐に仕舞つた。ラルトスはもうちょっとやりたかったらしく少し不満げだ。

サイキッカーといつても流石に精神力はエスペード ポケモンにはかなわない。

大人になれば少しばかりは長く使えるようになるかな？

「ラルラルう」

「ん？」

「ラルラあ、ラルラルう」

「うん。良いけど、公園からは出ないでね」

ラルトスは「ラルう！」と元気に返事をすると、中央にある噴水がある水場へ駆け出した。

どうやら、まだ遊び足りないらしい。

「……ふうう」

水場の水をバシャバシャやっているラルトスを確認して、俺は辺りに休める場所がないか探した。

すると、近くにベンチが3つ並んでいた。右端のベンチには身なりの良い老夫婦が座つており、仲良くおしゃべりしている。左端のベンチにはケツキングがぐつたりと寝そべって昼寝をしていた。

そして、中央のベンチには女の子が一人ポツンと座つている。女の子は全身真っ黒な服で少しボツサリとした髪をしていた。少し暗い雰囲気はあるが、別にイヤな感じはない。

俺は、女の子が座っているベンチの空いている部分に座ろうと、足を進めた。

「……あの」

俺が声をかけると女の子はピクッと反応して、こつちに目を向けた。目を向けたといつても、目元が前髪で隠れているため、目が合っているかは分からない。

「そこ、座つてもいいかな？」

「……あ……ん」

なにかあたふたとしているようだが、やがて女の子はコクつと頷いた。

「ありがとう」

お礼を言うと俺は女の子の横に腰かけた。ベンチは子供の俺にとっては少し大きく、脚が少しそらーんとしてしまう。

「はああ」

俺はベンチにもたれてラルトスを見た。ラルトスは水場にいたアメタマやウパーと一緒に楽しく遊んでいた。

「……」

「…………ん？」

そうやつて、しばらくポケモンたちの様子を眺めていると、ふと横にいる女の子がチラチラとこつちを見ているのに気づいた。

俺は女の子に目を向けるが、すると女の子はすぐに顔をそらした。なんだろうと不思議に思いながら俺は前を向く。だが、また少しすると女の子はチラチラとこつちを見始めた。

「……えつと、なにかな？」

その視線に耐えかねた俺は、女の子を見ながら首を傾げる。

「ん……」

「うん」

「……い」

「う、うん？」

なにかを言いたいってことはひしひしと伝わってくるが、女の子は小さな声を洩らせど一向に言葉を口にしない。

「……」

言葉が出るのを待つていると、最終的に女の子は黙ってしまった。どうしたものかと軽く頭を抱えた末、俺は仕方ないと思いながら、自身の超能力を頼ることにした。

ホントはやりたくないが、仕方ない。

俺は俯いている女の子を見ながら、彼女の頭の中を探ろうと意識を飛ばす。

すると、俺の頭の中に彼女の意識が流れ込んできた。

(どうしようどうしようどうしよう黙っちゃった。ひよつとして怒らせた？ 私のせい？ やっぱり知らない人をジロジロ見るのは失礼だつた。早く謝つた方が……でも今ここで私が謝つたらかえつて変……ううう……というより、そもそもこれって私が悪いのかな？ 確かにこんな雰囲気になつたのは、私がジロジロ見ちゃつたのが原因だけ……でも、いきなり知らない男の子が横に座つたら誰だつて見ちゃうものだし……うん、そう。だから私は悪くない……あーでも、だからつてこのままじゃ、ずっと気まずいままだし……うえーん、助けてヒトモシい！)

「……」

静かな様子とは逆に、内面はかなり騒がしかつた。

よく見たら顔も少し赤いし……まあ、典型的な人見知りさんだ。

あと、ヒトモシつて誰だろ？

「……えーっと、その、ごめんね。邪魔だつたかな？」

「え……！」

俺は頭の中を探るのをやめ、女の子に話しかけた。

「ひよつとして、実は友達がここに座つてたけど、言えなくて『うん』つていちやつた、とか？」

「……」

女の子は無言でゆつくりと首を横に振つた。

「そ……」

「……うん」

「ち、が……」

「……うん」

女の子が一生懸命なにかを伝えようとしているのは分かるんだけど、残念ながら、どれも言葉になつてない。

「モシ！」

「うわあ！」

もう一度頭の中を探つてしまおうか、と悩んでいると、突然、俺と女の子の間に陰が過つた。

「モシモシー！」

「このポケモンは……？」

鳴き声を聴いて視線を下ろすと、一匹のポケモンがいた。短くて大きい蠅燭のような形をしている。

そのポケモンは俺と女の子の間のベンチの上に立つて、俺をジーッと見ていた。

「えへっ」

そして突然、俺と同じくポケモンを見た女の子が、声を出してニヤリと笑つた。

「えへへへへつ……この子、私のヒトモン……」

女の子は笑いながら、そのポケモン、ヒトモシを両手で抱え上げる。さつきの言葉が出てこなかつた態度はどこへ行つたのか、女の子が口にした言葉はハツキリとしたものだつた。

急に態度が変わつたことに少し驚いた俺だけど、今なら普通にお話ができるかもしれない、と考えを切り替えた。

「へえ、ヒトモシつていうんだ。初めて見たなあ」

「この子と私、カロスから来た。ヒトモシはホウエン地方ちにはいないから当然」

「そうなんだ。そのヒトモシは君のポケモン？」

「うん、こつちに来る前にイツシユにいるお婆ちゃんからもらつた。えへへつ」

「そうなんだ」

女の子はニヤニヤ笑いながら、ヒトモシをぎゅつと抱いた。

「そういうえば君、名前は？」

「……ヒトミ」

「そつか。俺はカズヤ。ようしくね、ヒトミ」

「……うん。えへへへつ」

ヒトミは、またニヤリと笑った。奇妙とまでは言わないが、なんど
いうか、独特だ。少し変わつてる……俺が言つてはいけないな。

「……あなたは？」

「ん？」

「あなたの、ポケモンは、いないの？」

「ううん、いるよ。ほら、あそこ」

俺は「ラルトスー！」と、水場で遊んでいたラルトスに声をかけて、
ラルトスを呼び戻した。

自分が呼ばれたことに気づいたラルトスは、よちよちと俺の元まで
走つてくる。足元まで来てくれたラルトスを、俺はヒトミと同じよう
に抱き上げた。

「ラル？」

『だれ?』とラルトスはヒトミを見ながら顔を傾けた。

「かわいい子。はじめて見た」

「そうなんだ。このトクサネシティではそんなに珍しくないって聞く
けどね」

「……でも、ゴーストタイプじゃなさそう」

「うん、ラルトスはエスパータイプとフェアリータイプだよ」

「……残念」

「あははは……」

ラルトスの姿を一通り観察しきつたヒトミは、抱き上げていたヒト
モシを地面に下ろした。

合わせて俺もラルトスを地面に下ろす。

「モシ！」

「ラル！ ラルラルラー！」

揃つて地面に足をつけて早々、ヒトモシはラルトスに声をかけた。
いきなり近づいてきたヒトモシにビックリしたラルトスは、慌てて俺

の背後に逃げ隠れる。そして、足元から顔を出すようにしてヒトモシの様子をうかがつた。

後で気づいたことだが、ラルトスにとつてゴーストタイプはかなり相性が悪い。

俺は怖がるラルトスをなだめつつ、ゆっくりとヒトモシの前にやつた。ヒトモシに敵意が無いことが分かると、やがてラルトスは自分からゆつくりと前に出て、ヒトモシとコミュニケーションをはかりに行く。

「ラルう……ラルラル！」

「モシモシ！」

俺とヒトミはその様子をそばで眺めていた。やがて、ラルトスとヒトモシは互いにじやれあいだし、仲良く遊びだした。

「ヒトミはゴーストタイプのポケモンが好きなの？」

「うん、大好き。えへへへつ」

本当に大好きなんだろう。今までに無いくらいニヤけてヒトミは笑つた。

「……あなたは、どう？」

「うーん……ウチつてエスパートタイプな家系だから、ゴーストタイプはあんまり……」

「そう……」

「ああー、だからつて嫌いってわけじゃないから！」

見るからにどんよりとして肩を落とすヒトミに、焦りを覚えた俺は、慌てて言葉を返す。

「え、えつと、その……ゴーストタイプにも好きなポケモンはいるっていうか……あつ、ほら、カゲボウズとか、かわいいよね！」

「……うん、カゲボウズは良いポケモン」

「だ、だよねえ。あはは……」

カゲボウズという名前を聞いた途端、陰気な空気が散つてヒトミは、またニヤリとした笑みを取り戻した。

「うん。進化したジュペッタが可愛い。えへへつ」

「ポイントはそこなんだ……あはは」

ヒトミのニヤニヤ笑いに合わせるように俺は口を引きつらせて苦笑した。

それからしばらく、俺とヒトミはおしゃべりを続けた。

お互いの好きな食べ物やポケモン、将来なりたいものや行ってみたい場所、俺がサイキツカーであること、ヒトミが少しだけ霊能力が使えることなど、色々なことをたくさん話した。

ヒトミとの会話は楽しくて、気がついたら辺りはオレンジ色に染まり、公園の木の上には夕日がのっていた。

「日が暮れてきたね。そろそろ帰らないと」

「……うん」

俺とヒトミはポケモン達を連れて公園の入口まで一緒に歩き、外で足を止める。別れ際、ヒトミは不安そうに顔をうつむかせ、俺の方へ眼を向けた。

「……また、会える？」

「もちろん。また明日も遊ぼうよ」

「……うん！　えへっ、えへへへへっ」

コクツと大きく頷いて、ヒトミは笑った。独特な笑い方はそのままに、その笑顔は今までにないほど明るかつた。

「ラルラル！」

「モシモシ！」

お互のポケモン達も、俺たちの足元で『また遊ぼう！』とハイタッチをした。

「じゃあ、またね！」

「うん。また明日」

俺たちは手を振つて別れを告げ、俺はラルトスと共に、ヒトミはヒトモシと共に、それぞれ帰路についた。

* * *

ホウエン地方トクサネシティ出身、サイキツカー少年のカズヤ。

その仲間のポケモン、ラルトス。

カロス地方出身、オカルトマニア少女のヒトミ。

その仲間のポケモン、ヒトモシ。

やがて、二人はそれぞれの夢を叶えるため、旅に出る。

これは、その始まりの物語である。

これからの話

カロス地方出身のヒトミ。

ホウエン地方トクサネシティに引っ越してきた彼女は、ゴーストポケモンとオカルトが大好きな女の子だ。

そんな彼女が、いま一番気になつてているのは……。

「ラルー」

「ん、なに？」

「ラルラル、ラルラルラー！」

「えつ、ホント？」

「ラル、ラルうー……」

『いくよー』と張り切るラルトスに、俺は期待のこもつた眼差しを向けた。

「ラル！」

「おお！」

ラルトスが一鳴きすると、突如、その横にラルトスの分身が現れた。俺は驚いて目を大きくする。形や大きさ、色合いなど、分身体の姿はラルトスの本体と全く見分けがつかない。

本人が教えてくれたとおり、ラルトスは【かげぶんしん】を覚えたみたいだ。

「やつたねラルトス！」

「ラルー！」

分身と一緒にラルトスは胸を張った。

「ラル、ラルラー！」

「えつ？」

「ラル！」

「おおーー！」

また鳴き声を上げると、分身が増え、もう2体ラルトスの分身体が目の前に現れた。

『ラルラールー？』

計4体のラルトスは一列になり、声を合わせて『どれが本物でしょう？』と楽しげに訊いてきた。

「あはは。ええーと……これ

「ラル！」

4匹のラルトスを流れるように見た後、俺は一番右にいたラルトスを指さした。

ラルトスは驚いて、思わず鳴き声を洩らす。それと同時に、分身体だつたと思われる3体のラルトスが姿を消した。

残つたのは当然、俺が指で示した本物のラルトスだけだ。

「ラルー、ラルラールラル？」

「そんなの見たらすぐに分かるよ」

「ラールー？」

『どうして分かつたの？』と少しあたふたした様子で訊ねるラルトスが、なんだか可笑しくて、自然と笑みがこぼれた。

『だつてラルトスの感情が伝わってきたの、一人だけだつたもん』

「ラルラー、ラールー！」

ラルトスの額に指をのせて理由を教えると、ラルトスは『そんなのズルいー！』と、むくれた表情になつた。

「あははは。少し大人げなかつたかな？」

「ラルツ！」

腰に手を当てて怒つたポーズで、ラルトスは『そう！』と大きく鳴いた。

……ごめんね？

とある平日の昼間。サイキッカー少年こと俺、カズヤは、特に何を

するでもなく、自身の家でラルトスと共に、まつたりしていた。

年齢もそろそろ10歳になろうとしており、トレーナーとして旅立つ日も近い。

もちろん、狙うはポケモンリーグ制覇だ。トレーナーになるからには、やっぱりチャンピオンに勝つてリーグに名前を残したい。（殿堂入りともいう）

だから、こんな風にまつたりできるのも、あと数ヶ月程度のことだ。今はこのほのぼのとした時間を大切にしておきたい。

「カズヤー！」

「ん？」

優しく頭を撫でながら、ラルトスのご機嫌を取っていると、ふと部屋の外から母さんの声が聞こえた。

「なにー、母さん」

「ヒトミちゃんが来てるわよー！」

「ヒトミが？

「なんだろう……。行こう、ラルトス」

「ラル！」

突然の訪問に、俺は疑問を感じながら部屋を出た。

急いで玄関の戸をあげると、そこにはヒトモシを連れた、暗い紫色の服を着た女の子が一人立っていた。

ボサボサの長い髪が腰辺りまで伸びていて、初めて会つたときは目元まで伸びていた前髪は、今ではきちんと整えられ、彼女のパツチリとした大きな眼がはつきり見えるようになつていて。

「ここにちは、ヒトミ」

「うん、ここにちは。カズヤ」

俺が玄関から顔を出すと、ヒトミはニヤリと、その独特な笑みを強めた。

ヒトミとは初めて会つてから、もうかれこれ2年くらい、ずっと一緒にいる。人見知りな彼女は、はじめは俺とも慣れない言葉で話していたが、毎日遊んだり出掛けたりしているうちに、自然に（素で）話してくれるようになつた。

「えへへっ！」

「モシモシ！」

ヒトミの足元でヒトモシが笑いながら飛び跳ねる。

「ラルー！」

「モシー！」

俺の足元でラルトスが手を振ると、ヒトモシも手を振つて応えてくれた。頭上にある青紫の火がゆらゆらと揺れる。

ラルトスとヒトモシも、俺とヒトミと同じくらい一緒に時間を共にしてきた。タイプの相性が悪いことなど、もはや些細な問題だ。

「どうしたのヒトミ、今日は調べものがあるから遊べないって言つてなかつた？」

「ええ。それについてなんだけど、ちょっとカズヤに手伝つてほしくて……」

「俺に？」

ヒトミは、かなりのオカルト好きだ。ゴーストポケモンの次くらいに、怖い話や都市伝説、大昔の神話、ホーラースポットや古代の遺跡といつたオカルトに関するものが大好きだ。よくそれらについて調べてるみたいだし、古本に書かれた伝承や占いを実験・検証したりする。

この前も、奇妙な言い伝えがあるとかで、宇宙センターの近くにある“白い岩”を二人で調べに行つた。

結局なんにも無かつたけど……。

「別に手伝うのは良いけど、なにするの？」

「……これよ」

そういうつて、ヒトミは肩にかけていたバックから一冊の本を取り出した。その本は所々傷んでいて、見るからに年季が入つてることが分かる。

「……」にヒトモシを使った、とても興味深い“おまじない”が書かれていたの。その確認に付き合つてほしくて

「おまじない？」

おまじないか……。

ポケモンの技に【おまじない】ってあるけど、それじゃないよね。普通おまじないってひとりでやるイメージがあるけど、二人でやるおまじないって、なんだろう?」

「分かった。どうすれば良い?」

「ありがとうございます。それじゃあ、まずはね……」

「おおー、これはこれは!」

ヒトミがなにか言おうとした途端、しわがれた声が遮つた。声がした方に眼を向けると、そこには甚平のような灰色の服を着た老人と頭にピンク色の大きな真珠をのせたポケモンがいた。

「カズヤの友達か?」

「爺ちゃん、おかえり。バネブーも」

「バネブー!」

バネブーは自身のバネのようなしつぽを使って大きく弾んだ。

やつて来たのは、散歩から帰つて来たウチの爺ちゃんとバネブーだつた。バネブーは爺ちゃんの手持ちだ。歩き回るのが好きで、よく爺ちゃんの散歩について行つている。

「それとも彼女かの?」

「ふえッ…………ううう」

爺ちゃんが変なことを言つたせいで、ヒトミはうつむき、だんまりとしてしまつた。前髪が垂れ、目元が隠れてしまつていて。

俺と気軽に話してくれるようになつたヒトミだが、だからといって人見知りがなおつたわけではない。ヒトミの家族や俺以外と話すときは、極端に口数が少なくなつてしまう。こんな変なことを言われたら、なおさらだ。

「この子はヒトミ。前に話したでしょ?」

「あー、君が例のヒトミちゃんか……。はじめまして、カズヤの爺ちゃんじや」

「……ど、どうも、はじめ、まして」

ヒトミは小さな声で返し、ペコリと頭を下げた。

「おや? カズヤが言うには、素直で元気な可愛い女の子と聞いておったんじやが……人見知りさんなののかのお、ヒトミちゃんだけに」

「なつ！」

「爺ちゃん！」

また爺ちゃんが誤解を与えるかねないこと（加えてくだらないギヤグ）を口走ったので、俺は声を上げて爺ちゃんを睨んだ。

いや、『素直で元気な可愛い女の子』って言つたのは本当だけどさ……。

「……カズヤ、が、わたしを、かわ、いい……つて……わ、たし……が、かわいい？」

ヒトミは口をぱくぱくと開け、なにやら咳いている。

何を言つているか気になつたが、声が小さくてまったく聞き取れない。
「ワツハツハ。若い一人の邪魔をしてはいかんな。行こうバネブー」「ブー！」
爺ちゃんは大声で笑いながらバネブーと一緒に家の中に入つていつた。

「たくもう……ごめんね。ウチの爺ちゃんが」

「……別に、平氣」

爺ちゃんがいなくなつて、ヒトミの口調が元に戻つた。うつむいていた顔も前を向き、お互に眼と眼が合つているのが分かる。

まだ、ほんのり顔が赤いのが少し気になるけど……大丈夫かな？
「それより行こう。ここじゃあ邪魔になるから、いつもの場所で！」
「う、うん、分かったよ」

すごい早口で話すヒトミに、俺は反射的に応えて後を追つた。

* * *

ヒトミが向かつた先は、ヒトミと初めて会つた公園だつた。

「それで何すればいい？ ヒトモシを使つたおまじないって聞いたけど……」

「うん、ちょっと待つて」

ヒトミはさつき見せてくれた古い本を開き、ペラペラとページをめ

くる。

「古代よりヒトモシやシャンデラの火、あとゴーストポケモンの【おにび】は、様々な儀式に使われたと言われているの」

ページをめくりながらニヤリと笑うヒトミのその姿は、かわいくもあるが、少し不気味だ。

あと、これは昔からのクセで、本人は全然気づいてないみたいだが、オカルトの話をしている時のヒトミは、少し口調が強くなる。

「儀式つて？ 雨乞いとか？」

「それもあるけど、よくあるのは呪いの儀式ね。古代の戦争では、呪いで相手の君主を殺すことも少なくなかつたらしいから……」

「……前から思つてたけど、ヒトミつてサラツと怖いこと言うよね？」

しかも、ニヤツと笑いながら……。

もう慣れたから良いけどね。

「でも安心して。今からやるのは、人を呪い殺したりする類いのものじゃないから」

「……ああ、うん、それなら安心だ」

安心……していいのかな？

「ふふふつ。今からやるのは……そうね、言うなれば『厄除けのおまじない』よ」

ヒトミはページをめくる手を止め、最終確認といった感じで開いたページを軽く流し読みした。

読み終えると「よし、不備はないわ」と言つてパタンと本を閉じ、手招きしてヒトモシを自身の近くに呼ぶ。

「ヒトモシの火は、ヒトカゲのしつぽの火とかと違つて、周りにいる生き物の生命力を吸い取つて燃えていると言われているの」

またサラツと怖いことを……。

「……そうなの？」

「モシモシー」

俺が顔を向けて訊ねると、ヒトミのヒトモシは『そうちらしいぞ』と笑いながら応えた。その頭にはいつもと変わらず、青紫の火が灯つている。

どうやら本人（ヒトじやないけど）には自覚がないらしい。

「ええ。だからヒトモシの火は、触つても火傷したりしないわ」

ヒトミはその場でしゃがみ込み、ヒトモシの火に触れるように頭を撫でながら「えへへっ」と笑った。

いつも見ている光景だが、改めて見ると少し異様、いや、不思議な光景だ。

……可愛いんだけどね？

やがてヒトミはヒトモシの頭から手を離し、撫でた手を「ほらね」と俺に見せる。その手は火傷することもなく、相変わらず、ほつそりとした白い手のままだ。

火傷しないのは良いけど、大丈夫なの？

血行が悪くなつたりしてない？

「大昔の人たちは、こういうゴーストポケモン達が出す火に神秘を感じて、儀式や祭事に用いてきたの。一説には、その火の中に身を置いて靈界への扉を開いていたという話もあるわ」

「……うへえ」

“身を置いて”って、生け贋のことじやないよね？

そう考えた俺は、思わず顔を歪ませた。

「この本にはヒトモシの火を使って炎いを払う方法が書かれてたわ。ある霊能力者は、この方法で人やポケモンに憑いた悪いゴーストポケモンや幽霊を払つていたらしいの」

「へえ、それはスゴい……」

スゴいけど、ゴーストポケモンつて人にとり憑くの？

あつ、でもゲンガーとか人の影に潜むとかいうし、無くはないか

……。

幽霊は……。

…………ちよつと、よく分からない。というか知りたくない。

というのも、前にヒトミと一緒に『あなたは違う……』ってタイトルのホラー映画を見てからといふもの、俺は幽霊に関する話が、ちよつと……いや正直、かなり苦手になつた。

ヒトミが言うには、現実に幽霊は確かに存在していて、場合によつ

ては周囲に影響を与えてくるらしいけど……。

ホント、勘弁してほしいなあ。

「ちなみに、これをすれば一時的に靈界に行くこともできるって話もあるわ」

「そりなんだ。なんだか怖いから、できればそれは遠慮したいなあ。あははは」

「そう? 私としてはこっちの話の方がとても興味があるけど……」

ヒトミはニヤリと笑いながら、本を仕舞つた。

「それじゃあ早速、やつてみましよう」

「お、おおー」

「ラルー」

「モシー」

ヒトミに応えるように、俺、ラルトス、ヒトモシは揃つて腕を上げる。

「それで、具体的に何をするの?」

「そんなに大したことはしないわ。『身体の一部』をヒトモシの火で燃やすだけだから」

「えつ……!」

「今日は髪の毛でやつてみようと思うわ」

あ、ああ、良かつた。それなら大丈夫……。

「……はあ、ビックリした」

「ひよつとしてカズヤ、私が腕や足を燃やそうとでも考えてると思った?」

「えつ、あ、えーと……あははは」

ヒトミは目を細め、疑うような眼でジトーっと俺を睨む。

その眼と合わせないように顔をそらしながら、俺は苦笑いした。

やがて、ヒトミの放つオーラに負け、俺は申し訳ないと顔をうつむかせた。

「そ、その、ちょっとだけ……」

「むう、そんなことしないわよ!」

まあ、その、別に本気でそう思つたんじゃないよ。

でも、今までしてきた話が話だつたし……。

「“身体の一部を燃やす”つていうのは、ヒトモシに目に見える形で生命力を与えるつてことなの。だから極端な話、生命が生み出したものなら、なんでも良いの。髪の毛一本だろうが爪の先だろうがね」

ヒトミは手櫛で髪を搔くように髪を撫で、自分の髪の中から1本髪の毛を抜き取つた。

「……カズヤのも1本もらえる?」

「あ、うん」

俺の髪の毛を受けとると、ヒトミは自分のものと結び合わせた。細くて見えにくいが、その結び目は綺麗に纏まつていて、まるでリボンのようだ。

「ヒトモシ」

「モシモシ!」

ヒトミは結んだ髪の毛をヒトモシの青紫色の火の中へやる。すると、一瞬だけヒトモシの頭の火が勢いをまして燃え上がり、髪に燃え移つた。

だが不思議なことに、ヒトミの指にはまったく燃え移つていない。「ホントに熱くないの?」

「ええ、まつたく」

ヒトミは火の玉状に燃える青紫の火を手のひらにのせて、何事もないうように応えた。

やがて火が消え、結んだ髪の毛は姿を消した。

「はい、これで終わり。これで厄は去つて、きっと今夜は靈界へ行く夢が見られるわ。ふふふふつ」

「……あは、あはははあ」

うつとりとした表情で笑うヒトミに合わせて笑つてみたが、顔が引きつって苦笑いになつてしまつた。

「ラルラルー?」

「モシ!」

横ではラルトスが『触つていい?』とヒトモシに訊ねていた。一連のこと見ていて、ラルトスもヒトモシの火に興味を持つたらしい。ヒ

トモシは『いいぞ！』と、ラルトスに向かつて頭を下げる。

せつかくなので、俺もラルトスと一緒にヒトモシの頭を撫でてみる。

「……ホントに熱くないんだねえ」

「ラルう……」

青紫の火に触れても、なんの感触もなくすり抜ける。なのにどうして、さつきモノを燃やせることができたんだろう……本当に不思議だ。

しかし、ここでふと俺の中で一つの疑問が浮かんだ。

「ねえ、このおまじないって俺がいなくても、ヒトミだけで出来たんじゃない？」

俺が訊ねると、ヒトミの身体がピクッと反応した。心なしか表情も硬くなっている。

「そ、それは、やるなら一人より二人の方が良いというか……ほら、実験や検証ではサンプルが多い方が良いって言うでしょ？ それに、力ズヤはもうすぐトレーナーとして旅立つわけだから厄払いしておくのも良いと思うの！」

「……ふーん。まあ、そうかもね」

早口になつてるのが、かなり気になるけど……。

「モシ、モシモシ！」

「へえー」

「モシモシモシ、モシモシ、モシモー！」

「えつ、うそ？」

「なつ、ヒトモシ！ それは言つちやダメえ！ なに言つてるか分からぬけど！」

俺が頭を撫でていると、いきなりヒトモシがとんでもないことを口にした。そのことを聞いて俺は驚き、ヒトミは焦りだした。滅多に表情（特に目元とか）を変えないヒトミがここまで取り乱すのは、かなり珍しい。

ヒトミは急いでヒトモシを抱き上げ、俺から少し距離をとつた。

「うう……」

顔をうつむかせるヒトミは、こっちにチラチラと目を向ける。少しだけ見えたが、顔が『マトマのみ』みたいに赤くなっていた。

「……ヒトモシ、なんて言つたの？」

なんと言つて良いか、あるいは本当に言つてしまつても良いものかと悩むが、ヒトミが弱々しくも「答えて」と言うので、俺はヒトモシの言つたありのままを教えることにした。

『このおまじないは昨日の夜、御主人が見つけたんだ。なんでも、ボクの火を使って、人間の男女がずっと一緒にいられますように、いう御願いを叶えるおまじない』らしいよ！』……だつて

「……かああ

ヒトミは更に顔を赤くした。あともう少ししたら、頭から蒸気でも出てくるんじやないだろうか？

「あ、う……」

「まあ、その……あははは」

真つ赤になつて固まつて いるヒトミに、どう反応していいのか分からず、俺は困つたように笑う。

ヒトミのことばかり気にして いたが、たぶん俺の顔もかなり赤くなつて いるだろう。顔が火照つて いるように感じるし、心なしか胸もドキドキ鳴つて いる。

「ラルう？」

ラルトスが心配そ うな声で鳴き、俺を見上げた。

俺は「大丈夫だよ」とラルトスだけに聞こえるように返したが、感情をキヤツチできるラルトスはあまり信じてい ないようだ。

「……と、とりあえずヒトミ、ヒトモシを放してあげて」

「えつ！ あ、ああーーーめんね、ヒトモシ！」

言われてはじめて気が付いたよ うで、ヒトミは自身の腕の中 でペチペチと暴れていたヒトモシを地面上に下した。

ヒトミの腕の絞めつけから解放されたヒトモシは、「モシモシ、モシー！」と怒った顔で鳴く。ヒトモシの『なにすんだよ御主人！』と言つ 気持ちは分からないでもないが、ヒトミの行動も当然だと思つ。だけどポケモンたちには、まだその辺のデリケートなことは分から

ないらしい。

「……うう」

まだヒトミは顔を赤くして、こつちをチラチラ見てている。

「それで、何でこんなことを？」

单刀直入に話をふると、ヒトミはピタリと動きを止め、さらに顔を下に向かせた。もはや彼女の顔は、垂れ下がった髪でほとんど見えない。

「……だ、だつて後少ししたら、カズヤ、ポケモントレーナーとして旅に出ちゃうでしょ？」

俺は「……うん」とゆつくり頷いた。

「カズヤが旅に出ちゃつたら、当然、会うことも少なくなるだろうし……もしかしたら、そのまま会えなくなるかもしれないし……そんなのイヤだから……」

ヒトミはポツリポツリと自身の本音をこぼしていく。髪で隠れた顔から表情を読み取ることはできないが、彼女の声や言葉、動きの一つ一つから彼女の気持ちが伝わってきた。

「……そつか」

ヒトミの言葉を聞いて、俺もうつむき気味になる。

さつきから顔が熱くて仕方ない。内心でも必死に平静を保とうとしているが、ヒトミが俺と別れるのがイヤつて思つてくれることが嬉しかつたり、会えなくなるかもしれないつて言つたことが悲しかつたり、その気持ちの真意は何かとか、いろいろなことを感じたり考えたりして、心の中がぐちゃぐちゃだ。

「……え、えーと、その……ありがとう、ね？」
「えっ！」

ヒトミは驚いた様子を見せ、顔を上げた。

「おまじないの嘘ホントはさておき、ヒトミがそう思つてくれてるのは、めちゃくちゃ嬉しい」

「えっ！ な、なんで……どうして……！」

俺が心に思つた気持ちを素直に口にすると、ヒトミは理解できないといった顔で、オロオロはじめた。

「だつて私、カズヤをダメすようなことして……」

「ううん。それは気にしてないよ」

「でも……」

「ホントに気にしてない。俺もヒトミとは別れたくないから、ずっと一緒にいられるなら、その方が良い」

「えつ！」

ヒトミは顔を赤く染めたまま、ポカンと口を開いた。

「あ、あの、それって……！」

「あははっ」

どういうこと、と訊きたそうな表情をするヒトミだが、俺は誤魔化すように笑った。

ほんんどヒトミへの気持ちを話してしまったようなものだが、やっぱり“全部”を口にするのは、まだ恥ずかしい。

「ねえ、前にヒトミ言つてたよね。“おくりびやま”に行つてみたいつて！あと、ホウエン地方のどこかにある“そらのはしら”とか、“マボロシじま”とかにも行きたいって……！」

「う、うん……覚えてたんだ」

意外そうな顔つきをするヒトミに、俺は「まあ一ね」と頷く。

「だからさ、ヒトミも一緒に旅に出ようよ！」

「えつ！」

「俺はジムバツチを集めてリーグに出るため、ヒトミは各地の伝承とかを研究するために、一緒にホウエン地方を冒険しようよ」

俺が「どうかな？」と訊ねると、ヒトミは「う、うーん」と思い悩むようにうつむいた。

「その提案は、とても嬉しいけど……いいの？ 迷惑じや、ない？」
「迷惑じやないよ。これまでだつて、ずっとヒトミのオカルトを手伝ってきたんだ。“おくりびやま”に行くくらい、どうつてことないよ！」

「ホント？ 幽霊とかいっぱい出るかもよ？」

「えつ！」

「……それは、まあ、頑張る」

幽霊への恐怖心、克服しなきや……。

「幽霊は苦手だけど、それでも……俺は、ずっとヒトミと一緒にいたいからや……」

「そ、そつか……えへへ」

ヒトミはにつこりと笑った。その笑顔はいつもの独特な笑い方ではなく、とても幸せそうな明るい笑顔だつた。

「だから、一緒に行こう！」

「……うん！」

嬉しそうに笑みを浮かべながら、ヒトミは深く頷いた。

「えへへ、やつたー！」

「わッ！」

突然、ヒトミの顔が近づいてきて、心地好い香りが流れた。急な勢いに押され、後ろに倒れそうになつたが、なんとか耐えることができた。

あまりにも突然だつたため、俺はヒトミが抱きついてきたことに気づけなかつた。ヒトミは俺の後ろに腕を回し、体を俺に密着させる。1秒か、それとも1分だつたろうか、どれくらいだつたかは分からなけれど、ヒトミの体温を感じて、やつとヒトミとの距離がないことに俺は気づく。

「……えつ、あッ！」

ポカポカとしたぬくもりの次に感じたのは、甘い香りと首筋をくすぐるヒトミの吐息、胸元にある柔らかい感触……。

「ヒトミ……は、はずかしいよ」

「あっ、ごめんね」

ヒトミは俺の肩に手をおき、距離をあける。

「つい嬉しくて……イヤ、だつた？」

「う、ううん。イヤじやないよ」

お互に恥ずかしくなり、俺とヒトミは揃つてうつむいた。

「ラルラ、ラルラル！」

「モシモシー、モシつ！」

足元では、ラルトスとヒトモシが『カズヤ、お顔真っ赤』『うれしそ

うだな御主人！』と、俺とヒトミの顔をそれぞれ見上げていた。

「……えへへへ」

恥ずかしそうに頬を染めがらも、ヒトミは嬉しそうに笑う。その表情やしさは、今までに見たこと無いくらいに、可愛いものだった。

「……あははは」

そんなヒトミの笑顔を見ているうちに、自然と俺の顔からも笑みがこぼれた。

＊＊＊

カロス地方出身、オカルトマニアのヒトミ。

彼女は一人の友達と共に、旅に出ることを決めた。

その旅を通して、これから彼女はたくさんのお友達友達 ポケモンと出会うだろう。

そんなヒトミとカズヤの旅は、これから始まる。

裏話：ラルトスのいちにち（短話集）

エピソード1：【起床】

ある日の朝。トクサネシティにある一軒の民家。その二階の窓に掛けられたカーテンの隙間へ陽の光が射し込み、一匹のポケモンを照らす。

そのポケモンは自身を照らす朝日を感じとり目を覚ました。そしてベットの上で上体を起こし、大きく手をあげて身体を伸ばす。

「……ラああ」

幼さを感じさせる可愛らしい鳴き声で、ポケモンは欠伸をした。

そのポケモンの名前は【ラルトス】。服の裾を引っ張ったような白い身体に、目元を隠したおかっぱのような緑色の頭部、その頭部の前後には平たくて赤いツノが生えている。【ラルトス】はそのツノから周りの人間の感情を察知できるといわれ、そのことから【きもちポケモン】と呼ばれている。エスパートタイプとフェアリータイプを持つポケモンだ。

ラルトスは自身が寝ていた布団から出ると、横で寝ているトレーナーの身体を「ラルラル、ラルラー！」と鳴いてペチペチ叩く。

トレーナーの少年、カズヤは「ん？」と声を洩らして眠りから覚めると、のつそりとした動作で身体を起こした。

「……ふわああ」

カズヤは先ほどのラルトスと同じように欠伸をしながら身体を伸ばした。そしてベットに腰かけ、床に降り立ったラルトスに目を下ろす。

「おはよー、ラルトス」
「ラルー！」

『おはよう！』と返すように、ラルトスは元気良く一鳴きした。

エピソード2：【寝起き】

ラルトスのトレーナーであるカズヤは、生まれつきのサイキッカーだ。その名の通り、彼は超能力を使うことができる。エスパータイプのポケモンが使う技^{サイキック}とは少し質が違うが、彼が使える超能力の種類は主に2つ。

「ううーん……」

半開きの眼を擦りながら、カズヤはもう片方の手を動かした。すると、その手につられるようにカーテンがひとりでに動いてシャーツと音を鳴らして全開になる。

『カズヤ、髪ボサボサー』

「んー、そだねえー」

続いてラルトスが「ラルラー、ラルラルー！」と鳴くと、ラルトスの鳴き声がカズヤの頭の中で人間の言葉に変換された。

この2つの能力がカズヤの超能力だ。彼は生まれつきにテレキネシスとマインドコントロールの能力を身に付けており、自身の思念によつて物体を自在に操つたり、他人やポケモンの心に干渉することができるのだ。

「……ふああ、眠い」

ボサボサの髪や若干の涙目と、いかにもな寝起き顔になつているカズヤは、寝巻き用の作務衣のまま、洗面所で顔を洗おうと部屋を出る。その彼の後ろを、ラルトスはちつちつな足を動かしてトテトテといつていつた。

やがて階段に差し掛かると、ラルトスはカズヤを追い越して、くるりと身をひるがえし、彼と向かい合う。

「ラルウ」

「ん？」

ラルトスの鳴き声に反応して、カズヤは視線を下ろす。

『だつこ』

「あーはいはい」

そして彼女の言葉に言われるまま、カズヤはラルトスを抱え、一階

へと降りていった。

身長約40センチのラルトスには、人間に合わせた階段は高過ぎるようだ。

【ねんりき】を覚えているため一人で降りられないわけではないが、こうやつて階段を上り下りするのが、ラルトスは好きだつたりする。

エピソード3：【日課】

顔を洗い、歯をみがき、一通りの身支度を終えたカズヤは普段着用の作務衣に着替えて、リビングへと向かう。ダイニングとキッチンでは、カズヤの母とサーナイトが朝食の用意をしていた。

「おはよー」

「おはよう、カズヤ」

「ラルー、ラルラー」

「サナ、サーナ」

カズヤはお母さんに、ラルトスはカズヤの母の手持ちであるサーナイトに、それぞれ朝イチの言葉をかけた。

『お姉ちゃん、おはよー』

『ええ、おはよう』

ちなみに、これがラルトス達の会話だ。

同種族の進化系であることもあつて、ラルトスはサーナイトを姉のように慕つてゐる。そしてサーナイトもまた、妹のようにラルトスを可愛がつてゐる。ラルトスが家にいるときに、カズヤの次に長く一緒にいるのがサーナイトだ。

「お爺ちゃんが庭で待つてるわよ」

「はーい」

母に促され、カズヤはラルトスと一緒にリビングの掃き出し窓から庭に出た。

庭に出ると、そこにはすでにカズヤの爺ちゃんと彼の手持ちのマネネが立つていた。

「遅いぞお、カズヤ！」

「マネネエー、マネネ！」

腰に手を当て仁王立ちをする爺ちゃんの横で、人の真似が大好きなマネネも同じ動きをする。

「爺ちゃんが早すぎるんだよ。欲を言えば、もつと寝てたいよ」

「バカモン、若いうちからそんな怠けてどうする！」

「いや、いま5時半……スクールもないのにこんな早起きしてる子なんて他にいないよ？」

不満げな眼で爺ちゃんを睨みながらも、カズヤは「んにいー」と声を洩らして事前準備として身体を伸ばす。

そんな彼の隣では、いつの間にか横にやつてきたマネネが「マネー、マネー」とカズヤの動きを真似していた。

ちなみにカズヤの爺ちゃんの手持ちは、マネネ、バネブー、ネンドール、チリーン、フーディンだ。後ろになるほど古株でレベルも高い。「よし、では今日も張り切つてやるぞおー！」

爺ちゃん、カズヤ、ラルトス、マネネと一列に並び、爺ちゃんがしわがれた声を張つてそう言うと、カズヤは「おおー」と抑揚のない口調で返し、ポケモンたちはそれぞれ「ラルーー！」「マネーー！」と元気に鳴いた。

「イーチ、ニー、サーン」

「ヨーン、ゴー、ローク」

「ラール、ラール、ラール」

「マーネネ、マーネネ、マーネネ」

そして二人と二匹はそれぞれ声を合わせながら、ゆっくりと全身の筋肉を伸び縮みさせる。

体操で身体をほぐした後、座禅を組んで瞑想をする。これがサイキッカーとしての修業だ。

この早朝の体操と瞑想が、カズヤ達サイキッカーの日課であつた。

エピソード4：【いつも一緒】

朝御飯を食べ終わり、今日もカズヤとラルトスの一日が始まつた。

『カーズヤあー！』

今日は何をしようかとリビングに立つて考えていたカズヤに、ラルトスが飛びついた。カズヤは突然背部を襲つた衝撃に思わず「うわッ！」と声を洩らしたが、なんとか耐えた。

「な、なに？」

『あそぼー！』

「良いけど、急に飛びつくのはできれば控えてね？」

カズヤは苦笑いしながらラルトスに言い聞かせた。

「マーネネえー！」

「グヘエ！」

直後、マネネがラルトスの真似をして、カズヤに飛びついた。ポケモン2体分の体重に耐えきれず、ついにカズヤは床に倒れた。

『カーズヤあー、あそぼー！』

「分かつた、分かつたから。はやく降りてえ……」

エピソード5：【熟練エスパー】

遊ぼうと言つてラルトスの真似をして飛びついてきたマネネだが、やがて爺ちゃんと一緒に散歩に出掛けていった。

「ほっ！」

「ラル！」

そして今、カズヤとラルトスは自身の超能力を使つた積み木遊びをしている。これは両者が念力（カズヤはテレキネシス、ラルトスは【ねんりき】）で積み木を高く積んでいき、より高く積んだ方が勝ちという遊びだ。積み木を上に置くほど、慎重に積み木を動かさなければならなくなるので、かなり精密な制御を必要とする。

「……んー、よつ！」

「ラアールウー。ラル」

カズヤはタワー状に、ラルトスはアーチ状に積み木を置いていく。二人ともそれなりに高く積み上げ、そろそろ高いところに置くのが難しくなつてているようだ。特にまだ【ねんりき】の精密動作性が不安定

なラルトスは置くペースもだいぶゆっくりになつていてる。

「フイー」

『あ、エーフィ姉さん！』

そんな遊びをしていると、どこからかエーフィがやつてきた。このエーフィはサーナイトと同じくカズヤの母の手持ちである。ちなみに母の手持ちは全部で3体いて、残りの一匹はチルタリスだ。

『ごめんあそばせ、邪魔するわね一人とも』

「んー、全然いいよ。でも気を付けてね」

エーフィはラルトス達に断るように鳴き声をあげると、二人の近くを通つて陽の当たる窓際まで行き、その場で丸くなつた。一連の動作にはとても氣品があり、まるで位の高い貴族のような振る舞いだ。

『エーフィ姉さん、日向ぼっこのお昼寝、暖かそう！』

「お昼寝というか、この時間だと一度寝じゃないかな？」

二人は手を止め、窓際でぬくぬくとした様子で休んでいるエーフィを見る。

口調と振る舞いのせいでお嬢様育ちと思われそうな彼女だが、意外にも元は野生のポケモンである。野生のイーブイだつた頃は同じ野生の【ポチエナ】や【ロコン】と、よくバトルしたりと、結構ヤンチャだつたらしい。

カズヤの母さんにゲットされてからは、穏和な生活に慣れ親しんでいる。そして普段は今のように日向で丸くなっていることが多い。

「さてと、じゃあ続き……つて、おオ！」

『わー、すごーい！』

積み木遊びを再開しようとした二人は、振り返つてそれぞれ驚きの声をあげた。そこにはさつきまで歪に積まれていた積み木のタワーとお家が、お城（西洋）の形に綺麗に積み上げられていた。その出来栄えに、ラルトスはパチパチと手をたたく。

その積み木の城は二人が目を離しているスキにエーフィが【サイコキネシス】で積み上げたものだつた。

その一瞬のサイキック技の使用は、熟練エスパーだけがなせる技だつた。

エピソード6：【シンクロ】

ポケモンにはそれぞれの種族・個体に「とくせい」というものがある。例えば、カズヤのラルトスは「トレース」というとくせいを持つおり、これは『対面したポケモンのとくせいと同じものを得る』というとくせいだ。

この【とくせい】というものはポケモンであれば皆必ず身に付けているものであるため、当然、一人のそばにいるエーフイも持っている。そのとくせいは【シンクロ】と呼ばれ、その効果は『自分が状態異常になつているときに、相手も同じ状態異常にする』というものだ。

最近、ポケモンスクールでそれらについて学んだカズヤは遊んだ積み木を片付けながら、目の前の光景を見て、ふと疑問に思った。

(ひよつとして『ねむり』も、【シンクロ】できるのかな……?)

彼の目の前では、スヤスヤと寝ていたエーフイを枕にして、ラルトスが眠つている。二人とも非常に落ち着いた寝息をしており、適度な日の光が射していることもあって、とても気持ち良さそうだ。

日の射す窓際やソファー、ベット、カズヤのお母さんの膝の上などと、場所に違いはあるが、その二人の添い寝姿はラルトスがこのウチに来てからというもの、よくよく見かける光景だ。

そして、そのあまりにもよく眼にする微笑ましい光景に、カズヤは一人、あらぬ勘違いをするのだつた。

エピソード7：【ベストポジション】

「ラルトスー、出掛けるよー！」

「ラルー！」

お昼御飯を食べて、出掛ける準備を済ませたカズヤは玄関からラルトスを呼んだ。

「ラルラルラーー！」

家の奥から返事が聴こえ、やがえラルトスがトテトテと走つてき

た。そして玄関まで来ると、そのまま飛び上がってカズヤに抱きつき、身体をよじ登つて頭の上にのつた。

一連の流れから、カズヤは内心でこつそりと思う。

(今日は過去最速だつたなあ)

また、こうしてラルトスによる『カズヤ登り』のタイムが更新された。

エピソード8：【友達】

家を出て二人がやつてきたのは、いつもの公園だつた。この公園はそこそこ広いこともあつて、近所の子供や大人達だけでなく、野生のポケモンや他の街から来たトレーナーもよく見かけられる。

「ヒトミー！」

「あつ、カズヤ！」

そんな広々とした公園の隅にあるベンチで、ポツンと座つていた少女、ヒトミはカズヤに名前を呼ばれると、スクッと立ち上がつた。

ヒトミはカズヤ達を見ながらニヤリとした笑みを浮かべる。彼女のことを知らない人が見ると、やや不気味ととられるような笑い方だ。

そんな彼女の腕の中には、蠟燭のような姿をしたポケモンが一匹。「モシ！」

そのポケモンはカズヤ達が來たことに気づくと、ヒトミの腕の中からはなれ、サッと地面に飛び降りた。

そして同時に、カズヤの頭の上にいたラルトスも彼の頭から飛び降りて、そのポケモン、ヒトモシの元へ走つていった。

「ラルラルー、ラルラー！」

「モシモー、モシモシ！」

ラルトスとヒトモシは楽しげに手を打ち合つた。

ヒトモシがジャンプしてハイタツチ、その勢いにのつてラルトスが一回転して、もう一回ハイタツチ。

最初は空振りしていたその挨拶代わりのアクションも、今ではすっ

かり慣れたモノである。

エピソード9：【ふたりは仲良し】

しばらくの間、カズヤとヒトミは一緒にベンチに座つて、楽しくおしゃべりをした。

「それで、アローラっていう地方には【ミミツキユ】ってポケモンがいて……！」

「へえー。そんなポケモンもいるんだ」

「そうなの。それでね、そのアローラには独自の進化をしたポケモンもいて……！」

「うん……えっ！ エスパータイプの【ライチュウ】とゴーストタイプの【ガラガラ】？ なにそれチョー見てみたい！」

二人が仲良く会話している近くでは、ラルトスとヒトモシも、二人と同じように楽しげに語り合っていた。

「ラルラール、ラルう！」

「モシモシ」

「一匹^{ふたり}はお互に鳴き声をあげて、コミュニケーションを取つてい
る。

「ラルルー！」

「モシシフ」

以下、訳……。

『今朝ね、【ねんりき】で積木遊びをしたんだ』

『【ねんりき】で？』

『うん、手を使わいで【ねんりき】だけで積木を積み上げてくる。それでね、たくさん積み上げて、ちっちゃい“おうち”を作ったんだ』

『へえそれはそれは、大変だつただろ？』

『ちょっとだけ……。でもその“おうち”は、最後は“おしろ”になつたんだよ！』

『随分と出世したんだなあ』

無邪気に話すラルトスと、その話を少し落ち着いた様子で聞くヒト

モシ。その光景はまるで仲のいい兄妹のようであつた。

エピソード10：【ふたりでも仲良し】

ラルトスはカズヤのポケモンで、ヒトモシはヒトミのポケモンだ。なので当然、ラルトスはカズヤのそばに、ヒトモシはヒトミのそばにいることが多い。

「えへへ、やつぱりヒトモシの時とは違う感じがする……」

「そうだな。意外とヒトモシって、ラルトスより軽いんだな……」

「ラルッ！」

「モシシー！」

しかし今、「たまにはどう？」というカズヤの提案から、ラルトスはヒトミの膝の上に、ヒトモシはカズヤの膝の上にそれぞれのつていた。

「ラールー、ラルラルラーー！」

「ああ、ごめんごめん。無神経だつた」

「ラルう！」

ラルトスは頬を膨らましながらカズヤを睨み付けた。

「あつ！」

「ん、どうしたの？」

「いや、その……私、ラルトスの眼つて初めて見た、かも！」

「ああ、なるほど。普段は隠れてるから……」

理解した様子でカズヤは小さく頷く。

ヒトミは物珍しそうにラルトスの顔を見つめた。

「……ラルう」

すると急にラルトスは自身の手で顔を覆い、身を縮めた。

「えつ？」

「あはは」

突然の反応に、ヒトミはキヨトンとするが、ラルトスの反応の意味

が理解できたカズヤは、面白そうに笑う。

「じつと見られて恥ずかしいってさ」

「あつ……『めんね?』」

「ラール」

ヒトミが頭を下げて謝ると、ラルトスは『いいよ』と小さく返事をした。

彼女たちの一連のやり取りを見た後、ここでふとカズヤはあることを見つた。

「そういうえば俺も、ヒトモシの右のほうの眼って見たことないなあ……」

「モシシーモシモシモ!」

カズヤが目線を下げて自身の膝の上にいるヒトモシに目をやると、当のヒトモシは『べつに普通だぞ』と何ともなさそうに顔をあげた。『そなんだ。【サマヨール】みたいに、実は单眼なんじやないかなあとか思つたんだけど……』

『【ランプラ】や【シャンデラ】は、両目あるじゃん!』

さも当然といったように、ヒトモシはあっさりとした口調で言った。

「ランプラ? シャンデラ?」

『【ランプラ】と【シャンデラ】は、ヒトモシの進化したポケモン……』

「へえ、そなんだ!」

聞き慣れない名前にカズヤが首を捻ると、横で聞いていたヒトミが教えてくれた。

『ダンバル』のように進化の過程で眼が増えるポケモンもいるが、ヒトモシがいうには、蟻が垂れたような頭部の裏にはちゃんと眼があるようだ。

「……んーー、うんん?」

「モシシイー!」

しかし、その後いくらヒトモシを観察しても、カズヤには、その右眼を見るることはできなかつた。

楽しい時間が終わるのは、あつという間だ。

いつの間にやら陽が暮れて、子供たちは家へ変える時間になつた。

「それじゃあ、また明日……！」

「うん、またなー！」

「ラールー！」

「モシー！」

公園で遊んでいた周りの子供たちが帰っていくのと同じく、カズヤたちも手を振つて別れ、家へ帰る。

「ラールー！」

「ん？」

帰り道、ふとラルトスは【ねんりき】を使ってカズヤの頭に乗つた。

「好きだよね、頭に乗るの……」

『うん。ここから見る外の景色、けつこう好き！』

「ふーん……。じゃあ、はやく進化しないとな。サーナイトになつたら今よりも高い位置から景色が見えるぞ」

「……ラルルウ」

カズヤの言葉に、ラルトスは不満げな声で鳴いた。

「どうした？」

『むう……自分が高くなるより、こうしてカズヤの頭から見る方が良い！』

「なんで？ 何か違ひがあるの？」

『うーん、よく分からぬけど……これが私の、ゴールデンタイム？』

「ベストポジション？」

『そうそれ！ ベストポジションってやつなの！』

少し天然なラルトスの言葉に、カズヤは「あつそう……」と苦笑いするのだつた。

エピソード12：【また明日】

家に帰つてしばらく経つた後、カズヤたちは家族や他のポケモン達と一緒に晩御飯を食べた。

その後、少しリビングでゆつたりと過ごし、お風呂に入つたり、歯を磨いたり、夜の瞑想をしたりしていたら、あつという間に時刻は十時を過ぎていた。外の遠くの方では【ヨルノズク】や【ヨマワル】の鳴き声が聴こえる。

「……ラああ」

カズヤがリビングのソファーでのんびりテレビを眺めていると、ふと隣にいたラルトスがアクビをした。

「そろそろ寝ようか」

ラルトスがウトウトしているのに気づいたカズヤは、テレビの電源を消してソファーカラ立ち上がる。

「ほら、おいでラルトス」

「ラルウ……」

張りのない声で鳴き、ラルトスはカズヤに向けて両手を上げた。カズヤはその動きに応えるようにラルトスを抱えあげると、そのまま自分の部屋へ向かった。

「おやすみ、ラルトス」

『おやすみい、カズヤあ』

部屋の照明を落として、カズヤはラルトスと一緒に寝床に入つた。やがて二人は眠りにつき、スヤスヤと小さな寝息を洩らす。

「ラルウ……」

「……んう」

ラルトスはカズヤの方へゆっくり身をすらし、カズヤはそばに来たラルトスを優しくつつむように腕をやつた。こうして、今日もラルトスはカズヤの胸の中で心地よく眠るのであつた。

「……ラルルう」

ラルトスは、とつても、幸せそう！

——づく。

裏話：オカルトマニアのレポート

○月 α 日 晴れ

パパのお仕事の関係でカロス地方から、ここホウエン地方に引っ越ししてきて、今日で3日目。

私の住むことになつたトクサネシティは、ホウエン地方本島から少し離れた小島にあつて、前に住んでいたミアレシティよりもだいぶ田舎な町。だけど、来る途中で見た海の景色や町の様子は綺麗に澄んでいて、とても気に入つた。

ポケモンの種類も、カロス地方とは違うこの地方特有のポケモン達がたくさんいるから、見ていて楽しい。

ヒトモシなんて、昨日さつそく家の近くにいた野生のポケモン（【ジグザグマ】という名前らしい）と仲良くじやれあつていた。

私も、あんなふうに友達ができたら良いなあ……。
よし、頑張ろう！

——数日後。

○月 β 日 晴れ

ここ何日かずっと、新しい部屋の片付けとかママと一緒にお買い物に行つたりとか、新しいお家で暮らす準備に忙しくて、全然遊べなかつた。

でもその準備も、昨日ようやく終わつた。だから今日は近所にある公園に行けば、私と同い年の子あるいは年の近い子にたくさん会えるかもしれないし、友達もできるかもしない。

そう思つて、いざ公園に行つてみたら、公園には私と同い年くらいの子達が5、6人いた。

でも皆、すでにそれぞれの友達や自分のポケモン達と仲良く遊んだ

りおしゃべりしたりしていく、とても私が話しかけるような雰囲気じゃなかつた。

しばらくベンチに座つて話しかけるチャンスが来ないか待つていたけど、そんなチャンスは来なかつたし、向こうから声をかけてくることもなかつた。

それどころか皆、ベンチに座つている私を見ると、すぐに遠くにはなれて行つてしまふ。

ひよつとして、私が他の地方から来たから避けられてたのかな……？

だけど、一緒にきたヒトモシは公園にいたポケモン達（「プラスル」と「マイナン」って名前のポケモンみたい）と仲良く遊んでいたし、そういうわけでもないみたい。

少し悔しいけど、まだ始まつたばかり……。

絶対、友達作るもん！

○月々日 晴れ

お昼過ぎ、今日も昨日と一緒に公園に遊びに行つた。公園には昨日と同じく、年の近そうな子が4人くらいいた。

今日は勇気をもつて、遊んでる子たちやおしゃべりしている子たちに話しかけてみた。

だけど、みんな私が声をかけると「ひつ！」とか「きやー！」とか顔を引きつらせて逃げていつた。

どうしてだろ……？

私つてそんなに怖い顔してるかな？

途中からなんだか胸がモヤモヤして、悲しい気持ちになつた。

今日は、早めにお家に帰つた。

○月々日 曇り

今日も公園に行つた。けど今日は、ずっと公園のベンチに座りっぱないしだつた。

昨日みたいに遊んでる子たちに声をかけようかとも思つたけど、逃

げられるのが怖かったから、やめた。

今日もヒトモシは、着いてそうそう公園にいる野生のポケモンたち（【ネイティ】と【エネコ】つて名前みたい）と遊んでいた。

どうすればヒトモシみたいに友達ができるんだろう……。

そんなことをずっと考えていたら、すっかり日が暮れてしまつた。私、このままで友達できないままなのかな……？

○月 日 晴れ

今日、はじめて友達ができた！（やったー！）

その子はカズヤという名前の男の子で、【ラルトス】つていう小さな

ポケモンを連れていた。

カズヤは、私が昨日みたいに公園のベンチに座っていると、隣に座つて話しかけてくれた。最初は私もビックリしてうまく話せなかつたけど、そんな私に、カズヤはイヤな顔ひとつしなかつた。

それから私とカズヤはお互いのことを話し合つた。

カズヤはサイキッカーで、物を浮かせたりヒトやポケモンの心を読んだりできるみたい。「やつて見せて」つてお願ひしたら、本当にモンスター・ボールを浮かせたり、私の考えてることを当てるみしてくれた。（ずっと心を覗かれてるのかと思つたけど、普段は心を読まないようにしてるみたい）

このトクサネシティではサイキッカーは珍しくないつてカズヤは言つてた。そのお陰か、カズヤは私が靈能力が使えるつて言つたときも、すぐに信じてくれた。（また嘘つき呼ばわりされるんじやないかつて思つたけど、受け入れてもらえて、すごく嬉しい！）

カズヤは他の子達みたいに私を怖がつたりしない。「どうして？」つて訊いてみたら、カズヤは「別に怖いとは思わないよ」つて言ってくれた。次に「どうして、みんな私を怖がるのかな？」つて訊いたら、カズヤは少し考えた後に「前髪で顔がよく見えないからじゃない？」だつて……。（でもそれって、ラルトスとあまり変わらないような……？）

そう言われたから、ためしに前髪を上げてカズヤに見てもらつた

ら、カズヤは「うん、可愛いよ」って言つてくれた。（嬉しかつたけど、なんだか少し恥ずかしかつた……）

帰るとき、「また明日も遊ぼう」と言おうとしたら、カズヤの方から「明日も一緒に遊ぼうよ」って約束してくれた。（あまりにもタイミングが良かつたから、ひょっとして心を読んだのかな？　でもどつちにしてもスゴく嬉しかつた！）

明日は何して遊ぼうかな？

明日がすごく楽しみ！

——数週間後。

□月 α 日 晴れ

今日はママと一緒に美容院に行つた。はじめての美容院で少し緊張した。

前にカズヤから前髪を上げたときに『可愛い』と言つてくれたのを思い出して、美容師さんに目元を見えるようにしてもらつた。（美容師さんと眼が合つたときに「ひつ！」ってビックリされたけど、アレは何だつたんだろう？）

そして、帰りにママからカチューシャを買つてもらつた。そのときママが「これで愛しのカズヤ君もイチコロよ！」って親指を立てて言つてたけど……そだつたら嬉しいな。

明日、カズヤに会うのが楽しみ。

□月 β 日 晴れ

今日、カズヤに髪型を褒めてもらつた！

カズヤは会つてすぐに「髪型、変えたんだ。可愛いよ」って言つてくれた。やつぱりカズヤに褒めてもらうと、とつても嬉しくて、胸がポカポカする。

どうしてかは、分からぬけど……。

□月 γ 日 晴れ

今日、また友達ができた。しかも、一気に2人も！（やつたね！）
その子達は、フウとランつていう双子の姉弟で【ルナトーン】と【ソルロツク】つていう珍しいポケモンを連れていた。（ランがお姉さん、ルナトーンのパートナー。フウが弟くん、ソルロツクのパートナー。
けど双子とあって、二人ともあまり姉とか弟とか意識していないみたい

い）
二人とはお互いのポケモン（ヒトモシとラルトス、ルナトーンとソルロツク）がじやれあつて、その流れで色々話すようになり仲良くなつた。

最初、フウとランは私を見て皆みたいに「ひつ！」と怖がつて距離をあけていて、私もビクビクしてうまく話せなかつたけど、カズヤが仲介に入つてくれたおかげで、次第に話しかけてくれるようになつた。フウとランはお互いに以心伝心ができるみたいで、しゃべる時は『一人でひとつずの言葉を交互に話す』という変わつたしやべり方をしていた。

カズヤは同じエスパートタイプ使いとあつて一人とは波長があつたみたい。

二人（特にラン）とお話しして笑つてゐるカズヤを見ていたら、なんだか胸の奥がチクリとした……気がした。

あのチクチクした感じは、一体何だつたんだろう？

□月Ω日 晴れ

昨日の夜、フウとランと友達になつたことをママに話したら、ビックリすることが分かつた。

なんと二人はこの街のジムリーダーだつたらしい。

それを今日、カズヤに教えてあげたら、カズヤもビックリしていた。

——数日後。

□月δ日 晴れ

今日はカズヤと『伝説のポケモン』と『幻のポケモン』について

調べた。

もともとは「いつか仲間にしたいポケモンは何?」っていう話をしていたんだけど、それがいつの間にか伝説のポケモンのお話になつて、急遽、図書館に調べに行くことになつた。（ちなみに、前半の話題の答えは、私が【ミミツキユ】、カズヤは【ニヤオニクス】だ。図鑑で調べた結果、お互いにホウエン地方にいないポケモンだと解つて少しガツカリした）

カロス地方だと【ゼルネアス】や【イベルタル】、【ジガルデ】っていうポケモンの伝説を聞いたことがあつたけど、ホウエン地方には【カイオーガ】と【グラードン】、【レックウザ】と呼ばれるポケモンの伝説があるみたい。

そして、なんでも宇宙センターの近くに置かれている『白い石』には幻のポケモンが隠れているなんていう噂話もあるらしい。いつかじっくり調べてみたいな。

できれば、カズヤも一緒に……。

——数週間後。

×月×日 晴れ

今さらだけど、カズヤと会つてからというもの、ずっと二人で遊んでばかりだ。

たまにフウとラン達とも一緒に遊んだりするけど、それでもカズヤと遊んでる日数と比べたら、4人で遊んでる日は（二人がジムリーダーであることもあつて）とても少ない。

昨日カズヤと別れてから、ふとそのことが頭を過つて、なんだかちよつと不安になつた。

『遊ぶ時やトレーナーズスクールに行く時、図書館や本屋にオカルト本を探しに行く時とか、その他にもいろいろ……カズヤはずつと私と一緒にいて、イヤに思つたりしてないのかな?』

そんな小さな疑問を心苦しく感じた私は、今日、思い切つてカズヤに訊いてみた。

そして不安そうに訊いた私は反対に、カズヤは「え、全然。むしろヒトミがイヤになつたりしてない?」って言つてくれた。

私は、『このままカズヤと一緒にいて良いんだ』と、思いつきり（そしてこつそりと）喜んだ。

——半年後。

◎月 a 日 晴れ

今日はカズヤと一緒に、前から気になつていた宇宙センター近くにある『白い石』を調べに行つた。

事前に調べたところ、『白い石』には私が聞いた伝承以外にも色々な伝承があつて、あることをすると【ジラーチ】というポケモンが現れて願いを叶えてくれるだとか、宇宙から来たポケモン（ロンドという博士はこのポケモンを【テオキシス】と名付けていた）が現れるだとか言われている。

けど実際に調べた結果、特に何もなかつた。宇宙センターの人にも話を聞いたが、宇宙飛行士たちの安全を祈願に置いたものらしくて、ホントにただの白い石だつたらしい。

期待した結果がなくて少し残念だつたけど、『白い石』を調べている途中、ダイゴさんという妙に身なりの良い石マニアの人と会つた。ダイゴさんは、ホウエン地方各地を飛び回つて『石の研究』をしているらしく、『白い石』を調べていた私たちが気になつて声を掛けたらしい。地質学者かと思つたけど本人が「珍しい石が大好きだけ」つて言つてたから、ホントにただの趣味みたい。

オカルト好きの私が言うのもなんだけど、少し変わつた人だと思う。

それから私とカズヤは、ダイゴさんといくつかおしゃべりをした。（といっても、私は人と話すのが苦手だから、ほとんどはカズヤが喋つてた）

ダイゴさんは石だけじゃなくてポケモンについてもかなり詳しくて、ホウエン地方にはいないヒトモシのことも知つていた。

別れ際、ダイゴさんはカズヤと私を見て、「君たちはいつかきっと良いトレーナーになるよ」って言ってくれた。

なんとか分からぬけど、ダイゴさんのその言葉には、とても説得力があった。

ひよつとしてダイゴさんつて…………占い師？

——数日後。

▽月^々日 曇り

今日、カズヤからポケモントレーナーとして旅に出ることを聞いた。

いつ出るのって訊いたら、『あと3ヶ月後には、出ようと思つてる』ってカズヤは答えた。随分と急だと思つたけど、トレーナーになつて旅に出ること自体は、ずっと前から考えていて、旅に出る日は昨日決めたみたい。

10歳（成人）になつた子がポケモントレーナーとして旅に出るのは、そう珍しくない。でも、私はゴーストポケモンの研究者になりたいから、ポケモントレーナーとして旅に出るつもりはない。それに、パパとママが許してくれるかどうか分からぬ。

ということは必然的に、私とカズヤはあと3ヶ月後には離ればなれになつてしまふ……。

なんでだろう……。そう考えた途端、まるで心臓に重りでもついたよううに胸がモヤモヤした。（ここ最近ずっと胸が重いなあつて思つてたけど、そのことを考え始めた時を境に、もつと強く感じるようになつた）

カズヤが旅に出て、カズヤと別れるのは寂しい。でもそれもカズヤがトレーナーとしてハウエン地方を巡る一時だけのはず……。

けどそう考へても、なお胸のモヤモヤは無くなるどころか、時間が進むにつれて大きくなつてくる。

なんでだろう……？

まだ3ヶ月先のことなのに……。

カズヤは帰つてくるつて解つてゐるのに……。
一生の別れでもないのに……。

また会えるつて解つてゐるのに……。
……カズヤと離れたくないよお。

——数日後。

▽月 ϕ 日 曇り

カズヤが旅に出る日まで、あと2ヶ月と少しどなつた。

それまでに、何とかしてカズヤとずっと要られるように対策を考えないと……。

▽月 α 日 曇り

今日、ヒトモシの火を使つた縁結びのおまじないについて書かれた本を見つけた。

まだ詳しく読んでないけど、これならカズヤと離れても、また一緒にいられるようにできるかも。

明日は、このおまじないについて徹底的に調べよう……。

▽月 α 日 曇りのち晴れ

今日は、とても幸せな一日になつた……。

* * *

「えつと……この後どう書こう、かしら……？」

何年か前から書き始めた日記。その日記の今日のところのページに一言書いて、私のペンを持つ手が止まつた。

ここ最近、ずっとカズヤのことで心が暗くなつてたけど、今日はその不安が一気になくなつて……いや、むしろその不安が幸せに変わつたというか……なんというか、こう……。

とりあえず、今日は、とおーーつてもに、幸せな一日だった。

そのことを日記に書こうとするけど、暖かい気持ちに満たされて、うまく言葉が出てこない。

「……えへへへ

「モシ！」

私が今日の出来事を振り返つて言葉を探してると、すぐ隣まで来ていたヒトモシから声をかけられる。

ヒトモシは私の顔を覗くように見上げていた。

「……顔、ニヤけてる？」

「モシモシ」

ヒトモシは顔をおもいつきり縦に振つて頷いた。

「うう…………えへへ」

恥ずかしくなつて顔を戻したのもつかの間、すぐに口元がつり上がる。

私はヒトモシを抱きかかえ、膝の上にのせた。

「カズヤがずっと私と一緒にいたいって言つてくれたの！」

「モシモシ！」

その場にいたからヒトモシも知つてるだらうけど、ヒトモシは『よかつたな』って言つてるみたいに頷いてくれた。

「それに一緒に旅に出ようつて……！」

「モシ！」

「パパとママも、許してくれたわ……！」

「モシ」

「カズヤはジムに挑戦、私はフィールドワーク。二人でハウエン地方を回るの……！」

「モシモシ？」

「もちろん、あなたも一緒よ……！」

「モシー！」

膝の上にのせたヒトモシは、私の一言一言に楽しげに反応してくれる。

カズヤと違つて私にはヒトモシの言葉は分からなければ、ヒトモシ

も旅に出るのを喜んでるのは理解できた。

「えへへへ」

「モシッシ」

薄暗くした部屋の中で、私はヒトモシと笑う。ひんやりとした部屋の空気とは反対に、私の心はとても暖かい気持ちで満たされていた。あの時、公園でカズヤと会つていなかつたら、私は今こうやって笑つていられたかな……？

フウやランと友達になつてたかな……？

ホウエン地方の伝説のポケモンや幻のポケモンについて調べてたかな……？

幽霊が見えるつてパパやママ達以外に話してたかな……？

髪型とか洋服とか、オシャレしてみようつて思つたかな……？

きつと、どれもやれていなかつた、と思う……。

今まで私の心に幸せをくれたのは、全部カズヤのおかげ……。過去に、そのことについて不安を感じたりしたけど、それでもカズヤは「気にすることないよ」つて言つて、それからもずっと私のそばにいてくれた。

「そういうえば、私、勢いでカズヤに抱きついちゃつたんだ、よね……ああ、うう、顔、あつい」

顔が熱い。胸がドキドキする。でも、どこか心地良い……。

この気持ちが何なのか、数日前までは分からなかつた。けど今なら、分かる……。

きつと、これが、『好き』つていう気持ち……。

そう……いま私の心にあるのは、たつたひとつのみ、シンプルな言葉。

『……大好きだよ、カズヤ』

第1章

1. 旅立ちの話

ついに、この日が来た。

「……よし！」

作務衣の帯をきつちりと締め、俺は椅子に置いていたリュックサックを背負う。昨夜も念入りに確認したが、中に入れた道具類に不足はない。

「ラルウ！」

「うん、じゃあ行こう！」

相棒の【ラルトス】と共に部屋を出る。玄関では母さんと【エーフイ】が見送りのために待ってくれていた。

「忘れ物はない？」

「もちろん。昨日何度も確認したし！」

「そう、じゃあ街に着いたら連絡入れてね。確か、最初に行くのはムロタウンだつたかしら？」

「うん、そのつもり。まあムロタウンまでは、ほとんど船の上だから迷うこともないと思うけど」

「もう。だからって、油断しないの」

「はあーい」

そんなに念を押さなくても、大丈夫だつてば。

「本当に港まで見送りに行かなくていいのね？」

「大丈夫だつて。港まではもうなん十回も行つてるし

心配性だな、まったく……。

「ラルラルウー！」

「フイー！」

俺と母さんの足元でラルトスとエーフイも似たようなやり取りをしていた。二人（2匹？）の場合、親子というより姉妹のような会話を

だが……。

「じゃあ、いってきます！」

「いつてらっしゃい」

家を出て、見送る母さん達に大きく手を振る。

こうして俺は、ポケモントレーナーとしての旅に出た。

俺の名前は、カズヤ。サイキツカー（ポケモントレーナー）だ。そして今日、トレーナーとしてチャンピオンリーグに挑戦すべく、ジムバッヂを集める旅に出た。

目指すは、ポケモンリーグ制覇。

地方各地にあるポケモンジムでジムバッヂを集め、定期的に開催されるポケモンリーグに参加して、優勝して、四天王とチャンピオンに勝つことで、晴れてそのトレーナーはポケモンリーグを“制覇”したことになる。

別名、“殿堂入り”とも言い、ポケモンリーグ制覇はトレーナーとしての憧れであり、その夢へ向かうことは、トレーナーとしての誇りでもある。

今日、この日が、俺の夢への第一歩だ。

そんなわけで、俺は今、トクサネシティの住宅街を走り抜け、港へ向かっている。

『そんなに急がなくても、待ち合わせの時間までは、まだ間に合うよ？』

『そうだけど、ヒトミのことだから、もう着いてるかもしれないし！』
『ああー、ヒトミならありそうだよね』

肩に乗った小さな相棒は、納得した様子でウンウンと頷いた。

相棒は【ラルトス】、俺の唯一の手持ちポケモンだ。

相棒とは彼女が卵から孵った時からの付き合いで、それからずつと日々を共にしてきた。

幼馴染のような、親友のような、兄妹のような……うまく言葉では

表せないが、とにかく、俺にとつてはかけがえのない大切なポケモンだ。

さて何故、今、俺がラルトスの言葉を理解したかというと、彼女が俺の相棒だから……というわけでは（残念ながら）なく、ラルトスがテレパシーを使つたから、というわけでもない。

では何故かというと、俺がサイキッカーだからだ。

サイキッカーとは、いわば超能力者のことで、俺は爺ちゃんの遺伝で生まれつき超能力を持つている。具体的にいうと『テレキネシス』と『マインドコントロール』の使い手だ。

『テレキネシス』は物を自在に操れる超能力で、『マインドコントロール』は人の心を覗くことができる超能力だ。このマインドコントロールの能力を使って、俺はポケモンの鳴き声から気持ちや言葉を察知しているのだ。

ちなみに、エスパータイプのポケモンも似たような技が使えるけど、俺はあくまで人であるため、彼らほど能力を高く行使できない。日常で使うのも、簡単な物を動かすのとポケモンとのコミュニケーションに使うのがほとんどだ。

頑張れば、精神操作をすることもできるけど、あんまりやらない。怖いからな……。

「あつ、やつぱりいた！」

街を抜けて、港が見えるところまで着くと、見慣れた少女の姿が見えた。少女は【ヒトモシ】を抱えて、入口のそばでソワソワした様子で立つっていた。

「おーい、ヒトミー！」

「あつ……カズヤ！」

俺が名前を呼ぶと、ヒトミはこっちを見てニヤリと笑つた。

「ごめん、待つた？」

「ううん……全然……」

ヒトミはブンブンと頭を横に振る。

「本当に？」

「う、うん……待つてない、わ……」

…………あやしい。

「ふーん」

「ホント……ホントに、ま、待つてない、からー。」

少し目を細めてみると、ヒトミは声を強めて返したが、挙動がさつきよりオロオロさを増した。

これは、カマをかける必要あり、だな……。

「じゃあ……心の中、読んでも良い？」

「あ、うう……ごめん、少し待つた」

やつぱり。

「うん、分かつてた」

「…………むうう」

俺がニヒヒと笑うと、ヒトミは眼を細めて頬を膨らませる。

「それで、どれくらい待つたの？」

ちなみに、今は待ち合わせを予定した時間の15分前だ。

「…………30分くらい」

「モシモシモシー！」

「2時間ツ！」

「ヒトモシ！」

また気を使つて嘘をいつたヒトミの腕の中で、サラツとヒトモシが本当の時間を言った。

ヒトモシがバラしたと理解して、ヒトミは抱えていたヒトモシの口を押さえた。

「2時間も待つてたの！」

「うう……うん」

「なんでそんな？」

「それは、えと…………うう…………」

ヒトミはうつむいて返答を躊躇つた。その間に、ヒトモシが彼女の腕の中からすり抜け、地面に降りる。

「その……カズヤと、旅に出るのが、楽しみで……我慢できなくて……はやく、来ちやつた。えへへ」

何かを誤魔化すように、ヒトミは少し口元を引きつらせて笑う。顔

も少し赤くなつていた。

「……そつか」

なんか、そんな素つ氣ない返事しか応えられなかつた。心なしか顔があついし、今のヒトミめちゃくちや可愛いし……じゃなくて。

「ごめんな、待たせちゃつたみたいで。あはは」

「ううん、私が勝手に早く来ただけだから。えへへ」

お互いの恥ずかしさを隠すように、俺達二人は笑い合う。

「相変わらず、仲良しだね二人とも！」

急に聞こえてきた声に、俺とヒトミはビクツと反応して揃つて横を見た。

「あっ！」

「フウ、ラン！」

そこには、俺と同じような服を着た双子の姉弟、このトクサネンティのジムリーダーであるフウとランが立つていた。

二人は俺達の友達で、ヒトミほどではないけど、それなりに長い付き合いだ。ラルトスとヒトモシも、二人のパートナーポケモンである【ルナトーン】と【ソルロック】と友達同士だ。

「見送りに来てくれたのか？」

「うん、せつかく二人が旅を始めるんだから」

「ジムリーダーとして見送りしておかないと……」

「そして、なによりも友達としてね」

俺が訊ねると、二人は交互に話して、最後に声を揃えた。この息のあつた話し方も、一人が双子だから成せるわざだ。最初は違和感があつたけど、今はもう、すっかり慣れてしまつた。

あと、これまでの付き合いで分かつたが、二人が話すときは、フウが最初に話すことが多い。

「ありがとう！」

「……うん、ありがと」

俺の後に続いて、ヒトミも嬉しそうに笑つて礼を言つた。人見知りな彼女とあつて、初めて会つた当初は俺の後ろに隠れて二人と接して

いたけど、今では面と向かって話せるまでになつた。

「カズヤはジム戦、頑張つてね」

「帰つて来た時に、カズヤと戦うのを楽しみにしてるヨ」

「ああ。絶対、強くなつて帰つてくるから！」

宣戦布告するように、俺はグツと拳を立てた。

「そのためにちゃんと」

「ラルトス以外のポケモンも、つかまえてくるのヨ」

「でないとトクサネジムには」

「挑戦できないからね」

「うん、もちろん分かつてる。ちゃんと仲間を増やして、八つ目のバッチに、トクサネジムのバッヂをゲットしてみせるよ！」

「うん、楽しみにしてる！」

俺が宣言すると、二人は揃つてニッコリと笑つた。その笑顔から、二人が本当に俺の挑戦を楽しみにしてくれているのが伝わってきた。ジム戦に挑む順番として、近い順で選べば、自分の街にあるトクサネジムが最初になる。

だけど、俺がトクサネジムに挑戦するのは、八つ目、つまりホウエン地方を回り終わつて、最後にやるジム戦だ。

なぜ俺がトクサネジムを最後にしたのかというと、トクサネジムがダブルバトルによるジム戦を採用しているものもあるが、やっぱり一番強くなつた時に、二人と戦いたいと思ったからである。

トレーナーとして、そして二人の友達として、その方が、絶対に楽しいからな。

「ヒトミも、フィールドワーク頑張つてね」

「う、うん……」

「まずは、オダマキ博士に会うんだつけ？」

「そう」

オダマキ博士のいる研究所は、ミシロタウンにある。そこにはムロタウンに行つた後に向かう予定だ。

「ヒトミがどんな研究をするのかも」

「あたしたちは楽しみにしてるから」

「うん……がんばる、わ」

ヒトミも前に組んでいた腕を胸の前に置き、宣誓のように頷いた。

そんなヒトミを見ながら満足そうに笑い、やがてフウとランは、ジムリーダーらしい引き締まつた顔で、俺とヒトミを交互に見た。

「きみ達には、ぼくたち姉弟にも負けないくらい、強い絆がある」

「そしてラルトスとヒトモシも、あたし達のルナトーンやソルロック

に負けないくらい、あなた達を慕つてくれている」

「ふたりが一緒なら、どんな壁も越えていける！」

「友達のあたし達には、わかるわ！」

「きみ（あなた）達が成長してトクサネシティに帰つてくるのを、楽しみに待つてるよ（わ）！」

今日の目の前の二人からは、同じ年にも関わらず、ジムリーダーとしての貫禄のようなものを感じた。

「うん！」

俺とヒトミは、その言葉に応えるように、一緒に力強く頷いた。

「じゃあ、行つてくる！」

船の汽笛がなり、出航の時間を知らせる。その音を聞いて、俺達は船に乗り込んだ。

やがて船は錨を上げて、港を出発した。船のデッキから友達二人に手を振つていて内に、だんだんトクサネシティの港が小さくなつていく。

こうして、俺達の旅は幕を開けた。

——つづく。

2. 船での話

船は波を立てながら海上を進む。

港を出発した直後は、船の周りに【キヤモメ】や【ペリツパー】がたくさん飛んでいたけど、沖に出たせいか、もうその姿は見なくなつた。

出港してしばらく、俺とヒトミはラルトスとヒトモシと一緒にデッキを散策したり、船の周りにいた【ホエルコ】や【チヨンチー】、【ジユゴン】などのポケモン達を眺めたりしていた。

そして今は船内に入つて、客室スペースに設置されたソファーアーに腰かけている。周りでは他の乗客も、パンフレットを読んだり備え付けの大型テレビを見たりして、のんびりしていた。各乗客の手持ちと思われる【チリーン】や【ルリリ】、【エネコロロ】や【ヘイガニ】、【オオタチ】や【アメタマ】なんかも、その静かな空間に溶け込んでいる。

「ラルう！」

「ん？」

周りのゆつたりした空気を感じながら休んで間もなく、ふと膝の上にいたラルトスが俺の顔を見上げて鳴き声を上げた。

『あつちも見てみたい！』

そういつて、ラルトスは船内の窓の方を手で示した。はじめての船とあつて、まだラルトスは色々と見て回りたいようだ。

「ああ、けどあまり遠くには行くなよ？」

「ラルー！」

「モシモシモー！」

ラルトスの後を追つて、ヒトミのヒトモシも『ボクも行くぞー！』と遊びに付いていった。

好奇心旺盛で、遊び回るのが大好きな二人だが、ちゃんとしているし、いざつて時はラルトスの【テレポート】で帰つてこられるから、迷子になることもないだろう。

「ムロタウンの港に着いたら、まずポケモンセンターに行つて一泊するのよね？」

「うん。混んでなければ、明日にはさつそくジム戦かな」

「いきなりジム戦……大丈夫なの？」

「うん。スクールで何度もバトルについて学んだし、ムロタウンのジムは、かくとうタイプ専門だから、とりあえず負ける気はしないかなあ」

ラルトスは、エスパータイプとフェアリータイプ。かくとうタイプとは相性が良い。

初のジム戦とはいえ、他のジムより有利に戦えるだろう。

「そつか……その後は、どこ行くの？」

「次は……えーと」

俺はリュックサックの中からホウエン地方の地図を取り出して、目の前に広げた。

「とりあえず、トウカシティかな。ジムもあるし、そのままミシロタウンに行くこともできるし……」

ミシロタウンからは、北上して103番道路を通れば、キンセツティに行ける。トウカシティに戻つて、カナズミシティに行くのも良いかもしねない。

「んー？」

俺が地図を広げてルートを考えていると、手に持った地図を覗き込むように、隣に座つていたヒトミが体を寄せてきた。
横を見ると、ヒトミの綺麗な顔があと少しで触れてしまふくらい近くにあつた。

「……ヒトミ、近い近い」

「えっ！」

ヒトミは驚いた表情でこつちを見た。

目と目が合い、お互いの距離が近いことを理解すると、ヒトミは顔を真つ赤にさせて、「あつ！」と慌てて顔を離した。

「……ごめん！」

「い、いや、別に謝んなくても……」

悪い気はしなかつたし……じゃなくて。

「と、とりあえず簡単に説明すると……！」

俺はヒトミに見せるように地図の半分側を差し出した。

「ここがムロタウン。そしてココとココが、トウカシティとミシロタウン……」

「うん……うん……」

「ムロタウンからトウカシティまでは、ムロタウンの港からトウカシティの近くにある港まで船で渡つて、港から歩いてトウカシティに行く。それで……」

「うん……」

お互いの顔の火照りを誤魔化すように、俺はトウカシティ周辺の地図を示しながらミシロタウンまでのルートを説明した。最中、ヒトミはその説明を聞きながら、小さく頷いていた。

ルートの説明自体はスラスラ言えたけど、俺の一個一個の説明に、可愛く……もとい丁寧に頷くヒトミが気になつて、チラチラ見てしまつたのは内緒だ。

これから予定について一通り話し終え、俺達は手持ち無沙汰になつた。船の中とあって、特にやることもない。

「……ふああ

ふとヒトミが手元を隠しながら大きなアクビをした。

「眠いの？」

「……う、うん。少し」

ヒトミは眠気を払うように片目を指で擦る。もう片方の目は半分閉じており、アクビの涙で潤んでいた。

「寝ても良いよ。どうせ夕方までは船の中だし。ヒトモシ達が帰つてきたら、俺が見ておくから」

「……うん。じゃあ、そうさせてもらうわ」

そう言つて、ヒトミはソファーに背をあずけて目を閉じた。

しばらく一人で大型テレビに映つた番組を眺めていると、やがて、

隣から静かな寝息が聞こえてきた。

「……すう……すう」

目を向けると、案の定、ヒトミが穏やかな表情で眠っていた。

「ラル？」

「モツシシー」

ヒトミが眠りについて間もなく、ラルトスとヒトモシが帰つて来た。

ラルトスは俺の隣で寝ているヒトミを見て手を口元に当てて首をかしげ、ヒトモシは『やつぱりなー』となにか納得したように首を振る。

『ヒトミ、寝ちゃつたの？』

『御主人、今日カズヤつちと旅に出るのがよっぽど楽しみだつたみたいで、昨日あんま寝てなかつたからなあ』

またヒトモシが、ヒトミが隠しておいて欲しそうなことを、サラツと暴露する。

彼のこのクセは、俺も反応に困るので少し控えて欲しい……。

「とりあえず、二人とも静かにな？」

「ラルう！」

「モシイ！」

俺の言いつけに、二人は元気に揃つて返事をした。
ホントに分かつてるのか？

「ラル！」

えつ、なに？

「ラああルうう！」

いきなりラルトスが【ねんりき】を使って、ヒトミの身体を動かし始めた。

一体なにをするつもりだ、と思ったのもつかの間、ラルトスが操るヒトミの身体は、頭をソファアの背もたれから俺の膝の上へ来るよう移動した。

「えつ、ちょ、ラルトス何してるので？」

『こつちの方がヒトミが寝やすいと思つて！』

「それは……まあ、そうかもしれないけど……！」

そりやあ、座つて寝るよりか横になつた方が寝やすいだろうけど、恥ずかしいから勘弁してくれ……。

俺はラルトスにたしなめようとしたが、百パーセント善意でやつているラルトスと膝の上で寝ているヒトミを見て、自然と口を閉ざしてしまつた。

「ラールルー！」

「モシシー！」

満足げにやりきつた顔をしたラルトスは、またヒトモシと一緒に楽しげに何処かへ遊びに行つた。

「すう……すう……ん、えへへ……」

体勢を変えられながらも、ヒトミはそのまま気持ち良さそうに寝息を立てていた。けどふと口が緩み、やがて段々と口元がつり上がりニヤけた顔になつた。

「笑つてる……楽しい夢でも見てるのかな？」

多分、ゴーストタイプのポケモンの夢でも見てるのだろう。

【ジュペツタ】でも抱いて、頬擦りでもしてるのかかもしれない。あるいは、【ミミツキユ】かな……。

「……んー」

ヒトミはスリスリと俺の膝を頬で撫でる。

「うう……もう、くすぐつたってば」

その後、ヒトミの頭が動くたび、こそばゆい感触が襲う。小声で文句を言つてみたが、当の本人はあどけない顔で静かに眠つたままだつた。

普段は何を考えているか分かりずらい歪んだ表情で笑う彼女だが、こうして見ると、また違つた角度で可愛く見える。

「えへへえ……」

幸せそうな顔……ホント、どんな夢を見るんだろう。

『マンインドコントロール』を使えば分かつちやうけど、プライバシー侵害が過ぎる。普通にダメだ。

「んん……す、きい……」

唐突なヒトミの寝言に、思わずドキッとした。

「……もう」

いつたい何が好きなんだよ。

オカルト？ ゴーストポケモン？

「まつたくもう……」

ヒトミに心を乱されて、イヤな気はしないが、俺の心は不思議とモヤモヤした。

ちょっとした仕返しに、俺はヒトミの頭を撫でる。

くせつ毛な彼女の髪は、ほとんど摩擦を感じないくらいサラサラしていた。

ヒトミを撫でているうちに、心にできたモヤモヤは少しずつ小さくなつていった。

「……ふああ」

ヒトミの頭をやさしく撫でていると、どことない心地よさからか、俺も眠たくなつてきた。

「…………スー…………スー」

しばらくウツラウツラしていただが、気がつけば俺は、頭を下ろして眠りに落ちていた。

——づく。

3. 良くないことの話

船がムロタウンの港に入つたのは、陽が沈みかけて空がオレンジ色になるくらいの頃だつた。

ムロタウンは“タウン”というだけあつてトクサネシティと比べると、やや小さな街だつた。けど、街中にはとても活気があり、豊かな情景が広がつていた。

風景を眺めたのもつかの間、俺とヒトミはポケモンセンターへと向かい、一晩宿をとつた。

そして翌日、諸々の準備を済ませた後、俺達はポケモンセンターを出た。

「よーし、行くぞー！」

「ラールー！」

俺の気合い入れに合わせて、ラルトスも手を上げる。
ジム戦に向けて、彼女の調子も万全のようだ。

「つて、ヒトミ……何してるの？」

「……今日の占い」

「へえ」

俺とラルトスの後ろで、ヒトミは布越しに持つたモンスター・ボールを、片手でかざしながら見つめている。前にもたまにやつていたモンスター・ボールを水晶玉のように使つた占いだ。

ボールの艶を見るようなヒトミの顔は、知らない人が見たら不気味と取られるくらい笑つていて。そんな彼女の空気に合わせていてのか、彼女の足元でヒトモシも影のある笑みを浮かべていた。

「…………むう」

やがて占いが終わり、ヒトミはなんだ笑みを引つ込め、不服そうに固く口を結んだ。

「どうだつた？」

ヒトミの表情から、あまり良くない結果だと察したが、一応訊いて

みる。

「カズヤと私にとつて、『良くないこと』が起ころるみたいだわ……！」

「良くないことって……ひよつとしてジム戦に敗けるとか？」

「そこまでは分からない。けど好ましくない因果律が見えるのは確か……。私の占いから言えるのは、今日、ジムへ行くのはオススメできないつてことくらい……」

「……そつか」

縁起悪いなあ……。

まあでも、もし今日ジム戦で負けたからって二度と挑戦できなくなる訳じやないし……。

「でも、大丈夫……」

「えつ？」

途端、ヒトミは【でんこうせつか】でも使ったのかというくらい素早く距離をつめて、俺の頭の後ろへ手を回した。

「ちょ、なにを！」

「じつとしてて」

抵抗する隙さえ与えず、ヒトミはグッと身を引き寄せて俺の頭と自分の中をピタツと合わせた。

お互の額が触れ合い、まるで口づけでもするかのような距離だ。なんだか少し甘い匂いもする……気がする。

「I l v e y, y h v e m e, y a n m e a l w y t o g t h r,
c a n d o e v r y i f t w o :」

ヒトミは目を閉じて、呪文のような言葉を優しく透き通った声で呟いていく。

耳でヒトミの声を聴き、顔に吐息が触れて、額で体温も感じる。俺は、その間、心臓がバクバク鳴りっぱなしだった。

「t w l v e s f r e v r……よし」

呪文が終わり、ヒトミはまっすぐ俺の顔を見た。

「え、ええーと……」

「おまじない」

ヒトミはニヤリと笑い、さつきの占いでしていたような笑みを浮か

べた。

「これで、大丈夫よ！」

「そ、 なんだ……」

口ではそう言つたが、もう何が大丈夫か分からぬ。まだ心臓がドキドキしてゐるし、顔が【だいばくはつ】しそう……。

「あ、ありがとう」

「うん！」

俺が礼を言うと、ヒトミの歪んだ笑顔が、【パールル】の真珠のようにキラキラした純粋なものになつた。

「えへへ！」

「…………可愛い」

俺は顔を背けて口元を手で覆い、ボソリと呟いた。
なんかもう、縁起が悪いとか、どうでも良いかも……。

今ので俄然やる氣でた！

「そ、それじゃあ、行こう！」

俺は真っ赤になつてゐるであろう顔を隠すように、ヒトミより少し
だけ前を歩きながらムロジムへ向かつた。

『カズヤ、顔赤いよ。大丈夫？ 風邪ひいた？』

「ううん、大丈夫……ありがとうね」

「ラルルウ！」

途中、ラルトスに心配されたりしたが、その良い感じの優しさと純
粋さに和み、俺はなんとか平常心を取り戻すことができた。

ポケモンセンターからムロジムまでは、そんなに時間は掛からなかつた。

「…………がムロジムか」

俺とヒトミは並んでジムの前に立ち、建物の外観を見上げる。

【同じジムでもフウ達のジムとは、違つた雰囲気だな】

「そうね」

同じホウエン地方のジムだからなのか形とかは一緒だけど、ジムの

シンボルとか色合いとかが少し違う。そして、なによりも感じるオーラというか、風格が少し違っていた。

「頼んだぞ、ラルトス！」

「ラルラール！」

俺は頭の上に乗ったラルトスは『まかせて！』とやる気を示していた。

俺は足を進めてそのまま自動ドアをくぐる。ヒトミもヒトモシを抱えて俺に続く形で中に入った。

「ええーー！」

二人で中に入つた途端、なにやら高い声が中に響いた。すると奥の方で、その声を上げたと思わしき少女とメガネをかけたジムの人らしき女性がなにやら話をしていた。

「ジム戦できないって、どうしてツスかあ！」

「あいにく今日はジムリーダーが不在でして……」
えつ、ホントに……？

「明日なら問題なく挑戦いただけるんですけど……」

「ううう……そうツスか。じゃあ出直してくるツス」

オレンジ色のトレーニングウェアを着た青髪ボニーテールの少女は、見るからにガツカリした様子で、ジムを出ていった。

会話から考えて、どうやら今の彼女もポケモントレーナーで、俺と同じくムロジムへ挑戦しに来たみたいだが、どうやら今日はジムリーダーの不在のためジム戦はできないらしい。

確認のため、俺は少女と話をしていたメガネの女性のもとへ行き、ジム戦について訊ねた。

「えーっと……今日はジム戦できないんですか？」

「ええ、ジムリーダーのトウキさんが別件で不在なの。今日中には帰つてこられないと思うわ」

「分かりました。じゃあ、明日また来ます」

「ごめんなさいね」

事務員さん（あるいは秘書かな？）らしき人は申し訳なさそうにお辞儀をして俺達がジムを出ていくのを見送っていた。

「……はあ」

「……ラルう」

「残念だつたわね」

「モシモシ」

ジムを出て、ジムの人が誰も見てないのを確認して、俺とラルトスは深い溜め息を吐き、肩を落とした。

ヒトミが占いで言つてた“良くないこと”とは、この事だつたのかな……。

「まあ、仕方ないさ。気持ちを切り替えて、明日、がんばろう。な、ラルトス」

「……ラールー！」

ラルトスは俯いていた顔をあげて、元気よく返事をした。その返事をしてくれたことへの感謝に、ラルトスの頭を撫でると、ラルトスは『えへへ！』と口元を緩めて喜んだ。

「この後、どうする？」

「暇になつちやつたね」

まさか一日暇になるなんて……。

敗けてジム戦が長引くのは想定してたけど、暇になるのは考えてなかつた。

修業するのも良いけど、エスパー・タイプの修業は精神的なトレーニングが主で、日々の積み重ねが成果となり、一日しつかりやつたからといって実力がのびるものではない。それに、トレーニング自体は今朝の日課でやつている。

さて、どうしたものか……。

「海岸でも歩いてみようか？」

* * *

俺の提案で、俺達はムロタウン周辺の海岸にやつて來た。トクサネシティも海で囲まれていたが、街の風景と同じく、こここの海岸もトクサネシティの海岸とは違つた趣がある。

「同じ海でも、場所が変われば雰囲気も変わるなあ」

「そうね」

俺はラルトスを頭に乗せ、ヒトミはヒトモシを腕で抱えている。いつものように並んで歩き、俺達はほのぼのとした時間を過ごしていた。

今いる場所は、ムロタウンの住宅街から少し離れている海岸で、ちようど崖のように海から突き出ている岩場とまつさらな砂場が交わる場所だ。

岩場の上を歩くのは危険だろうが、やや離れた砂場から見上げると自然の壮大さが感じられる。波が岩へ打ち付ける光景は、なんだかドラマチックにすら見える。

「……あれ？」

海岸の風景を眺めていると、ふとヒトミが何かを見つけて首を傾げた。

「どうしたの？」

「いえ……あそこ」

ヒトミの指先に沿つて目線を動かすと、岩場の上に人影が見えた。

「あの子つて……」

「ああ、たしかジムにいた……！」

「ラルう！」

「モシモシ！」

よく見ると人影の正体は、さきほどムロジムですれ違つたヘソ出しトレーニングウェアの少女だつた。

俺が洩らした言葉に、ラルトスとヒトモシも肯定する意の鳴き声を上げた。

「ヤツ！ トオ！ ハア！」

少女はここからでも聞こえるほど大きな声を出して、断崖絶壁の上で、格闘技の型稽古をしていた。

「危ないなあ、あの子……」

とても迫力のある稽古姿だが、俺が率直に思つたことは、ソレだつた。

もし足でも踏み外そうものなら、即、海ヘドボンだ。落ち方が悪ければ、命にかかる。

そんなことを思つていた時だった……。

「フツ、ハツ、あーっととドア！」

「なつ！」

少女はバランスを取るのに失敗して崖から落ちた。

「ラルトス、崖下の砂場にテレポート！」

「ラル！」

ラルトスの技を使い、俺は崖の近くに瞬間移動した。そして直後、『テレキネシス』を使って落下する少女へ念力を纏わせた。

「アアアア、ヤバいやばいやばい、ヤバいイイツスうう！」

少女は絶叫しながら落下している。

「クッ！」

『テレキネシス』によつて落下速度は遅くできたが、このままでは海に落ちる！

落下地点の水深がどれくらいか分からないが、浅かつたら危険だ。

「ラルトス、サイコキネシス！」

「ラル、ラああルうううう！」

流石に俺の『テレキネシス』に人を受け止めるだけの精神力はまだ無いので、俺はラルトスに『サイコキネシス』で少女を浮遊させて砂場の上まで運んでもらつた。

ラルトスも【テレポート】を使った直後、すぐに【サイコキネシス】は使えないでの、良い感じの時間稼ぎができた。

「えつ！」

砂場に軽い尻もちをつく形で落ちた彼女は、目をパチクリとさせていた。

表情から察するに、突然のことで何が起こったか分からず、といつた感じだろう。

「大丈夫ですか？」

俺は彼女の様子を伺うように歩み寄る。

『テレキネシス』と『サイコキネシス』で受け止めたとはい、どこ

か怪我でもしていたら大変だ。

少女はポカンとした顔で、こつちを見た。

「あの、どこか怪我とかしなかつたですか？」

「…………うう」

あまりにも反応がなかつたので、再度問いかけたら、突然、少女は眼が潤ませ始め、震えた声をつまらせた。

「うぐつ……ふ、ふえええ！」

「ぐふツッ！」

小さな嗚咽をこぼし、ついに、貯まっていた涙が溢れ、少女は泣き出してしまつた。

それだけならまだ良かつたのだが、少女は泣き出すだけでなく、助けでも求めるように腕を回して俺に抱き付いてきた。

「死ぬかと思ったアアア、チヨー怖かつたツスうう！」

「わかつた！ わかつたから！ はなしてエ！」

この子、見た目通りといふかなんというか、抱きしめる力が強い。率直にいって、かなり苦しい！

背中を軽く叩いたり（タップアウト）したけど、彼女は気づいてくれていないようで、しばらくの間、少女は俺を締めつけながらワンラン泣いた。

この時、なんとなく背中に冷たいものを感じた気がしたんだけど、あれは何だつたんだろう……？

——づく。

4. バトルの話

「いやー、恥ずかしい所をお見せしたツスねえ！」

少女は後ろ頭を擦り、照れくさそうに笑う。

彼女が砂浜に降りてから今みたいに話をできるようになるまで、10分くらいかかりた。その間、彼女は滝のように涙を流してめちゃくちや泣いた。そして、同時に俺の身体をがっしりと掴まえて放さなかつた。

途中から、ヒトミとラルトスとヒトモシが彼女の腕を放そようと頑張つてくれていたが、インドアなヒトミと物理的パワーの強くないラルトスとヒトモシでは、彼女の力に勝つことはできなかつた。

なんかもう締めつけられ過ぎて、身体が痛い。

跡とかついてないよね……？

「私はバトルガールのサヤカ。危ないところを助けてもらつて、ありがとうございますツス。この恩は一生忘れないツス！」

「いや、そんな別に気にしなくとも……」

なんか彼女の頑丈さなら、あの岩場から落ちてもケロツとしてそうだ。

まあでも、怪我もなく無事だつたようで、良かつた良かつた。

「俺はトクサネシティのカズヤ。こつちが同じくトクサネシティのヒトミ」

俺は背後で隠れるように立つてゐるヒトミを示す。俺の服を掴んでることから、ヒトミはいつものように人見知りをしてゐるようだ。フウとランに初めて会つた時も、こんな感じだつたし……。

「よろしくツス！」

少女……サヤカが眩しいくらいの笑顔で挨拶をすると、ヒトミはビクッと反応して、さらに後ろに下がつた。服を掴む力も強くなつて、半ば俺の身体を引っ張つてゐる。

そんなヒトミの反応を見て、サヤカは不思議そうな顔をして首を傾

げた。

「……彼女さん、どうかしたツスか？」

「ああ、いつものことだから気にしないで」

「そうツスかあ……？」

普通ならヒトミの様子が気になる所だろうが、あつさりした性格なのか、サヤカはサラッとした態度で、あまり気に止めなかつた。

(……か、彼女！)

なんか急に背中を引っ張つてゐるヒトミの手がゆつくり揺れだした。

大丈夫かな……。

後ろを見ても、ヒトミが背中の方にいるせいで、顔はよく見えないし……。

「そういえば、お二人は先程、ジムにいた方達では？」

「そうだよ」

「ということは、二人はポケモントレーナーツスか！」

サヤカは前のめりになつてキラキラした眼で、俺達を見た。

ポケモントレーナーなんて、そんなに珍しいものでもないのに……。

なんで、そんな興奮してゐるんだ？

「俺はただけど、ヒトミは違うよ」

「じゃあ、カズヤつていつたツスね、早速バトルするツス！」

そう言つて、サヤカは俺を指で示した後、シャドウボクシングのようく拳を動かした。

「えつ、なに？ バトルつて俺達が戦うの？」

「いやだなあ、ポケモンバトルに決まつてるじゃないツスか！ 私の

ポケモンとカズヤのポケモン、どつちが強いか勝負するツス！」

じゃあ、そのシャドウボクシングはいつたい何なんだよ……？

* * *

その後、暇だつたし断る理由もなかつたので、俺はサヤカの申し出

を引き受けた。

そして今、広い砂浜をバトルフィールドにして、俺達は大きく間をあけて、向かい合っている。

ヒトミはヒトモシを抱えて、俺の少し後ろでバトルを観戦するみたいただ。

さつきから少しムスツとしてるのが気になるけど……どうしたんだろう？

「私の手持ちは一体だけツスから、ルールは使用ポケモン一体のシングルバトルにするツス！」

「分かった」

俺の手持ちもラルトスだけだから、ちょうど良い。
サヤカはハーフパンツのポケットからモンスターを取出して起動させた。

「それじゃあ、出てきて！ アサナン！」

そう言つて、サヤカは勢いよくモンスターを投げた。すると投げたボールは弾けるように割れ開き、中から一匹のポケモンが飛び出す。

「アサー！」

そのポケモン、【アナサン】は、そのまま空中で足を組んで「ナン！」と短い鳴き声を上げて地面に腰をつけた。

その瞑想するような体勢は【アサナン】が精神を高めるためによくやるポーズだ。

「おお、アサナンだ！」

父さんがチャーレムを持つてることもあって、少しテンションが上がった。それに、なによりもエスペータイプだし！

「それじゃあ、こつちも。ラルトス、頼んだぞ！」

「ラル！」

俺がそばにいたラルトスに指示を出すと、ラルトスは『まかせて！』と頷いて、その場からシユツとジャンプして、フィールドに立つた。

「先手は譲るよ」

「おっ、良いツスか！ ジャあ遠慮なくいくツス！」

サヤカの意気込みに応えるように、相手のアサナンが立ち上がり、瞑想のポーズから戦う構えに移った。

「アサナン、【きあいパンチ】！」

【きあいパンチ】は、かなりの威力があるが攻撃を出すまで少し時間が掛かる技だ。

そのせいかスクールにいた時には、バトル中この技を指示するトレーナーは少なかつたんだけど、今回は俺が先手を譲つて相手が攻撃してこないと分かってるから、指示したのかな……？

「アーサー！」

拳に気合いをためて、アサナンはラルトスへ迫る。

「ラルトス、【かげぶんしん】」

「ラル！」

だが、アサナンの【きあいパンチ】はラルトスの身体をすり抜けた。そしてアサナンの周りに次々とラルトスの分身体が現れてアサナンを囮んだ。

「ア、アサあ！」

アサナンはラルトスの分身体を見て、どれが本物なのか分からず混乱しているようだ。

「惑わされないで、アサナン！ 【こころのめ】！」

サヤカの指示に従い、アサナンは目を閉じて、周りの気配を探る。

【こころのめ】は、相手の場所を探知して次の技を必中させる技だ。これで【かげぶんしん】で増えた分身と本物を見分け、さらに次の技を当てることができる。

聞いた感じでは使い勝手の良さそうな技だけど、こういった技（補助技）は大きなスキを作つていたりもする。

「今だラルトス、【アンコール】！」

「ラル！」

ラルトスは（分身も一緒に）リズムよく両手をパチパチ叩き、アサナンをたきつけた。

『はーい、もう1回つ！ もう1回つ！』

『なぬつ？』

アサナンは、一瞬戸惑いを見せたが、次第に何事もないようになじみ、自然に落ち着きを取り戻した。

「アサナン、【バレットパンチ】！
げつ、はがねタイプの技！

危なかつた！

「……ナーン」

「ちよつと、アサナン！ 何やつてるの！」

どうやらサヤカは【アンコール】を知らないらしい。

まあ、俺も爺ちゃんから聞かされるまで知らなかつたし、スクールでも教わらなかつたから、不思議ではない。

【アンコール】は相手のポケモンに暗示をかけて直前の技を強制的に出させる技だ。だからアサナンは【バレットパンチ】の指示を聞かず、今も【こころのめ】をやっている。

『あつそーれ、もーう1回つ！ もーう1回つ！』

ラルトスのヤツ、楽しそうだな……。

無邪気なテンションのせいで、バトル中なのに、まるで音楽ライブの観客みたいだ。

「あのラルトスの動き……何かの技ツスね！」

気づいたか……。

まあ、あのラルトスの様子を見れば、流石に気づくか。

「ラルトス、【めいそう】でパワーを貯めろ！」

「ラル……」

ラルトスに次の指示を出すと、ラルトスの分身体が消えて、本体だけがアサナンの前に残つた。そしてラルトスは、さつきまでの楽しそうにしていた手拍子をピタリとやめて、シーンと静かに心を落ち着けた。

「アサナン、しつかり！ 【バレットパンチ】！」

【アンコール】の暗示は、技を掛けてからしばらく持続するが、それでも時間が経てば解けていく。

「アサつ！ アーサーナン！」

やがて、アサナンは正氣を取り戻して、サヤカの指示通りに【バレッ

トパンチ】の構えを取った。

「今だ、【チャームボイス】！」

「ラル！」

アサナンが距離を縮めて、ラルトスに【バレットパンチ】を打とうと飛びかかる。

「ラルラルう、ラルーう！」

けどアサナンが攻撃するよりも早く、ラルトスが魅惑的な声を響かせた。

ラルトスの【チャームボイス】の音波がアサナンに直撃する。【めいそう】のおかげで威力も高まり、効果は『ばつぐん』だ。

ちなみに、この時のラルトスの言葉だが……。

『チャームう、パワーあ！』

ホント、言葉が分かる者からすれば、そのまんま過ぎて、逆に魅惑の欠片も感じない言葉になつていて……いや、確かに可愛いくはあるんだけどさ。

「ア、サ……ナン」

アサナンは膝をついた。

「アサナン！ 大丈夫？」

「アーサー！」

『大丈夫です！』と言つているが、その様子から、あまり余裕がないのが分かる。

『頑張つてアサナン、【かわらわり】！』

「アサ！」

「これでトドメだ。ラルトス、【サイコキネシス】！」

「ラル！」

アサナンは手を上げてラルトスに飛び掛かり、対してラルトスは眼を光させて念力を手に纏つた。

「ラールー！」

「アーサー！ アサ！」

ラルトスの纏つた念力は、【かわらわり】で手を振り落とそうとしていたアサナンに伝播して、空中にいたアサナンを吹き飛ばした。

「ああ、アサナン！」

叫び声を上げて吹き飛んだアサナンは、そのまま地面に倒れて目を回した。

＊＊＊

バトルが終わり、サヤカが倒れたアサナンに駆け寄る。

「大丈夫、アサナン？」

「ナーン……」

アサナンは『なんとか……』と弱々しい声で応えるが、体力を消耗してグッタリとしていた。

サヤカは『ゆっくり休んで』と言つて、アサナンをモンスター・ボルに戻した。

「ラールー！」

ラルトスは『勝ったよー』と無邪気に駆け寄ってきた。

「お疲れさま、ラルトス」

「ラルラル、ラールー！」

「おつと！」

『ふふーん』

ラルトスは喜んだ声で鳴き、俺の胸へ飛び込んできた。俺は慌てて抱き止めるが、ラルトスはそのまま甘えるように腕の中に顔を埋めた

『よしよし、よく頑張つたな』

『んー』

そつと頭に手を置いてラルトスを撫でると、ラルトスは満足そうに顔をほころばせた。

「一撃も入れられなかつた……悔しい！」

サヤカは目を閉じて、ギュッと拳を強く握つた。心なしか目元も潤んでいるように見える……。

俺はゆっくりとサヤカの元へ歩み寄る。

「惜しかつたな。まあ、今回俺の運が良かつたというか……」

「気遣いは無用ツス。私なんて、まだまだ未熟ツスから！」

「いや、そんな卑下しなくても……」

めちゃくちやへこんでる……ストイックなんだなあ。

でも実際、ポケモンの相性への判断も的確だつたし、戦略的にも【かげぶんしん】の後に、すぐ【こころのめ】を指示したのは良かったと思う。スクールでは適当に攻撃して片つ端から分身を消して、力業で解決しようとする生徒も少なくなかつたからな。

「今回、サヤカの主な敗因は【アンコール】を知らなかつたことくらいだし、実戦を積めば、きっと強くなるよ」

「……本当ツスか？」

「うん」

攻撃技が直接的なもの（物理技）ばかりだつたのが気になるけど、本当にトレーナーとしてのセンスは悪くないと思う。

「まあでも、バツチひとつも持つてないトレーナーの言うことだから、あんまり當てにならないし、励みにもならないか……」

「そんな事ないツス！ 私より強いのは確かツスし、それに、バツチを持つてないのは私も同じツスから」

「そうなんだ……。

そういうえば、バトル前にポケモンはアサナンだけつて言つてたな……トレーナーとしての経験は、そんなに多くないのか。

そんな事を思つていると、サヤカは顔を上げて「よーし！」と目の色を変えた。

「これからもつと修業して、もつともつと強くなるツス……。カズヤ、次は負けないツスからね！」

「あつ……う、うん」

どうやら元気を取り戻してくれたようだ。

けど、そのファイティングポーズは何なんだ？

「これから、カズヤと私はライバルツス！」

「えつ……お、おう！」

サヤカは手を上げて俺に握手を求めてきた。突然のことでのビックリしたが、俺は手を伸ばして、その握手に応える。スポーツ選手がよくやる、親指を握り合うヤツだ。

「……………寒つ！」

「ん、どうしたツスか？」

「いや、なんか寒気が…………！」

サヤカと握手した瞬間、なんか妙な悪寒が走った。

そういえば、サヤカを助けた時も、微妙に感じたけど…………。

この感覚は、一体なんだ？

——つづく。

5. やきもちの話

「じゃあ私、アサナンをポケモンセンターで診てもらわないといけないツスから！」

そうだな。トドメが効果いまひとつの【サイコキネシス】だつたとはいえ、体力は消耗しきっている。はやく診てもらつた方が良いと思う。

「明日は、お互い頑張りましょう。またバトルしようツス！」

「うん、次に戦うのを楽しみにしてる！」

サヤカは楽しそうにニカツと笑う。つられて俺も口元が緩み、笑顔になつた。

ホント、見ていて気持ちの良い子だなあ、サヤカつて。

こつちまでつられて元気に明るくなる気がする。

「ヒトミちゃんも！」

サヤカが顔を向けると、ヒトミはビクツと反応して俺の後ろに隠れた。

そんな怯えなくとも、【グラエナ】や【サメハダ】じやないんだから……。

「今回は、あんまりお話できなかつたツスけど、次は二人でガールズトークするツス！」

ガールズトークか……ヒトミつて基本的に人と話すの苦手だからなあ。

できるかなあ……？

「ヒトミちゃんはシャイみたいツスけど、私は諦めないツスからね！絶対仲良くなつてみせるツス！」

サヤカは「それじゃあー！」と手を振りながら去つていつた。俺もそれに応えて、手を振り返す。

でも、前向いて走らないと危ないぞ？

「少し変わってるけど、良い子だつたね」

「…………もう」

賑やかな子がいなくなり、少しだけ辺りが静かになつた。

「今のは宣戦布告、要注意ね」

「何でだよ！」

サヤカの姿が見えなくなつてヒトミが言つた第一声に、俺は思わずツッコミを入れた。

せつかくヒトミが俺以外の友達を作るチャンスだと思つたのに……。

去り際のサヤカの言葉に、どこか敵対感を煽るものがあつたかな？ いくら頭の中でリピートしても、そんなもの、なにもなかつたと思うけど……。

「あの娘は、危険。カズヤも気をつけた方がいいわ……！」

「えつと……どこが？」

なんでだろう。ヒトミつてば、いつもオカルト話をしている時にやつてる歪んだ笑顔に、五割増しくらい濃い影を浮かべている。いつも吸い込まれるような眼光の笑顔も少し怖いけど、今の笑顔は人形みたいに無機質で、少し寒気がする。

そういえば……この感じ、さつきからちよくちよく感じていた悪寒に似て いる。

「あの子の言葉の意味をヒモ解くと……、

『今回は、あんまりお話できなかつたツスけど、いつか二人だけでガールズトークするツス！』

【今回は、ここまでにしてやるツスけど、いつかカズヤを賭けて二人で勝負するツス！】

『ヒトミちゃんはシャイみたいツスけど、私は諦めないツスからね！ 絶対仲良くなつてみせるツス！』

【ヒトミは臆病者みたいツスから、余裕ツスね！ 絶対カズヤを自分 モノにしてみせるツス！】

……つていう意味に違いないわ」

違があると思うよ。

なんで俺が景品みたいな扱いになつてゐるの?

「だからカズヤも気をつけた方がいい。あの子に勝つても、またいつ襲われるか分からぬ」

「いや、俺がいつ襲われたの?」

ちゃんと勝負の申し入れがあつて、俺がそれを引き受けた形だつたと思うけど……。

自分のことながら、まるで心当たりがない。

「最初、カズヤがあの子を助けたとき……」

え、えーと……ひよつとしてサヤカが助けられて、安堵のショックで俺に抱きついてきたことを言つてるのかな?

「あれは襲われたのとは違うと思うけど……?」

確かに、痛くて参つたけど……。

「見ず知らずの第三者の異性からバグされるのは、襲われてゐるのも一緒よ。ジュンサーさんのお世話になつてもおかしくないわ……」
私だつてやりたいのに。羨ましい!」

最後の方、ヒトミはプリッと顔を横にしてボソボソ言つてて、よく聞こえなかつた。

「そう言わると、そうかもしれないけど……けど、九死に一生を得るような思いをしたら、誰だつてあんな感じになるだろうし、仕方ないと思うよ」

前にやつてたテレビドラマとかでも、【ザングース】に襲われた男の子がポケモンレンジャーさんに救助されて、泣きながら抱きついてたし……。

あれはそういう演出だつたけど、(今回みたいに)現実でそういう事になつたら、皆、あーなつちやうものなんじやない……?

「あと最後の方、なんて言つたの?」

「……えつ?」

「いや、今さつき、最後の方ボソツと何か言つたよね? 聞き取れなかつたからさ、悪いけどもう一回言つてくれないかな?」

俺が訊くと、突如、ヒトミはビクッと身体を震わせた。

「べ、別に何も言つてない、わ！」

「えつ！ でも確かに」

「ホントに、何も言つてないから！」

ヒトミにしては珍しく（オカルト話もしてないのに）声の調子が強い。

顔も赤いし……。

なんか、怒らせちゃつたかな？

「モシモシ、モツツ！」

「T a i s — t o i 、ヒトモシ！」

ヒトモシがなにか言いかけたけど、ヒトミに口を押さえられて、何を言つたのか分からなかつた。

カロス語が出るなんて、よっぽど言われたくないみたいだ。ギリギリ聞き取れたのも『御主人は、やツツ！』くらいだつたし……。
「私には分からなかつて、絶対つ、カズヤになこと言つちやダメだから！」

「……モーシ」

ヒトモシは『はーい』としょんぼりした様子で鳴き、ヒトミの両腕の中『秘密だ、カズヤ』と俺にアイコンタクトを送つてきた。
いつも彼の暴露癖に困つたりしたが、こうやって口止めされると、少し残念な氣がする。

まあ、でも、そんなに聞かれたくないことなら、無理して聞き出すのも良くないな。

「んー、わかつた。聞かれたくないことなら聞かない。ごめんね、答えにくいこと訊いちやつて」

「……別に、大丈夫」

「ん？」

ヒトミの返答に違和感を覚え、俺は彼女の顔を覗き込むようにして表情をうかがつた。

「……そう？」

「うん……」

口では大丈夫と言つているが、ヒトミの態度には、不満というか、『伝わらなくて少し残念』というような雰囲気が感じられた。

(あ、危なかつた……カズヤに気を使わせちゃつたけど、ホントよかつた……も、もしカズヤに、私が、だ、抱きつきたいなんて思つてるつてバレたら、絶対に引かれちゃう…………で、でも、カズヤもカズヤよ。女の子に抱きつかれて、ヘラヘラしてえ！ むうう！)

この感じ……なんだろう……ヒトミ、怒つてる？

いや、でも怒つてるつていうのも、ちょっと違う気がする。

「ラルラー！」

名前を呼ばれて顔を下に向けると、ラルトスがズボンの裾を引っ張つていた。

『あのね、ヒトミは怒つてないよ』

「えつ、そななの？」

「え、あつ、ちよ、ラ、ラルトス、あの、やめ、て、あ、ああ、あわわわわわ！」

ラルトスは通称『きもちポケモン』だ。人の感情を察知することができる。そんなラルトス曰く、ヒトミは怒つてないとのことだ。

ヒトミは自分のポケモンじゃないこともあって、ラルトスに強く言えず、困つたように慌て出した。

『怒つてるんじやなくて、ヒトミは恥ずかしいみたい。あと、さつきからずつと羨ましいとも思つてるよ』

「恥ずかしい？ 羨ましい？」

「いやああ！ ラルトスも言わないで！ お願ひ！」

ヒトミはいよいよ取り乱して、両手に抱えていたヒトモシを放して、ラルトスを押さえに掛かつた。

しかし、ラルトスがその場からピヨンと飛んで、その場の取り押さえは失敗に終わる。ラルトスはそのまま【ねんりき】を使って俺の頭に乗つた。

ラルトスを捕まえ損ねたヒトミは、砂浜に伏せる形になつた。

「大丈夫？」

「……うう」

身体についた砂を払いながら上体を起こすと、ヒトミは顔を真っ赤にして、今にも泣きそうな顔になっていた。

「ラルトス、ヒトモシ。少しの間、その辺で遊んでてくれない？」

俺はラルトスをヒトモシの横に下ろして、二人にお願いした。

「ラールー！」

「モーシー！」

俺の頼みを素直に聞き入れてくれた、ラルトスとヒトモシは元気で駆け出す。二人は波打ち際まで行き、パシャパシャと波を踏んで遊び始めた。

「さて……」

「うううう」

改めてヒトミを見ると、ヒトミはトンビ座りをしながら頭を抱え、弱々しく（かつ可愛らしく）唸つていた。

完全にパニクっている。吸い込まれそうな眼光をしてるのもあって……なんだか、いまにも軽く錯乱しそうだ。

「あの……なんていうか……」

なんて言おう……。

おそらく、次に話す言葉を間違えたら、ヒトミは2、3日ポケモンセンターのベットに籠ることになる……気がする。

パターンその1。

『ラルトスが“恥ずかしい”とか“羨ましい”とか言つてたけど、何のこと？』

……ダメだ、トドメ刺しに行つてる。

パターンその2。

『とりあえず、ヒトモシとラルトスが言つたことは、聞かなかつたことにするから！』

……悪くないだろうけど、いまいちパツとしない。

それに、ちょっと嘘くさい。

「…………えーと」

「にゅううう」

……はああ、ダメだ。良い言葉が浮かばない。

仕方ない、素直に訊いちやおう。

「俺は、どうしたら良いかな?」

「じゃあ、抱きしめさせて」

「えつ?」

「あつ!」

……えーと。

「ああーー、あ、あわわわ、今のは、違つて、いや違くなくないけど!」

“違くなくない”って、つまり “違つていない”ってことなんじゃ……?

「だから、その、私はカズヤを抱きたい、わけじやなくて、カズヤにもつと、触りたいだけ……つて、あわわわ、それも違くて!」

「と、とりあえず、一旦落ち着こうか?」

どうしよう……これ以上ヒトミが取り乱さないように、慎重に言葉を選んだのに、本人が自分で地雷を踏み抜いちやつた……。

ヒトミは真っ赤になつた顔を両手で覆う。

多分、俺の顔もいま真っ赤だ。顔もドンドン火照つてる感じがする。

よく見ると、ヒトミは指の隙間からチラチラとこっちを見ていた。

「引いた、よね……?」

「……いいや」

「うそ、絶対引いた! ドン引きした!」

「ホントに引いてないって。けど……」

引いてはない。

引いてはないけど、ビックリしたというか……。

「急にそんなこと言うから……」

「だ、だつて、カズヤがどうしたら良いなんて訊くから、つい本音が

……」

本音つて言つちやつたよ。

なんか、もう……今のヒトミの言葉で、ラルトスの言つていた『怒つてない』とか『羨ましいと思つてる』の意味が、なんとなく分

かつてしまつた。

「ヒトミはさ……あー、これ訊いて間違つてたら、ものすごく恥ずかしいんだけど……」

「……な、なに?」

「ヒトミがさつき言つてたことだつたりつて、ひょっとして……やきもち?」

「ツツ!」

俺が訊くと、またピクツと反応してヒトミは顔を俯かせる。

「……つ!」

あつ、しまつた!

せつかくさつきまでヒトミが取り乱さないよう言葉を選んでたのに、こんなこと訊くなんて……。

これじやあ、【きゅうしょ】に当てるよ!

自分のミスに気づいて内心で後悔していると、やがてヒトミはゆつくり頸を引き、コクつと頷いた。

その仕草が可愛くて、俺の頭にあつた後悔がサツとすつ飛び、つい見とれてしまう。

「……」

「……」

お互いに顔を真っ赤にしてだんまりし、しばらくシーンとしてしまつた。

さつきまで近くで、波の音だつたり【キヤモメ】の鳴き声だつたりラルトス達が遊んでる声だつたりが聴こえてたけど、今はそれら全部が霞んで聴こえる。

「……えーと

どうしようかと少し悩んだ末、俺は膝をつきヒトミに向けて両手を広げる。

「……はい」

「えつ……ええーーー! ああああ、あの、これつて?」

ヒトミは俺が手を広げたのを見てキヨトンとし、やがてオドオドとした様子で訊ねた。

「その、ヒトミに抱きつかれるのは、別にイヤじゃないっていうか……」

ヤバい、やつてなんだけど、コレ、すごい恥ずかしい！
けど、ここまでやつて、もう後には退けない。

「だから、ね……いいよ」

「い、いいの？ 引いたりしない？」

「しないよ」

「ジュンサーさん呼んだり、サイキックで吹き飛ばしたり」

「しないってば」

まつたく、長い付き合いなんだから、それくらい分かるでしょ……？

俺は少し前に出て、また「はい」と手を広げた。
しばらく手をモジモジさせて悩んだ末、やがてヒトミはゆっくり腕を開き、身を寄せてきた。

「カズヤー！」

「おつと」

そして、ある程度まで近づいてくると、ヒトミは飛び掛かるように、一気に身体を触れ合わせてきた。ヒトミを受け止める形で、俺は彼女の背に手を回す。

そういうえば、前にもこうやって触れ合つたことがあるけど、前よりも心なしかヒトミの体が柔らかい気がする。

お互いに抱擁し合い、俺はなんともむず痒い気持ちに襲われた。
ラルツスともこうやってスキンシップを取つたりしてるけど、ヒトミとやると、なんだか妙にドキドキして落ち着かない。
「……フフ」

ヒトミが笑つて出た息が、首もとを撫でてくすぐつた。

仕返しに、俺は後ろに回した手でヒトミの頭を撫でた。シャンプーの匂いだろうか、クセつ毛な髪を撫でるたび、甘い香りが漂う。

「えへへえ」

「ん！」

頭を撫ると、さらにヒトミの温かい吐息が強くなり、くすぐつた

さが増した。突然の感触に、おもわず体がピクッと反応してしまった。

体勢的に顔は見えないけど、言動からヒトミはふやけた顔をしているんだろう。

「むふふ」

「なつ！ ちよ、ヒトミ！」

ヒトミは俺の背中に回した腕に入れて、なんと俺の肩に口元を埋めた。

さつきまで笑った時にしか感じなかつたヒトミの吐息を、今度はヒトミが呼吸するたびに感じられるようになつてしまつた。

「……ふう……ふう」

「ンつ」

俺は首もとのくすぐつたい感触に耐えて、しづらくムズムズとした気持ちを持て余す。やがてむず痒い気持ちに耐えられなくなり、俺はヒトミの肩を持つて身体を前にやり、彼女と向き合つた。

ヒトミの顔は赤く火照り、ちよこつと息が荒い。

「はあ……はあ……えへへへ！」

少し時間をかけて、ヒトミは落ち着きを取り戻し、俺と目を合わせる。

「満足した？」

「……ええ！」

まだ少し物欲しそうな眼をしていたが、頷いた時のヒトミの顔は、眩しくらい満面の笑みをしていた。

——づく。

6. いしのどうくつの話

ジムリーダーの不在のためジム戦を見送り、サヤカというライバルができた日から翌々日、俺たちはムロタウンの外れにある【いしのどうくつ】へ、やつて来ていた。

昨日のジム戦は、特に苦戦することなく終わつた。もともと【エスパートタイプ】を弱点とする【かくとうタイプ】のジムだつたし、それに、俺にとつてひとつ目のジムであることもあつて、ジムリーダーのトウキさんも、それ相応に手を抜いてくれた。

そんなわけで、俺は無事に初のジム戦を突破し、『ナックルバッヂ』を手に入れることができた。

ちなみに、最初に行つた時に会つたメガネの事務員さん曰く、俺が挑戦するより先にサヤカもムロジムに来ていたらしく、無事に勝利したみたいだ。

そして初のジム戦から一日が経つた今日、冒頭で言つたように俺たちは、【いしのどうくつ】にやつてきている。

目的は【いしのどうくつ】にいるらしい【ヤミラミ】を見ることだ。

昨日の夜、偶然ポケモンセンターのジョーイさんから【いしのどうくつ】に【ヤミラミ】がいることを聞き、ゴーストポケモンが大好きなヒトミがその話に食いつき、俺が「行つてみようか?」と提案したら、即応で話が決まった。

てなわけで、今、俺とヒトミは目当ての【ヤミラミ】を探しながら【いしのどうくつ】の中を散策している。洞窟の中は本当なら光が届かず真っ暗だが、幸い、俺達はラルトスの【フラッシュ】とヒトモシの【おにび】のおかげで、辺りの様子を見ながら歩くことができている。

「……わくわく」

ヒトミはウキウキして、いつもより少しだけテンションが高い。表情はいつもの歪んだ笑顔だ。ヒトモシの【おにび】の光もあって、少し怖い。

「えへへへ」

「……気をつけてないと転ぶよ?」

「ちゃんと気をつけてるから大丈夫よ」

そう言いながら、ヒトミは足場の悪い洞窟の中を軽やかに歩いていた。ついていく俺の方が先に転びそうだ。

相変わらず、こういうときのヒトミの行動力は凄まじい。

「ラルラー!」

「モシシー!」

「……はあ」

俺たちの足元では、ラルトスとヒトモシが辺りを照らしながら、仲良く手を繋いで歩いていた。そんな二人を見ながら、俺は少し遅れてヒトミ達の後を追う。

だがふと、ヒトミが立ち止まって、俺の顔を覗き込むようにして様子を伺っているのに気がついた。

「……なんだかカズヤ、元気ないわね?」

「ああ、うん。ちょっとね……」

「大丈夫? 具合でも悪い?」

「ううん、そんなんじやない。ただ洞窟の中を歩くのって初めてだから、いつもより気を使つてるだけ……」

「……そう?」

実際は違うけど、本当のことと言うとヒトミが気にしそうだから、俺はあえて『それ』を言わずに誤魔化した。

そして、『それ』っていうのが、何かというと……。

実は俺、【ヤミラミ】が苦手なんだ。

その苦手っぷりから、小さい頃に図鑑にのった【ヤミラミ】を見て、大泣きしたことすらある。

どうして【ヤミラミ】が苦手なのかは、俺自身にもよく分からない。

過去に【ヤミラミ】に襲われたことなんてないし、よくよく見ると可愛い見た目をしているとも思うんだけど、どうしても図鑑やテレビで【ヤミラミ】を見ると体が反応して、変な恐怖を感じてしまう。言葉ではうまく言えないけど……【ヤミラミ】を見ると、なんかこう、体の奥がゾワゾワつてするんだ。

けど、そんなことをヒトミに言えば、彼女は気を使って、今からでも引き返そうとするだろう。せっかく、ヒトミが楽しみにしているのに、その気持ちに水をさすのは申し訳ない。

「あはは……」

だから、俺はできるだけナチュラルな作り笑いをして、何事もないよう取り繕つた。

「さつ、行こ？」

「え、ええ……」

ヒトミはうすうす俺が作り笑いをしているのに感づきつつあったけど、それがバレる前に、俺は歩みを進めてヒトミを追いこして彼女の前を歩いた。

（…………よし！）

この時、俺は前を向いて気づいてなかつたが、後ろについてくる形で歩きだしたヒトミは、疑つたような顔つきから、何かを意を決したような面持ちに表情をえていた。

「…………えつ？」

すると突然、俺の左手が何者かに掴まれた。足を止めて横を見ると、ヒトミが俺の手をとつて、こつちを見ていた。

「え、えーと、どうしたの？」

「その…………転んだら、危ないから……」

少し顔が赤くして、上目遣いのヒトミ…………すゞく可愛い。

「そ、そつか……あ、ありがとう」

「…………えへへへ」

二人揃つて顔を赤く染めて、俺達は手を繋ぎながら洞窟の中を進んだ。

「ラールラー、ラールラー」

「モーシシー、モーシシー」

前を歩く二人の歌のような鳴き声もあつて、物静かな洞窟の中だけど、まるでトクサネシティの公園にいたときみたいに賑やかだ。

こうして俺達は、洞窟の更に奥へと歩いていった。

時は少し進み、途中で野生の【マクノシタ】や【イシツブテ】に会いながら、目当ての【ヤミラミ】を探していると、俺達はまた一匹のポケモンを見つけた。

そのポケモンは、探している【ヤミラミ】ではなかつたが、黄色と茶色の身体に、尖つた耳としつぽ、細い目など……その見覚えのある姿に、思わず俺はテンションが上がつた。

「おおー、【ケーシイ】だ！」

コクリコクリと頭を動かして、まるで眠つたような様子で空中に浮いているそのポケモンは、ねんりきポケモンの【ケーシイ】だ。

1日の18時間を睡眠に費やし、眠つたままご飯を食べたりする、あの【ケーシイ】だ！

「見えるヒトミ、ケーシイだよ、ケーシイ！」

「うん、見えてる……でも、そんなに大はしゃぎしなくても」

「だつて、ケーシイだよ、ケーシイ！　言うなれば、ヒトミにとつて

【ゴース】みたいなポケモンだよ！」

「うん、それなら仕方ないわね！」

さすがヒトミ、話が早い！

「ラルウ？」

「モシモシ？」

ラルトスとヒトモシからはイマイチ共感を得られず、『何をそんなにはしゃいでるんだろう？』と言うように揃つて首をかしげられた。少し納得いかないけど、まあ、ひとまず置いておこう。

今は、とりあえず……。

「レツツ、ケーシイ、ゲーツ！」

「あつ、ちょっと待ってカズヤ！」

俺は空のモンスター・ボールを片手に、勢いよく飛び出した。

「シイー！」

「あつ！」

けど、俺がケーシイに近づいた途端、ケーシイは小さい鳴き声を残して姿を消した。

しまった、野生の【ケーシイ】といえば、逃げの達者なポケモンだった。

出会えた感動のあまり、すっかり忘れてた。

「逃げちゃつたわね」

どうやらヒトミは、ちゃんと覚えていたらしい。

まったく……ヒトミにケーシイについての話をしたのは俺だつてのに、話した当人が忘れてたなんて……みつともない！

「……はあ」

ケーシイに逃げられた事とその習性をすっかり忘れていた事にガックリして、俺はため息をつきながら肩をおとした。

「……よし、よし」

そんな俺を、ヒトミは頭を撫でて慰めてくれた。

なんだか子供扱いされているようで少し恥ずかしいけど、不思議とイヤな感じはしなかつた。

「なんか、ヒトミ、一昨日から……」

妙に触つてくるよね？

そう訊こうとしたけど、思わず俺は口を閉ざした。

「……なに？」

「いや、なんでもない」

撫でているヒトミのニッコリとした笑顔が可愛くて、俺は『ま、良いか』と、心にあつた小さな疑問をどこかへやつた。

「あれは！」

「【ヤミラミ】、だね……しかも二匹」

しばらく洞窟の中を散策していると、ようやく俺達は目当ての【ヤミラミ】を見つけた。

紫色の小さな身体に、輝く宝石のような眼……その姿は間違いないく、くらやみポケモンの【ヤミラミ】だ。

ついに、見つけてしまった。

生でヤミラミを見るのは初めてだが、やっぱり言い知れない怖さを感じる。

「かわいい……えへへ！」

俺がひつそりと怯える横で、ヒトミは見とれて怪しく笑っていた。

「ミー、ミー……」

「ヤラヤラ！」

ん？

なんだろう……なにか、様子がおかしい。

見つけたヤミラミの二匹は、洞窟の天井を見上げて、慌てたような鳴き声をあげている。

「あの二匹、何してるんだろう？」

「……そうね、どうしたのかしら？」

目当てのポケモンを見つけて眼を輝かせていたヒトミも、その異変を感じて、首をかしげた。

「ねえ、カズヤ、訊いてみてくれない？」

「えつ！」

「……お願ひ

「う、うん。わかつた」

ヒトミの頼みとあって断りきれず、俺はラルツスと共に、警戒しながらヤミラミ達へ近づいた。

いきなり襲い掛かられることもないだろうが、野生のポケモンであるかぎり、可能性はゼロではない。

「こ、こんにちは」

「ミー？」

「ヤラ?」

できるだけヤミラミ達を威圧しないように、俺はヤミラミ達に近づくと、目線が低くなるように膝をつき、穏やかな態度で接した。

『人だ!』

『どうして、こんな所に人が?』

どうやら一匹は俺（と後ろにいるヒトミ）に疑問は持つても、襲い掛かったりはしなかった。

『どうかしたの?』

「……ヤミー!」

俺に訊かれて、やや戸惑いつつもヤミラミ達は、腕を上げて天井を指した。

「ヤミい……」

見上げると、そこにはもう一匹のヤミラミがいた。そのヤミラミは、洞窟の天井にある岩の隙間に収まって、「ヤラあ」と弱々しく鳴いて怯えている。

『あそこ』にいるのは、ボクたちの弟なんだけど、どうやら下りられなくなつたみたいなんだ』

『下りられなくなつたって……そもそも、なんであんなところに?』

『きっと、石を取るために上がつたんだ。アソツ、この前、あそこに美味しそうな石があるって言つてたから!』

『美味しそうな、石……?』

『どういうこと?』

「……ねえ、ヒトミ」

ヤミラミの言つてることがイマイチ分からず、俺は後ろを振り返つて、詳しく知つてそうなヒトミを呼んだ。そしてヤミラミ達の言つていたことを伝えると、ヒトミは納得したようにコクつと頷いた。

『ヤミラミは宝石や原石を食べると言われてるの』

「へえー」

なるほど。だから、『美味しそうな石』ってことか……。

俺が納得すると、ヒトミは心配そうな表情で上にいるヤミラミを見上げた。

「カズヤ……あの子、下ろしてあげられない？」

「……うーん、普通の【ゴーストタイプ】のポケモンなら、俺の『テレキネシス』やラルトスの【サイコキネシス】を使えば、簡単に下ろせるんだけど……。ヤミラミは、【あくタイプ】も持ってるから、エスパーわざが効かないからなあ……」

「……じゃあ、私をあそこまで飛ばして」

えつ？

「カズヤが『テレキネシス』で私をあそこまでやつてくれれば、私があの子を持つて下りてくるから……」

「ああ、なるほど」

ホント、ゴーストポケモンが関係すると、ヒトミは行動力もだけど頭の回転も速い。

「あつ……いや、ダメ！」

「……どうして？」

俺はヒトミの提案に納得しかけたが、あることに気づき、すぐに却下した。そんな俺の反応に、ヒトミは首を傾けた。

確かに良い考えだと思うけど、それには問題がふたつある。

まずひとつ目の問題として、モンスター・ボールや軽いポケモンなら別だが、人を浮かせるとなると、それなりにパワーがいる。

洞窟の高さは三階建ての建物くらいの高さがあり、あそこまで人間^{ヒトミ}を浮かばせるのは、ラルトスの【サイコキネシス】なら問題ないけど、俺の『テレキネシス』なら、短い時間しかできない。

ラルトスは今【フラッショ】を使ってるから、浮かせるなら俺の『テレキネシス』を使うしかない。

そして次にふたつ目の問題、これが決定的な理由なんだけど……。「ヒトミ、その格好であそこまで上がつたら……その……見えちゃうよ？」

「…………っ！」

俺がヒトミの服の方に眼を向けると、ヒトミは俺の言いたいことを察してくれたのか、ポツと顔を赤くしてうつむいた。

今のヒトミの格好は、黒っぽい色のワンピースだ。つまり、その口

ングスカートのような服で、体を浮かせれば、当然、下からは……その、見えてしまうわけで。

「……」

「……」

ヒトミは顔を真っ赤にしたまま、動かなくなつた。俺もなんと声を掛けといいか分からず、だんまりする。

二人揃つて言葉を失い、なんとも氣まずい空気になつてしまつた。

「ヤラヤラ？」

「ヤミー？」

「ラルう？」

「モシシ！」

ポケモンたちはトレーナー達を見上げて、不思議そうにして（ヒトモシだけ楽しそうに笑つて）いる。なんか、高さ五十センチを境に明らかに空気が違つてる。

「と、とりあえず、ヒトミを浮かせるのはナシで！」

「う、うん……じ、じやあ、どうするの？」

「……俺が行くよ」

そういつて、俺は精神を集中できるように、息を深く吸つて心を落ち着かせた。
苦手なものを取りに行くというのは、少し気が乗らないけど……仕方ない。

「……ふう。セーの！」

自分の体を覆うように念動力を送ると、俺の体はふわりと宙に浮いた。

そのまま天井まで浮き上がつて、俺は岩の隙間にいるヤミラミの元まで飛んだ。

「さあ、おいで」

「ヤミー……」

ヤミラミは警戒して、なかなか隙間の外へ出てくれない。

「ほら、下で君のお兄ちゃん達が待つてるから」

『……うん』

俺がそう言うと、お兄ちゃんと聞いてひとまず心を許してくれたのか、しぶしぶ出てくれた。

俺は出てきたヤミラミの子供をゆっくりと腕で抱えた。

(うーん、やっぱり怖いな……あつやべ!)

けどその時、ヤミラミへの恐怖で精神が乱れたからか、『テレキネシス』が弱まつて体が落下しだした。

「カズヤ!」

運良く、落ちるスピードはゆっくりだけど、落ちる俺を見て、ヒトミが声を上げた。

ヒトミは俺を受け止めようとしているのか、俺が落ちる先で腕を広げていた。

「つて、えつ!

「ちょ、ヒトミ、そこどいてー!」

「キヤー!」

いくら遅く落ちてるととはいって、インドアなヒトミが俺を受け止められるわけもなく、俺はヒトミと共に地面に倒れ込んだ。

「イタタあ……」

「ううう。ヒトミ、大丈お、ぶ……?」

俺は目の前で痛がつてているヒトミに声を掛けた。けど同時に、なぜヒトミの顔が目の前あるのか、そして、ゆっくり落ちたとはいってどうして落下した衝撃が不自然に少なかつたのかと疑問に思った。

「ふえ! か、かかか、カズヤ……!」

「……あつ!」

仰向けに倒れたヒトミが自身の胸腹部にいる俺を見て、顔を真っ赤にしている。そして、俺は、頭の中にあつた疑問の答えと、俺とヒトミが今どんな体勢になつてているのか、気づいた。

……気づいて、しまつた。

「…………ぐふつ!」

「カズヤ!」

顔に感じる柔らかい感触によつて、急激に跳ね上がつた心拍数と体温を感じたのを最後に、俺の意識はそこで途絶えた。

この時、抱えていたヤミラミに怪我はなく、その後、ヤミラミお兄ちゃん達と共に、自分達の住みかへと帰つていきましたとさ……。めでたし。めでたし。

一つづく。

7. 精神統一の話

「……はあ」

「ラルウ？」

【いしのどうくつ】を散策してから1日がたった今日、俺とヒトミはトウカシティを目指してムロタウンから出港した船に乗っていた。けど、俺とヒトミは別行動を取つていて、俺は甲板で一人、ボートと海面を眺めている。

【いしのどうくつ】でヒトミに、その……倒れ込んでからというものの、俺もヒトミもお互いに顔をあわせられなくなつてしまつた。顔を合わせると、あの事を思い出して、お互い顔が真つ赤になり、うつ向いて、まともに声を掛けられなくなつてしまう。

今朝も「……じゃあ、行こうか」とか「……うん」とか「今日も良い天気だよね……?」とか「ええ……!」とか必要最小限な受け答えやよそよそしい会話しかしていない。

「ああー！　どうすれば良いんだよー！」

「ラルラあー？」

なんとかして、いつもみたいに話そととするけど、ヒトミの顔を見ると、どうしても顔が赤くなつて胸がドキドキする。そして、あの、柔らかい感触を思い出して……。

ああああ、落ち着けえ俺工！

「どりあえず、心を落ち着けて……！」

「ラルラル？」

眼を閉じて、いつもの瞑想の時みたいに、心を落ち着けるんだ。

少しも波打つてない水面のように、清く穏やかな心を意識して

……。

「ラルラあー？」

周りの音……船のエンジン音とか波の音とか、聴こえなくなるくらい、集中、集中……。

「ラルラールう……！」

なんか頬がペチペチされてる気がするけど、この感触がなくなるくらい、心を落ち着けて、精神を研ぎ澄ますんだ。

「……ラールーラルラルラああ！」

「おい、そこのガキ！」

服を引つ張られようと、声を掛けられようと、動じない精神を持つんだ。

「ラああ！ ラああ！」

「ちつ……ポチエナ、あのガキに軽く【かみつく】！」

「チイー！」

「へつ？」

あれ、なんか足に変な感触が……？
……つて！

「イツタアア！」

俺は痛みに悶えて、思わず甲板上を飛び跳ねた。

「ツウウ、なんだア！」

「なんだじやねえ！」

語氣の荒い声が聴こえて周りを見てみると、すぐ近くに金髪の（少しだけ頭頂部が黒い）女人人と【ポチエナ】がいた。

女人人は鋭い目つきに黒いジャージ、青色の口紅と、見るからに怖そうなお姉さんだった。お姉さんのそばにいる【ポチエナ】も俺を見て、牙をあらわにして威嚇している。

「え、ええーと……？」

「テメー、さつきからそこのラルトスが必死に声かけてんのに、無視しやがって、どういうつもりだア？」

「へつ？」

「えつ、ラルトスが？」

「ラルうう！」

お姉さんが指で示した先を追つて目線を下に向けると、ラルトスが涙眼で俺を見上げていた。

『ひどいよカズヤあ！ さつきからずつと呼んでるのに、どうして無

視するのお！』

「あつ、ご、ごめんラルトス！ わざと無視してたわけじゃないんだ！」

『うええーん、バカあー！』

俺が慌てて謝ると、ラルトスは俺の胸に飛び込んで泣きついてきた。俺は跳んできたラルトスを優しく受け止めて、彼女の頭を撫でる。その間、ラルトスは『バカ、バカ、バカあ！』とペチペチと俺を叩いていた。

「……ちつ」

お姉さんはラルトスをあやす俺を細い眼で見ながら、小さい舌打ちをして【ポチエナ】と一緒に立ち去ろうとした。

「あ、あの！」

お姉さんの背中に向けて俺が声をかけると、お姉さんは歩みを止め、顔だけ向けてこつちを見た

「……なんだよ？」

「どうもありがとうございました」

「別に大したことしてねえよ。それよりテーマも飼い主ならPokemonの世話くらいちゃんとしな！」

「はい……」

お姉さんにぐうの音もでない正論を解かれ、俺は申し訳なく返事をした。

ホント、パートナーPokemonの呼び掛けに気づけないなんて、トレーナーとして失格だ。

「ごめんな、ラルトス」

『……いっぱい遊んでくれたら、許してあげる』

改めて謝ると、ラルトスはうつ向きながら、甘えるように顔をスリスリと寄せてきた。

そういうえば、ここ数日、あんまりラルトスにかまつてやれていなかつたな……。

「……じゃあ、遊ぼうか？」

「ラルウ！」

ラルトスは元気の良い鳴き声で返事をすると、俺の腕から飛び下りて、『モンスターボール投げしよ！』と甲板の広いところへ走り出した。

「……あん？」

ラルトスの後を追う前に、俺はお姉さんの方を向いて小さく頭を下げた。お姉さんは怪訝そうな表情をしていたけど、お姉さんがいなければ、俺とラルトスの間に大きな溝ができていたかもしれない。

お辞儀でお礼をした後、俺は頭を上げてラルトスを追つた。

「……ちっ！」

俺は背にして気がつかなかつたが、俺がラルトスの後を追い始めた時、お姉さんは頬を赤らめ、不機嫌そうな顔で大きな舌打ちをしていた。

——つづく。

8. ポケじやらしの話

「おい、ガキ！」

しばらくラルトスとモンスター・ボール投げ（念力あり）をしていたら、さつき会つたお姉さんがまた声をかけてきた。

「これ、やるよ！」

「えつー。」

やると言つて、お姉さんが差し出したのは、羽ペンのような形をしたおもちゃだつた。

「え、えーと、何なんですかコレ？」

「【ポケじやらし】だよ。知らねえのか？」

「は、はい。初めて見ました」

お姉さんが【ポケじやらし】と言つたソレには、短い棒の先に羽と小さい鈴が付いている。

「これを、こーゆう風にして……」

お姉さんが自身の手持ちポケモンと思わしきポチエナに向かって膝をつくと、ポケじやらしの棒を振つて羽の部分をなびかせる。すると、ポチエナは小さい前足でペチペチと羽をはたき始めた。近くにいるラルトスも興味深そうに見つめている。

「こーやつてポケモンの氣を引いて遊ぶんだよ」

「へえー」

俺が頷いてる間にも、お姉さんは【ポケじやらし】を揺らして、ポチエナを遊ばせた。

「ほーれほれ

「チー！」

ポチエナが羽の部分を叩いて鈴がシャンシャン鳴る。

やがてお姉さんは、ポケじやらしを高い位置まで上げて、ポチエナを誘うように揺らした。

ポチエナは後ろ足に力を入れて飛び上がり、ポケじやらしの羽を思

いつきり叩いた。

「よーし良いぞお、ポチエナあ！」

「チーー！」

お姉さんは笑つてポチエナの頭を撫でた。撫でられているポチエナも、とても嬉しそうだ。

「……はつ！」

しばらくポチエナの頭や背中、顎などを撫でていると、ふとお姉さんは我に返つたように笑みを消して、俺を見た。

「いや、これは……」

「大好きなんですね？」

「なつ！」

図星らしい。

一見、口調が荒く強面なお姉さんだが、どうやら中身は純粋にポケモンが大好きなトレーナーさんみたいだ。

「わ、悪いかよ！」

「いえ、俺もラルトス大好きですし……。それにこうして見ると（ポチエナも）可愛いですし、良いと思いますよ」

「なつ！ い、いい、いきなり何いつてんだテメえ！」

お姉さんは顔を真っ赤にして怒声を飛ばしてきたが、少し声が裏返つてゐるせいでイマイチ迫力がない。

「そ、そんな簡単に可愛いなんて言つてんじゃねえーよ！ それとも何か、ウチをバカにしてんのか！」

「い、いえ、バカにする気なんて全然……。純粹にそう思つただけですよ？」

昨日の【ヤミラミ】みたいに【あくタイプ】のポケモンは、苦手な俺なんだけど、このポチエナは、あんまり怖いと感じない。きっとお姉さんから大切に育てられているからだと思う。

（な、何なんだよ、このガキ！ か、可愛いなんて、親以外で初めて言われたぞ！）

なんだろう、怒らせちゃつたのかな？

でも、怒つてゐるにしては、雰囲気に怒氣がないし……。

ひよつとして、あんまり自分のポケモンについて誉められたこと無いのかな？

「と、とりあえず、ほら、お前もやつてみろよー！」

「あっ、はい」

（照れてる？）お姉さんからポケじやらしをもらつて、俺はお姉さんの真似をして、ラルトスに向けて振つた。

「あんまり力入れて持つんじやねえぞ。力んで持つてると、触るポケモンだけじやなくて持つてる自分も怪我しちまうからな」「なるほど……こうですか？」

「もう少し手の力を抜け……そう、そんな感じだ」

お姉さんのアドバイスを受けながら、俺はポケじやらしを振る。

「ラルウ……！」

ゆつくりと誘うようにポケじやらしを振つていると、ラルトスは揺れている羽を面白そうに見つめて、やがて羽を触ろうと手を前に出した。

「ラル」

「…………両手なんだ」

先ほどのポチエナと違つて、ラルトスはピトつと押さえるように羽を両手ではさむ。

「ルう……」

「…………ほーう」「

「ラル！」

ラルトスが手を下ろして、再度ポケじやらしを振ると、またラルトスは両手で羽を押さえた。

前で両手を合わせるそのポーズは、とても可愛らしい。

「ほらほらー」

右、左、右、左、右、と見せかけて左、左と、ポケじやらしを動かす。

「ラルラルー！」

俺が誘うようにポケじやらしを揺らすと、ラルトスはペシペシとはたくようにして羽を触つた。ラルトスが羽を揺らすたび、ついている

鈴がシャンシャンと鳴る。

「あはは

「ラルー！」

しばらくそんなやり取りを繰り返していると、だんだん楽しくなつてきて、俺とラルトスは自然と笑顔になつていつた。

「ラールー、ラル！」

「おーっと！ あははは

最後にラルトスはポケじやらしを目掛けて飛び掛かつてきただので、俺はポケじやらしを引っ込めてそのままラルトスを受け止めた。

「ラルラルラルう！」

「あはははは！」

「……上手いな、お前」

俺達の遊んでる様子を見て、お姉さんは眼をパチクリしていた。

「そう、なんですか？」

「ラルう？」

ポケじやらし自体はじめて使つたし、いつも通りの気持ちで遊んでただけなので、上手いと言われても、いまいちピンと来ない。

「……そ、そのよお」

ラルトスと一緒に首を傾げていると、お姉さんは照れ臭そうに顔をそらして、チラチラとこっちを見た。

「撫でてもいいか？」

「えつ？」

「撫でる？ 俺を？」

「……なわけないか。ラルトスを、だよね。控えめな動きで分かりにくいけど、手元もラルトスを指してるし……。

「どう、ラルトス？」

俺が訊くと、ラルトスは「ラルウ……」と少し考えた後に、頭を下げてお姉さんの方にやつた。

どうやら、オーケーつてことらしい。普段はあまり人に触られるのは好きじゃないんだけど、お姉さんには、さつき助けてもらつたからな……。

俺はお姉さんが撫でやすいよう、ラルトスを床に下ろした。

「ラルラル！」

『バチこい！』だそうです」

「お、おう」

お姉さんは膝について、ラルトスの頭へ手を伸ばす。そして、優しく手を置いてゆつくりとラルトスの緑色の頭部を撫でた。

初めは恐る恐るつて感じだつたけど、次第に手慣れたようにスリスリしていた。

「ラルう」

(……か、可愛いーー！)

可愛いーー、とか思つてそうな顔だなあ……。

さつきポチエナをじやらしていた時ほどじやないが、顔がほころんでいる。

「……チエ！」

そんなお姉さんに撫でられているラルトスを、お姉さんのポチエナは、威嚇したような（羨ましそうな）顔で睨んでいた。

「よーしょーし

「チエ！」

代わりにと思つて俺が頭を撫でると、ポチエナは俺の手を払うように頭を振つた。

『気安く触んな！』

あつ。この子、メスだ。

飼い主に似て、口調が荒い子だな……。

「あはは。ごめんね、俺じやダメだよな？」

「……チエ」

苦笑いしながら謝ると、ポチエナは『ふん』と鼻を鳴らす。

そういえば、母さんのエーフイもあんまり頭を撫でられるのは好きじゃなかつたなあ……。

ラルトスやヒトモシの【グループ】と違つて、エーフイやポチエナの【グループ】は、あまり頭を撫でられたくないのかな……。エーフイが撫でて喜んでた場所は、確か……。

「……」うかな?」

「チエ!」

俺は耳の付け根から流れるように顎の下に手を回す。

『テメエまた! 気安く触んじゃねえってさつき……んツ!』

触れた瞬間、ポチエナはピクッと反応して睨みつけてきたけど、軽く指を立てて撫でると、さつきとは違つて気持ち良さそうに眼を細めた。

『んツ、あつ、んんう!』

でも、なんだろう……。一見、気持ち良さそうではあるけど、なんだか少しツラそうな……苦しそうな……。

「うーん……やつぱり、俺じやダメかあ」

『あつ!』

どうやら同じ【グループ】でも、エーフイとポチエナとじや、いろいろ違うみたいだ。

『……なんでやめんだよ!』

『えつ! いや、なんかイヤそうにしてたから……』

『べ、べつにイヤじやねえよ! なめんな!』

別になめてるわけじゃないんだけど……。

『い、良いから、撫でたきや、その……も、もつと撫でろよな!』

なんだか……可愛いな、この子。

強面な見た目で、さつきまで荒い口調だったのに、今は顔をうつむかせて、ボソボソ言つて、愛くるしいというか……。

こういうの、なんていうんだつけ?

庇護欲? ギヤップ? ツンデレ?

……まあ、なんでもいいや。

『それじゃあ……よしよーし』

俺はさつきみたいに指を立てて、ポチエナの顎を軽く搔くように撫でた。

『……んツ、んー、んふふ!』

あつ、今度は結構、気持ち良さそう……。

「あはは、可愛いなあ、お前」

『う、うるせえ……んあ！』

まつたく、嬉しそうに顔を緩ませたり、強がって怒つたり、また喜んだり、大変だなあ……。

「ラールー！」

「よーし。良い子だな、お前」

『えへへ、お姉ちゃん、なでるの上手う！』

視線を移すと、ラルトスもお姉さんの腕前にご満悦だつた。

……すごいな。

「お姉さんつて、【ブリーダー】だつたりします？ あるいは【コーディネーター】とか？」

「いや、ウチはただの【トレーナー】だ」

お姉さんはラルトスを撫でながら、こつちに見た。
「てか、なんでそう思つたんだよ。アタシなんて、どう見てもそんな柄じゃねえだろ？」

「いえ、ポケモン大好きみたいですし、ポケモンとのコミュニケーションの取り方も上手だから……それに美人なので」「なつ……う、うるせえ！」

怒られた……なんでだろう？

「……ホントのことなのに」

「あああもう、うるせえうるせえうるせえ——！」

俺がボソツと言つたことに反応して、お姉さんは真っ赤な顔で睨みつけてきた。

「やつぱりテメー、アタシのことからかつてんだろ！」

「別に、からかつてるわけじや……！」

「さつきから、か、可愛いとか、美人とか……年上をなめるのもいい加減にしろよな！」

いやホントに本当のことしか言つてないんですけど？

ふと、ここで遠くから何かが迫つてくるような物音が聴こえてきた。

「ん、なんだ?」

「えつ?」

「ラル?」

「チエ?」

全員揃つて音のする方へ目を向けると、誰かがこっちに向かつて走つてきていた……。

……つて、えつ? ヒトミ?.

「うおつと!」

ヒトミは勢い良く俺のところまで走つてくると、俺の腕に抱きつくように身を寄せて、お姉さんを睨んだ。

「わ、私の彼氏に、何の用!」

「えつ?」

ヒトミの発言に、俺とお姉さんは絶句した。

……とりあえず、ちよつと一回、落ち着こうか?

——づく。

9. 彼女（？）の話

ギュウウっと俺の腕に抱きついて、ヒトミはお姉さんを睨んでいる。

自分の腕が柔らかいヒトミの身体に押しつけられて、少し恥ずかしいが、今、俺が感じていた気持ちは恥ずかしさよりも驚きの方が強かつた。

「なんだ、テメー、彼女持ちだつたのか？」

お姉さんが俺を見て訊いてくる。

「いや、そんな」

「彼女です！ だから……」

お姉さんへの俺の返答を遮つて、ヒトミは大きく息を吸つた。

「だから、カズヤに言い寄るのは、やめて！」

「はア？」

ああ、これは……。

ヒトミは大きな勘違いをしてる。

「……クス、フフ、あはつはつは！」

ポカンとした表情が緩んでいき、やがて、お姉さんは愉快そうに笑つた。

「言い寄るつてえ！ あつはつは！ アンタには、アタシがコイツをナンパしてるようにでも見えたのか？」

「……違うの？」

「違うよ……！」

お姉さんが爆笑してる様子を横目で見ながら、ヒトミはこつちに眼を向ける。ヒトミに訊かれ、俺はそのまま素直に否定した……てか、顔近い！

「安心しろよ。別にナンパしてたわけじゃねえ。ただコイツのポケモンの扱いがなつてなかつたからな、アドバイスしてやつてただけだ」
扱いがなつてないって……。

まあ、ラルトスを泣かせるくらい無視しちゃったのは本当だから、否定できなけれど、別にいつもあんな風にしてるわけじゃないんですよ？

「アドバイス……？」

「ほら、これ。さつき、お姉さんからもらつたんだ」

「……これは、ポケじやらし？」

「知つてるの？」

「うん、カロス地方ではみんな普通に持つてたから……けど、なんでそんなことに？」

「いやあ、それは、なんていうか……色々あつて」

さすがに瞑想に集中してラルトスを泣かせたから、とは言いづらい。それを話せば、なんでそんなに瞑想に集中したのかの話にも繋がりかねない。

「とにかく、別にお姉さんにはナンパされたりも脅されたりもしないから！」

「……そーなの？」

「ソーナンス……じゃなくて、そうだよ！」

いかんいかん、つい爺ちゃんのポケモンギヤグが……。

ちなみに、ここホウエン地方では、『そーなの？』と訊かれて『ソーナンス！』と答えるのは、鉄板ギヤグだつたりする。

「そんで、実際のところ、お前らはカツブルなのか？」

気を取り直すように、お姉さんが腰に手を置いて訊いてきた。

「いや、まだ違いますよ！」

「ふーん、まだね……」

なつ、しまつた！

「あついや、べつ、べつに今言つた『まだ』ってのは言葉の綾というか、否定する上でテンプレートというか、深い意味はないですかー！」
「あーもう、良いつて良いって。お前らの反応見たら、なんとなく分かつたつーのー！」

お前ら……？

ふと横を見ると、赤くなつた顔を隠すようにうつむいているヒトミ

の姿があつた。

……ああーー、もう、可愛いなあ！

「つたく、『まだ』とか言つてねえーで、さつさと付き合つちまえば良いのに……！」

「うつ……だから、別にそんなんじや！」

「えつ」

否定しようとしたら、横から小動物ベイビーポケモンみたいな弱々しい声が聴こえてきた。

再度横を見ると、ヒトミが潤んだ眼で俺を見上げていた。

「……カズヤは、私のこと、キラい？」

「いや、キラいなんてことはない。なにけど……」

キラいじやない、むしろ大好き。

だけど、ここで正直に『好きだよ』って言うのは、めちゃくちゃ恥ずかしい！

「けど……？」

不安そうにヒトミはまっすぐ俺を見る。ヒトミの潤んだ眼に見られて妙な罪悪感を感じ、かつ胸の内にあるモヤモヤした羞恥心に耐えきれず、俺はヒトミから眼をそらした。

「だから、その……なんというか……ツー！」

眼を右往左往させて、なんと言おうが迷つていると、ヒトミの眼がますます潤んでいく。

「そうよね、私なんて……。こんな、暗くてトロくて、服もダサくて、ブサイクで、オカルト好きの変な子なんて……」

なんだか、ヒトミのテンションがどんよりと落ち込み、どんどん暗くなつっていく。

そんなに自分を卑下しないで……！

ヒトミは充分かわいいし、魅力的だよ！

「それに、昨日からカズヤ、なんだか素つ氣ないし……」

「いや、それは！」

それは……言えない。ヒトミと喋つてると【いしのどうぐつ】での

ことを思い出しても、目線が胸元に行ってしまうなんて、絶対に言えない！

「うう、どうせ私なんて……グスツ……うう……ふええ！」

ヤバい、このままではヒトミが大泣きしてしまう！

そばにいるお姉さんも、『おい、なんとかしろよテメえ』といった眼で俺を睨んでいる。

「ああーー！ だからさ、その……！」

ヒトミを泣かせるまいと、俺は意を決して、口元をヒトミの耳に近づけた。

「好き、だよ……！」

バクバク鳴っている心臓をどうにか意識の外に追いやり、かすれた声で囁く。

これが、今の俺ができる精一杯の告白だ。友達としてなのか、女の子としてなのか、その辺りの気持ちの差異はまだ解らないけど、心の中にしつかりとあるこの気持ち、それは嘘偽りのなく、俺が心からの思っている気持ちだ。

「キラいなんてことはない。むしろ俺は、ヒトミのことが好き……」「ツ！」

俺が囁くと、ヒトミの顔がポツッと赤く染まった。

「けど、こんなこと……人前では、恥ずかしくて言えないからや……」

「う、うん……！」

ヒトミの耳元から顔を離して、彼女を見ると、ヒトミは顔をうつむかせて組んだ両手をモジモジしていた。そんなヒトミの様子を見ていると、気持ちが惹きつけられ、胸が苦しくなる。

顔が熱い。心臓が騒がしい。ヒトミと同じで、きっと俺の顔も真つ赤だろう。

「ひゅーひゅー、妬けるねえ！」

「なっ！」

声に反応して顔を横に向けると、ラルトス、ヒトモシ、ポチエナと並んで、お姉さんがニヤニヤした顔で見ていた。3匹のポケモンと合わせるため、御丁寧にしゃがんでこっちを見上げている。

俺が何を言つたのかは聴こえていないはずなので、雰囲気だけを見てからかつてているのだろう。

「それで、次はキスでもすんのか？」

お姉さんの茶化す言葉に、ヒトミがピクッと身を揺らしながら「き、キスう！」と声を上げる。口にはしなかつたけど、俺も同じような心境だった。

「か、からかわないで下さい！ そんなんじゃないですって！」

「そんなに見惚れといて、よく言うよな」

「べ、べつに見惚れてなんて……なんて……」

「……ぬううう」

俺は口を結び、ニヤニヤしているお姉さんと言い返せない自分にヤキモキした。

「ああ！ 確かに見惚れてたよ、モジモジするヒトミを見て、かわいいと思つたよ、綺麗だつて、魅力的だつて、大大大、大好きだつて、思つたよお！」

そんなことを八つ当たりするように心の中で叫びながら、俺はお姉さんを睨む。そんな俺を見て、お姉さんはニヤリと笑つていた。

「ラルウ？」

「モシモシ？」

「チエ？」

俺がお姉さんへ無言のプレッシャー（効果がないみたいだ）を放つていると、ふとポケモン達が『あれえ？』『バ！主人？』『なんだ？』と首を捻つて、それぞれヒトミの顔を覗き込んだ。

けどポケモン達に見られても、ヒトミはまったく反応しない。

「ん？」

「あん？」

そんなポケモン達と彼女の様子に、俺とお姉さんもヒトミへ眼を向けた。

ヒトミは顔をうつむいているため、前髪で顔が隠れている。

「ヒトミ？』

「……」

俺が呼び掛けても返事は返つてこなかつた。

俺はお辞儀するように顔を下にして、ポケモン達のようにヒトミの顔を覗き込む。

すると……。

「……氣絶してゐる！」

真つ赤になつた顔のまま眼をぐるぐる回して、ヒトミは意識を失つていた。

——つづく。

10. おどろかすの話

「ふうう……やつと陸にあがれたなあ！」

お姉さんは港に着くと、まず最初に腕を大きく上にあげて、背中をぐうーと伸ばした。

「そんで、アンタらはこれからどこに行くんだ？」

「俺達はミシロタウンを目指すので、まずはトウカシティに行こうと思つてます」

「そつか。じゃあ、ウチとはこれでお別れだな」

お別れ、ということは……。

どうやらお姉さんは【トウカのもり】をぬけて、カナズミシティを目指すようだ。

「じゃあな、まだどこかで会うかも知れねえけど

「はい。その時は是非、バトルしましょう！」

俺の提案に、お姉さんは「おう」と力強く答えてくれた。

今回は船の中ということもあり、バトルはできなかつたけど、一人のトレーナーとしてお姉さんがどんなバトルをするのか興味があつた。

そんな風にバトルの約束をした後、お姉さんは「またな！」と手を振つて、パートナーのポチエナと一緒に去つていつた。

「……あつ、そういうえばお姉さんの名前、聞いてなかつた」
まあいいか。次会つたときに聞こう。

「さて、それじやあ俺達も行こつか」

「……う、うん」

ヒトミは領いて返事をしてくれたが、俺が顔を向けるとゆつくり顔をそらした。

船で気絶して目を覚ましてからというもの、ヒトミはずつとこんな感じだ。

一応会話はしてくれるが、俺と顔をあわせると、真っ赤にしてそらしてしまう。

その反応の原因には、とーーつても心当たりがあるし、なんなら俺もヒトミを見る度に顔が赤くなっている……と思う。

けど、いつまでもそんな調子ではいけないから、俺はなるべく平常心を心掛けることにした。

俺がいつも通りに接していれば、そのうちヒトミの調子も元に戻ってくれるだろう。

「陽が暮れる前までには着くと思うから……」

「……う、うん」

べ、別に、告白チツクなことを言つたせいで、キモいとか思われて嫌われたりしたわけじや、ない……よね?

「ラルラル」

「モシモシ」

アイコンタクトで訊ねると、ラルトスとヒトモシから『ないない』と揃つて呆れたような反応をされた。

そんなこんなで、俺達はトウカシティを目指して歩き出した。

俺達が船を降りた港からトウカシティまでは、104番道路を2時間ほど歩く必要がある。

その間、ヒトミはびつたりと引っ付くように俺の後ろを歩き、時折、俺が後ろを向くとタイミングを合わせたみたいに顔をそらしていた。「ずっと島とか海の上とかだつたから、こういう林の中を歩くのって、なんだか新鮮だよねえ?」

「……うん」

「ほらあそこ、【キノココ】がいるよ! あつ、あつちで【アゲハント】の群れが飛んでる!」

「……うん」

「もう一時間くらい歩いたかな……大丈夫ヒトミ、疲れてない?」

「……うん」

「…………ああー、えーと」

いつものように話しかけてみたけど、こういう時に限つて話題が続かない。

「ラルル——ラール——」

「モシモシモシモシッシー」

俺が話題のネタを考えてる最中、俺とヒトミの間を、ラルトスとヒトモシが歌を歌いながら手を繋いで歩く。

ふたりが楽しげにしてくれるおかげで、良い感じに雰囲気が保たれて、気まづくならないでいられるから、けつこう助かってる。

「……ん?」

「ラル?」

「モシ?」

ふと、道の先の茂みの中から見慣れない影が飛び出してきた。

「ど、どうしたのカズヤ?」

「いや、あれ」

俺が指で示した道の先、そこには黄色い何かが落ちていた。形は何かのポケモンみたいだが、その色は薄汚れている。

「あれは……ピカチュウの、ぬいぐるみ?」

よく見ると、その何かはピカチュウのようであつたが、その目や口は実物ではなく、落書きみたいに布に書かれているものだ。しつぽも木の棒でできている。

「ミツキュー!」

俺たちの存在に気がついたのか、そのぬいぐるみ(?)は鳴き声をあげてこっちを見た。

その瞬間、俺たちはそのぬいぐるみ(?)が何なのか理解した。

「えつ! あれつて!」

「ミミツキュー!」

ばけのかわポケモンの【ミミツキュー】。アローラ地方に多く生息するポケモンだ。タイプはゴーストとフェアリー。ピカチュウを模した布を被つた姿をしていて、その生態についてはいまだ謎が多いと言われている。

「ねえカズヤ、あれミミツキユだよね、ミミツキユ！」

「う、うん！」

今までのオドオドした言動はどこへ行つたのか、ヒトミは嬉々として俺の腕を取つて目の前のミミツキユを指さした。

でも、まあ、その気持ちも分かる。

たしか、ヒトミが一番に仲間にしたいポケモンが【ミミツキユ】だったはずだ。

「けど、なんでこんなところに【ミミツキユ】が……」

【ミミツキユ】はアローラ地方を中心に生息しているポケモンだ。その他の地方で生息が確認されないわけではないが、こんな野道で姿を見せるのはとても珍しい……というか、不自然すぎる。

しかも見たところ、周りにトレーナーらしき人はいない。どうやら目の前のミミツキユは、野生のポケモンのようだ。

「キューーーー！」

警戒してゐるのか、ミミツキユは俺たちを見ながら、低い声を響かせている。

「……えへへ！」

ヒトミは強張つたような笑みを浮かべながら、ゆっくりとミミツキユに近づいていく。

その様子は……まあ、何というか……危ない人の言動のように見える。

『来ないデ！』

ミミツキユは身体をビクビク震わせながら「キュー！」と後退りした。

「えへへ。大丈夫よ、怖くないわ！」

「……怖いよお」

愛でようとしているのか、あるいは捕まえようとしているのか、ヒトミは手を前に出してワキワキと指を動かしている。

アレじやあ、ミミツキユが怯えるのも無理はない。

『近寄るナ、人間！ それ以上こっちに来タラ……』

「あつマズツ！」

ミミツキユは身構え、戦闘態勢に入つた。

俺は急いでヒトミに駆け寄り、腕を引いて守ろうと抱き寄せた。

「キュウウウウッ！」

布のピカチュウの腹部に当たる所にある目をギラリと光らせながら影のような黒い手を広げて、ミミツキユは俺たちに襲い掛かつてきた。

「ウッ！」

その不気味な姿に、俺の心臓は大きく高鳴った。

ミミツキユは肌寒いオーラを俺たちに向けている。けど、そこから俺たちに攻撃してくるわけでもなく、黒い手を広げたまま動きを止めていた。

「キュウウウッ！ キュウウッ！」

「ふふっ、フフフフフ……」これがミミツキユの【おどろかす】なのね！ ヒトミは平然と……いや、むしろ恍惚といった感じで眼を輝かせている。

少しば驚こうよ？

「可愛いいい……ね、カズヤ！」

「えつ、ああうん……『効果ばつぐん』って感じだよね？」

咄嗟に口では同意(?)してみたけど、正直な感想を言えば、『めちゃくちゃビックリした！』の一言だ。

近くにいたラルトスとヒトモシも、お互い抱き合って怯えている。【おどろかす】はバトル中でもたまに怯んで動けなることがある技だ。いきなり仕掛けられたら、そりゃあこんな反応にもなるさ……。俺も身体的なリアクションとしては、ラルトスたちと“同じ”だし……。

えつ、『同じ』？

「……ん？」

一生懸命、威嚇しているミミツキユから視線をゆっくり移動させると、真横にヒトミの顔があつた。

ヒトミはキラキラした眼でミミツキユを見ているため、いまの状況が分かつてない。

俺はそーっとヒトミに回していた腕を引っ込めて、後ろにさがつて

ヒトミと距離をとつた。

「どうしたの、カズヤ？」

「う、ううん、何でもないよ！」

ヒトミはキヨトンとした顔で俺を見上げる。

カワイイ……じゃなくて、俺は慌てて両手を振つて誤魔化した。

『ちか、ヅク……ナ……！』

ここで突然、威嚇していたミミツキユが、ネジが切れたようにバタンと倒れた。

「えっ！」

俺達は揃つて驚き、そのままミミツキユに駆け寄る。ヒトミはミツキユを優しく抱き上げると、ミミツキユの顔（？）の部分に触れた。

「……熱がある」

「風邪？」

「多分……」

ミミツキユはヒトミの腕の中でグッタリしている。顔色は分からないけど、布の中から漏れる息づかいも荒い。

今まで俺達を脅かしていたのがウソみたいだ。

「はやくポケモンセンターに……！」

「うん。じやあ急いでトウカシティに行こう！」

「ラルラル！」

「モシリモシシー！」

ミミツキユのため、俺達はトウカシティのポケモンセンターへ走つた。

——つづく。

11. ミミツキユの話

トウカシティは、ムロタウンほどではないが“シティ”という名前のわりにはそこそこ田舎な街だつた。ビルなどの高い建物がほとんどなく、街の周りは緑豊かな木々に囲まれている。

まさしく、『自然と人が触れ合う街』って感じだ。

本来ならゆつくり街を見て回りたいところだが、街に入つて早々、俺とヒトミはまつすぐポケモンセンターを目指した。

勢いよく入つてきた俺達に、当初ポケモンセンターのジョーイさんと【ラツキー】はビックリしていたが、ヒトミが抱えたミミツキユを見せると、すぐに状態を察して対応してくれた。

ミミツキユはポケモンセンターの奥にある治癒室に運ばれ、治療された。

治癒室は大きなガラス窓がついていて、外から中の様子が分かるようになつていて。中にはポケモンを治療するための機械がいっぱい設置されていた。

「この子、だいぶ弱つてたみたいね」

治癒室の外にあるコンピュータを操作して、ジョーイさんはモニターに映つた数値やグラフを見て言つた。

「でも大丈夫。ミミツキユはすっかり元気になつたわ」

「そうですか……」

ジョーイさんの言葉に、俺は胸を撫で下ろした。

治癒室の診察台の上では、俺達が運んできたミミツキユが、自分が今どこにいるのか確認しているみたいに、周りをキヨロキヨロ見ていた。

「この子の方は問題ないけど……」

すーっと目線を移してジョーイさんはヒトミに目を向ける。

当のヒトミは、治癒室のそばにあるソファアームchairにぐつたり倒れ込んでいた。

いた。息づかいも荒く、わずかに見える肌には、じんわり汗をかけている。

ミミツキユの風邪がなおつて、なんだか今度はヒトミが風邪を引いてるみたいだ。

「貴女は大丈夫？」

「はあ……はあ……だ、大丈夫、でふ」

あつ、囁んだ。

「モシモシ、モシシー？」

「ラルルー？」

ヒトモシとラルトスも、『大丈夫か御主人?』『大丈夫う?』と横になつたヒトミを心配していた。

なぜヒトミがこんな風になつてているのかというと、ヒトミの日頃の運動部足のせいだ。まあ、一時間位かけて歩く道のりをずっと走つてきたわけだから疲れるのも無理はないけど、特にヒトミは運動が苦手で、少し運動しただけでバテてしまう。

俺はミミツキユが治療されてる間に呼吸を整えて落ち着いたけど、ヒトミは今も疲労気味だ。

「ラツキー！」

ミミツキユが乗つた診察台を押しながら、【ラツキー】が治療室から出てきた。

ラツキーは『お大事にいー！』と鳴いて、ミミツキユを俺達の前まで運ぼうとする。

「キユー！」

途端、俺達に気づいたミミツキユは、跳ねるように診察台から飛び降りて俺達に敵意を向けた。

「キユうーーツ！」

ミミツキユが低い声を響かせると、布の中から伸びた黒い手に“影の玉”が収束していった。

「あれは、ミミツキユのシャドーボール！」

「ラキつ！ ラキラキラキ！」

突然のミミツキユの行動に、ジョーイさんはビックリして、ラツ

キーもどこかへ逃げていった。

「ラルトス！」

「ラルっ！」

ラルトスは俺の呼び声に応えて、ミミツキユと向かい合う。

「ラルトス、【サイケこうせん】で撃ち落とせ！」

「ラル！」

ラルトスは力強く頷くと、構えた手の中にエネルギーを収束させた。

「ミツキユ！」

「ラアールウーーー！」

ミミツキユの【シャドーボール】とラルトスの【サイケこうせん】がぶつかり、周辺に煙が広がる。

「ラルトス、【さいみんじゅつ】！」

「ミキユ！」

ミミツキユが次の動作を取る前に、俺は無理やり落ち着かせるようと、ラルトスに指示を出した。

だが、ラルトスが放つた眠気を誘う念波は、ミミツキユがその場から飛び退いたことで避けられてしまった。

「すばやいな……」

ミミツキユは俺たちをかく乱させようとしているのか、目にも止まらない動きでポケモンセンターの廊下を転々と動き回る。

こういう時は、むやみに動きを追わず相手が動きを止めるまで待つのが良策だ。

「ミキユ、キユうう！」

やがてミミツキユは動きを止めてラルトスと俺を睨みつけた。その黒いふたつの眼光からは、どこか憎しみのようなものを感じる。

俺とラルトスは再度、ミミツキユと向かい合う。

「今だラルトス、【サイコキネシス】！」

「ラル！」

「待つてカズヤ！」

「えつちょッ！」

俺たちとミミツキユの間に割つて入るように現れたヒトミに、俺は慌てて「ラルトス、ストップストップ！」と停止の指示を出す。

「ちょっとヒトミ、危ないって！」

「大丈夫……」

そう言つて、ヒトミは身をひるがえしてミミツキユと向かい合つた。

大丈夫とは言うものの、今のミミツキユに対して無防備に近づくのは、とても危険だ。

にもかかわらず、ヒトミはいつものニヤリと笑つた顔で、ゆっくりとミミツキユに歩み寄つていく。

「怖がらないで。私はあなたを傷つけたりしないわ」

「ミツキユ！」

ミミツキユは『近寄るナ！』と前に立つヒトミを威嚇する。

このままだと、今にも【シャドーボール】や【ウツドハンマー】でヒトミを攻撃してしまいそうだ。

「……お腹すいてるでしょ？」

ある程度、ミミツキユに近づくと、ヒトミは身につけていた旅の力バンから、ヒトモシ用のポケモンフーズと皿を取り出す。

そしてフーズを皿に盛ると、そのままミミツキユの前に差し出した。

「さあ、食べて……」

「ミツキユ、ミミ、ミキユ！」

ヒトミが穏やかな口調で食べるよう促すが、ミミツキユは警戒したまま被つた布（化けの皮）の端を逆立てた。

『人間ガ出す食べ物ナンテ信用できナイ』だつて……』

俺がミミツキユの気持ちを通訳すると、ヒトミは一瞬ピクリと動きを止める。その一緒、ヒトミの引きつった笑顔はそのままだつたけど、その眼は、どこか悲しんでいたように俺には見えた。

「……大丈夫、毒なんて入つてないから」

そう言つて、ヒトミは皿に盛つてあるフーズのひとつを摘み取つて、自分の口の中へ運ぶ。

そして、しつかりと咀嚼した後、ゴクンと飲み込んだ。

あのフーズ、人間にとつては、あんまり美味しいんだよなあ……。

「…………ね？」

なんともないでしょ、と言つた感じの笑顔で、ヒトミはミミツキユを見て顔を傾けた。

「…………ミ、ミツキユ！」

しばし疑うような眼でヒトミを睨んでいたミミツキユだが、やがて化けの皮の中から黒い手をふたつ伸ばして、フーズを二つそりと取つて食べ始めた。

余程おなかが空いていたのか、ミミツキユはムシャムシャとフーズを食べていき、あつという間に皿に盛つてあつたフーズを食べつくした。

「まだあるけど……食べるかしら？」

「…………ミツキユ」

ヒトミがおかわりを皿に盛ると、ミミツキユは『……食ベル』と短く答えて、また勢いよく食べていく。

『ああ……僕の『はん……！』』

「よーしょーし、あとで買つてやるから」

「ラールー！」

途中、ヒトモシが涙目になつていたので、俺とラルトスでなだめておいた。

やがて、袋に入つていたフーズも空になつた。

ヒトミが持つていたすべてのポケモンフーズを平らげ、ミミツキユは満足したのか、さつきまであつた荒々しい雰囲気が落ち着いた。

「ミツキユ……！」

しかし、相変わらず人間への不信感は残つているようだ。

攻撃や威嚇はしなくなつたが、俺やヒトミを見る化けの皮に開いた穴から見える眼光が尖つていて。

ヒトミは更に一步前へ出てミミツキユに近づき、なるべく威圧感を持たせないよう膝をついた。

「ねえ、あなたについて、いろいろ教えてくれないかしら？」

「ミツ？」

「わたし、あなたのこと、もつと知りたいの。どうしてあなたがそんなに人が嫌いなのか、教えて欲しいわ……」

「ミツキユ……？」

「……お願い」

「…………ミミツ、ミキユ、キユミキユ」

最初は戸惑っていたようだつたけど、ミミツキユは自分に起きた過去を語り始めた。

「ミツキユ、ミミキユ、キユーミキユ！」

「…………」

「ミツキキキユ、ミツキユ。ミミツキユミツキユ！」

「…………」

「ミツキユー、ミツキユミミミキユ」

「…………」

ヒトミは黙つて、鳴き声をあげているミミツキユを見つめていた。

俺はその様子を見て、ふと思う。

「……通訳しようか？」

「…………うん」

俺が静かに提案すると、ヒトミは少し恥ずかしそうにボソリと返事をした。

* * *

なんでも、ミミツキユは今いる地方の遙か遠くの温暖な場所に住んでいたらしい。多分、アローラ地方だと思う。

けど、ある日、身なりの良い人間の男にゲットされ、このホウエン地方に来たそうだ。その男は、息子への誕生日プレゼントのため、ミツキユをゲットしたらしい。

そして、その男の息子らしき幼い男の子は、プレゼントとして渡されたミミツキユに、とても喜んでいた。

「お父様、ありがとう！ このピカチュウに【かみなりのいし】をあげれば【ライチュウ】に進化するんだよね？ アローラのライチュウってこっちのライチュウとは違う姿をしてるんでしょ！」

男の子は、無邪気にそう言つた。

男の子が欲しかったポケモン、それはアローラ地方特有の姿をした【ライチュウ】だつた。

確かに、アローラのライチュウはこっちのライチュウとは違う姿をしている。暮らしている環境のせいか、あるいは食物のせいか、アローラのライチュウはエスパートタイプを持ち合わせ、見た目も少しパステルカラーちつと丸っこくなっている。

アローラの【ピカチュウ】が進化すれば、当然、そのピカチュウはアローラ姿の【ライチュウ】に進化する。

このピカチュウが少し変わった見た目をしているのもアローラ姿のライチュウになるための違いからくるもの。

男の子の父親は、そう思つて疑わず、アローラで【ミミツキユ】をゲットして息子にプレゼントしたのだ。

けど、男の子がもらつたそのポケモンは、ピカチュウじやない。ミツキユだ。

男の子の父親は、ミミツキユと一緒に【かみなりのいし】を息子に買い与えた。

「ほら、これで【ライチュウ】になれるよ！」

少年はワクワクした様子で、すぐにミミツキユに【かみなりのいし】をあげた。

「……えっ！」

しかし当然、ミミツキユがいくら【かみなりのいし】に触れても、進化の兆しは起らなかつた。

「なんで……ねえ、お父様、どうしてなの？」

男の子は父親にすがるように訊ねる。

けど、父親にも理由は分からなかつた。急いで調べた結果、ようやくそこで父親が捕まえたものがアローラ地方の【ピカチュウ】ではなく、【ミミツキユ】であることを知つた。

ポケモンの知識不足から生じた不幸……。

これは、男の子と男の子の父親が【ミミツキュ】というポケモンを知らなかつたゆえに、起きた不幸だ。

とても楽しみにしていたものが、実は違うものだつたという時の子供の落胆や悲しい気持ちというのは、凄まじい。

自分の思つていたものと違うポケモンをもらつたことに、男の子は駄々をこねたように泣きわめいた。

「うわーん！ こんなピカチュウ、イヤだ！ いらない！」

「キュっ！」

そんな理不尽な理由で拒絶されたことに、ミミツキュは大きなショックを受けた。そしてその後、無責任な父親によつてミミツキュは野に捨てられ、そのままホウエン地方で野生のポケモンとなつた。もともと野生のポケモンとして生きていたミミツキュだつたけど、アローラ地方と異なる環境で生きていくには、それなりに大きな苦労があつた。

もともと生息していたポケモンとの縛張り争いや口に合わない食べ物、仲間がない地方ゆえの孤独など……。

そんな慣れない環境で生き抜いていく中で、やがてミミツキュは自分を捨てた人間への憎しみを抱くようになつていた。

『だから、もうボクは、人間を信じナイ！』

自身の過去を話終えると、ミミツキュはブイツと俺とヒトミから顔をそらす。

ポケモンの厳選とか、よく聞くけど……こんな人間の身勝手な理由でポケモンが振り回されている話を聞くと、なんだか胸が締め付けられる。

なんというか、同じ人間としてホントに申し訳ない。

「…………んつ」

「ミツキユ！」

話を聞いて少し間をおき、ヒトミは黙つてミツキユへと近づき、そのまま彼を抱きしめた。

ミツキユは離れようと黒い手を使って抗っていたけど、ヒトミは絶対に離さないといつた感じでミツキユを抱えて、その身体を優しく撫でる。

「あなたはミツキユ、ピカチュウじゃないわ」

「キユッ！」

ヒトミの言葉に、ミツキユはピクリと反応した。
「ごめんね、人間わたしたちつてポケモンのこと、まだよく知らないの……。そのせいで、よくあなたたちを傷つけちゃうこともあるわ。けど信じて。私や、ここにいるカズヤ……そしてジョーイさんやトレーナー達は、皆あなたのことが大好きなの……」

「……キユう」

ヒトミの気持ちが伝わったのか、ミツキユは腕の中から抜け出ようと抗うのをやめて、大人しくなった。今まで尖っていた目元の力も抜けて、まるで憑き物が落ちたようだ。

「ねえ、ミツキユ……私と一緒に来ない？」

「キユ？」

「私はあなたと旅がしたい……あなたが望むなら、私があなたの元いた場所のアローラ地方まで送り届けてあげる」

「キユッ！」

ミツキユは『ホントに！』と期待した様子で、化けの皮をピクリと揺らした。

けど、まだ人間への不信感がぬぐえ切れないのか、すぐに顔を俯かせて何かを怖がっているように後ずさつた。

「……キュー、ミツキユ、ミツキユ？」

「う、うん……？」

……なるほど。

ヒトミはミツキユの言葉がわからず、困ったように首をかしげたが、俺はその言葉を聞いて、何となくミツキユの気持ちの根本にあ

るものを理解した。

「……『キミはボクをひとりにしナイ?』だつてさ」

「あつ……!」

俺の通訳を聞いて、今度はヒトミも何かに気づいたように声を洩らす。

アローラ地方からホウエン地方に連れてこられ、捕まえた人間に構つてもらえず、そのまま捨てられ、おまけに野生の中でもよそ者扱いされて、ずっと、一人ぼっち……。

多分、このミミツキユは、ずっと寂しくて仕方がなかつたんだ。

ヒトミは再度ミミツキユを抱きしめる。

「うん……私はあなたをひとりにしない。ずっとそばにいるわ」

「……ミツキユ」

ミミツキユはヒトミの抱擁を受け入れるように、身を寄せた。
「ありがとう……」

そして、ヒトミはカバンから空のモンスター・ボールを取り出して、ミミツキユの身体に当てる。

モンスター・ボールに吸い込まれるようにミミツキユが姿を消すと、やがてモンスター・ボールから微光が飛び散つた。

その光は、ミミツキユがヒトミをパートナーとして受け入れた証だ。

「えへつ……えへへへへ、ミミツキユ、ゲット……!」

ヒトミはミミツキユの入ったモンスター・ボールを持って、仲間が増えたよとヒトモシへ微笑みかける。

「モシモシ！」

「やつたな、ヒトミー！」

「ラールー！」

ヒトモシは飛び跳ねて喜び、俺とラルトスも自分のことのないように祝福した。

「えへへ、これからよろしくね……ミミツキユ！」

ヒトミの言葉に応えるように、ヒトミの手の中のモンスター・ボールがゆらりと揺れた。

— つづく。

12. ジエラシーの話

ヒトミがミミツキユを仲間にし、一夜が明けた今日。

「ふんふふーん、ふふーん……フフツ、えへへ！」

ヒトミはこれでもかというほど上機嫌だつた。

昔から好きだつたミミツキユを仲間にしたとあつて、その喜びよう

は、まるでポケモントレーナーがチャンピオンになった時みたいだ。

今もポケモンセンターの朝食を食べながら、膝の上にのせたミミツキユの頭を撫でている。いや、むしろ撫でるついでに朝食を食べてるつて感じだ。

「はいミミツキユ、あーん！」

「ミツキユ」

「……えへへ」

ミミツキユは被り物の中から黒い手を伸ばして、ヒトミが渡したポケモンフーズを食べた。

なんだろう……普通なら微笑ましい光景なのだろうけど、ヒトミの場合、彼女独特のニヤリとした笑みのせいで、ちょっと危ないものを見ているような感じがある。

ミミツキユは警戒気味にヒトミを見ながら、飯を食べているけど、満更でもなさそうだ。

「デレデレだなあ」

「ラールー」

目の前のヒトミ達を見ながら、俺はパンを噛り、ラルトスはポケモンフーズのひとつをパクリと食べる。

そして、そんなヒトミとミミツキユに、不満そうな顔をするポケモンが一匹。

「……モシイ」

「そう落ち込むなつてヒトモシ」

「ラルラルう」

項垂れるように頭を低くしたヒトモシを、俺とラルトスは励ました。まるで弟ができてお母さんにかまつてもらえなくなつたお兄ちゃんみたいだ。

ヒトミはミミツキュに夢中で、ヒトモシの様子に気がついていない。

『はあ……』

『元気出して。はい、私のモモンの実あげるから』

『……ああうん』

ラルトスな自身の皿に盛つてある朝食の山の中からモモンの実を取り、ヒトモシに差し出した。口元まで運ばれたそれを、ヒトモシは力の無い咀嚼でハムハムする。

俺も頭を撫でて励ましてみたけど、ヒトモシの様子に変化はない。

「…………もしい」

むしろ、さらに落ち込んだ。

「やつぱりヒトミじゃなきやダメか……」

ズーンと落ち込んだヒトモシの姿は、まるで真っ白に燃え尽きた蠟燭のようだつた。

* * *

朝食を終え、俺達はトウカシティのポケモンセンターにある中庭で過ごすこととした。

予定では、今日はトウカジムに挑戦するつもりだったけど、ヒトモシの元氣がないこともあって、急遽ジム戦は明日にすることにした。俺とラルトスも、このままだとバトルに集中できそうにない。

ヒトミは「どうして？」と不思議がついていたけど、そこは適当に誤魔化した。

こういった問題は当人が気づいてどうにかしなければならないし、下手にヒトミにヒトモシが落ち込んでのを伝えて関係が悪化したらマズい。

優しいヒトミのことだから、ヒトモシが焼きもちを焼いてるなんて知つたら、すぐにでもヒトモシを気にかけるに違いないけど、そうすればヒトモシが強がつて拗ねるか、最悪、ミミツキュがまた人間不信になる……かもしれない。

それに、こういうジエラシーの問題はデリケートだから慎重にして、前に母さんのサーナイトが言つてた。

「どうしたものかなあ」

中庭で走り回つて楽しげに遊んでいるヒトミとミミツキュを、俺とラルトスは落ち込んでいるヒトモシと一緒に、隅にあるベンチに座つて眺めていた。

「ラルラー」

「ん？」

ふと、横いたラルトスが俺を呼ぶ。

『カズヤも新しい仲間ができたら、もう私にかまつてくれなくなるの？』

「…………うーん、どうだろうね」

俺もトレーナーだ。これからラルトス以外の仲間だつてできるだろ。そうなればラルトスも、今のヒトモシを他人事のようには見れないのだろう。言うなれば、明日は我が身だ。

そんな不安からか、ラルトスは少し怯えたような様子で俺を見上げていた。

「今までみたいにはいかないだろうね。どんなトレーナーでも、ポケモンと接する時間や手数には限界があるから。仲間が増えれば、それだけラルトスと一緒に遊んだりバトルしたりする時間も減つて寂しい思いをさせちゃうと思う」

「…………ラルう」

俺の答えを聞いて、ラルトスは消え入りそうな声で鳴いてうつむいた。

そんなラルトスを、俺はゆっくり膝の上にのせて優しく抱きしめる。

「でも俺は、絶対にラルトスを手放したりしない。ずっと一緒にいる」

から。それだけは忘れないでほしい」

そういって、俺はラルトスの頭を撫でる。

これは俺の本心だ。きもちポケモンのラルトスも、きっと分かってくれるだろう。

「だからラルトスも、いざれ会えるかもしれない新しい仲間と、俺と一緒に仲良くしてくれたら嬉しいな」

「…………ラル」

俺の言葉を聞いて、ラルトスはゆっくりと頷いてくれた。理解はしてくれたけど、まだ納得できないって感じかな？

けど今は、それで良い。

「そしてこれは、きっとヒトミも同じだと思うぞヒトモシ」

「…………モシイ」

俺がヒトモシに言葉を投げかけると、ヒトモシは俺の顔を見上げた後、何か考え込むようにゆっくりとうつむいた。

「モシッ！」

やがてヒトモシは『ヨシッ！』と何かを決心したように大きく頷いた。

そしてヒトモシ独特の上下に揺れる歩行方法で、ヒトミたちの元へと走つていく。

「ヒトモシ？」

「モシ！」

「あっ、そういうえば紹介してなかつたわね」

そばに寄つて来たヒトモシを見て、ヒトミは彼をミミツキュの前へやる。

「この子はヒトモシ。貴方と同じ、私のパートナー・ポケモンよ」

「モシモシ」

「…………ミツキュ」

ミミツキュは警戒してヒトモシの様子を窺う。ミミツキュが被つている化けの皮の腹部に皺が寄り、まるで睨んでいるみたいだ。

やがてヒトモシに敵意や悪意が無いと悟ったのか、ミミツキュはゆっくりと歩み寄る。

『よろしくな』

『……よろ、シク』

ヒトモシの白くて短い手とミミツキユの黒く長い手が交差し、二四
は握手した。

「えへへ！」

手をつないだヒトモシとミミツキユをヒトミは抱きかかえる。

ヒトモシとミミツキユを両手で抱えて幸せそうに笑うヒトミを、俺

とラルトスは微笑ましく見守った。

——づく。

13. 仲間の話

トウカジムに挑戦した翌日。

「……やっぱり仲間が必要かなあ」

無事にジムバッヂをゲットできた俺、カズヤはポケモンセンターの玄関でひとり考える。

トウカジムのジムリーダー、センリさんとバトルしたのは、つい昨日のこと。

タイプ相性の有利もなく、二つ目のジムバッヂをかけたバトルとあって、今回は前回よりもかなり苦戦した。

センリさんの手持ちポケモンはナマケロ、ジグザグマ、ヤルキモノの三体。このポケモン達をラルトスひとりで相手してもらつたわけだが、連戦はラルトスの負担が大きかつた。

三戦目のヤルキモノ戦なんて、最後の【きあいパンチ】が当たつていたら負けてたかもしれない。

今回は運良く勝てたけど、今後もそういうまいくとは限らない。

対策としては、ラルトスにもつと強くなつてもらうか、新しい手持ちのポケモンを増やすかの二つがあるけど、ラルトスの修行は今もやつてるわけで、これ以上はかえつて身体を壊してしまう。よつて、対策するなら新しい仲間を増やす方が無難だ。

以上、昨日のジム戦の反省の末に出た結論が上記のセリフだ。

「ラルう？」

足元にいたラルトスが気になつた様子で顔を見上げる。

それに気づいた俺は考えるのを止めて、ラルトスを抱き上げた。

「ラルトスは、仲間を作るなら、どんな仲間が良いと思う?」

「ルウー、ラルラルうラル」

『んー、よく分からない』とラルトスは首を傾げた。先日、ヒトミが新しい仲間ができたところを目の当たりにしたとはいえ、まだ実感が沸かないか……。

やはりここはトレーナーである俺が、ちゃんと考えるべきだろう。

実戦的に考えるなら、次のジム戦はカナズミシティかキンセツシティだから、対策として、いわタイプかでんきタイプに有利なポケモンが良い。

じめんタイプなら、ヤジロン。
はがねタイプなら、ダンバル。
みずタイプなら、ヤドン、もしくはスターミー。
かくとうタイプなら、アサナン。

そんなところかな?

「んー、迷うなあ……」

ホントに迷うなあ、どのポケモンも良い!
かわいい! カツコいい! かしこい!

エスペー、サイコー!

「ラルラー!」

ラルトスが頬をペチペチたたく。

さつきまで足元にいたラルトスは、いつの間にか俺の肩に乗ついていた。

「えつ、なに?」

『ヒトミが出てきたよ』

ラルトスが手を向ける方へ顔を向けると、ポケモンセンターのエレベーターからヒトミがヒトモシとミミツキユを両肩に乗せて出てきた。

「おまたせ、カズヤ」

「よし、じゃあ行こうか」

「うん!」

「モシモシイ！」

「ミツキユ！」

「ラールー！」

ヒトミの反応に合わせて、ヒトモシとミミツキユ、そしてラルトスが大きく頷いた。

そして俺とヒトミは二人並んで、次の目的地であるミシロタウンを目指して歩き出した。

トウカシティからミシロタウンまでは、102ばんどうろを行き、途中、コトキタウンを通る。舗装はされていないが、道を伝つていけばコトキタウンまでは一日もあれば歩いて行ける距離だ。

道中、周りには見渡す限りの自然と元気な野生のポケモン達がいる。【ハスボ】や【タネボ】、【ケムツソ】、【キノココ】に【ナゾノクサ】と、皆それぞれ豊かに暮らしている。

「そつか。カズヤも一人目の仲間が欲しいのね」

「うん。これから先のジム戦を考えると、やつぱりラルトスひとりじや厳しいと思つてね」

のどかな道を歩き、俺はヒトミと話しながら肩を並べて歩いていた。話題は、トウカシティで考えていた、俺の二四目のポケモンについてだ。

「じゃあ、次のジムがある街に着くまでに、どこかでポケモンを仲間にしなきゃね」

「そなんだけど、この辺りだとなかなかあ……」

そう言つて周りを目を向けるが、相変わらずいるポケモンは、くさタイプが主だ。環境的に仕方ないが、この辺じや、エスパータイプのポケモンを見つけるのは難しい。

「やっぱリカズヤは、仲間にするならエスパータイプのポケモンがいいの？」

「ああ。他のポケモンがダメつてわけじゃないけど、できればね……」

オカルトマニアのヒトミがゴーストポケモンを仲間にしているよう、サイキツカーの俺もエスパータイプのポケモンを仲間にしたい。

これは理屈がどうのというよりも、サイキツカーとしての性分……いや、本能だ。

「はああ、やつぱり【いしのどうくつ】で【ケーシイ】を仲間にしどくんだつたなあ」

「ふふっ」

俺が悔しげに頭を搔くのを見て、ヒトミがクスクス笑う。

「そういうえば、トウカシティで聞いた話だけど、この辺りでは野生の『ラルトス』がよく見つかるんだつて」

「ラルう？」

名前を聞いて、頭にいるラルトスが反応する。

確かに、ラルトスが二匹目つていうのも夢があるな。

トクサネシティのトレーナーの中にも、サーナイトとエルレイドの構成を目指して、ラルトス二匹を仲間にしている人もいた。けど、野生のラルトスがあ。

「悪くないけど、運と相性次第かなあ」

野生のラルトスが出会うのが難しいというのもあるけど、俺のラルトスはタマゴからずつと手持ちなのもあって、育った環境の違いから相性が良くない可能性もある。

まあ、その相性の中を取り持つのもトレーナーの腕の見せ所であるわけだけど、今の俺にはハードルが高い。

「ラルラル、ラルルララルラルルーラル

「そつか」

「ラルトス、なんだつて？」

「私は、どんな子でも大丈夫だよ」だつてさ

「そう……ふふっ、ラルトスもはやく仲間が欲しいのね」

「ラールー！」

期待とやる気のこもつた声で鳴くラルトスに、俺とヒトミは揃つて笑みを浮かべた。

「ねえ、そこの君」

「ん？」

しばらく歩いていると、ふと背後から声をかけられた。振り替えると、そこには一人の男の子が立っていた。

見知らぬ少年に、ヒトミは驚き、ゆっくりと俺の後ろに隠れるように後退りした。そして、物陰から覗くように俺の腕をつかんで少年を見る。ヒトモシとミミツキュも彼女の真似をしている。

しかし、そんなヒトミに全く興味を示さず、少年はまっすぐ俺に目を向けていた。

「君のラルトスと、僕のポケモン、交換してくれないかな？」

「えつ！」

「ラル！」

少年の言葉に、思わず俺とラルトスは揃って声を洩らす。

トレーナー同士でポケモンを交換するというのは良くあることだから、その依頼そのものに驚きはしないが、初対面の第一声、しかも街の外の道中で言われるとは思わなかつた。

しかし、その驚きも束の間。俺はその依頼にすぐ首を横に振つた。
「ごめん、ラルトスは俺の大変な相棒だから」

「即答だね……でもそつか。残念だなあ」

意外にも少年はあつさり諦めた。

しつこくお願ひされたらどうしようかと内心で警戒していたので、少しホツとした。

どうやら悪い子ではなさそうだ。

「ラルトスが欲しいなら、この辺りにいる野生のラルトスをゲットしたら良いんじゃないか？」

「実は、僕もそう思つてここに来たんだけど、なかなか見つかなくて……。もう一週間も、トウカシティとこの辺りを行つたり来たりしてるんだ」

「へえー。よっぽど【ラルトス】が欲しいんだな」

「うん。でもどちらかと言えば【ラルトス】よりも【エルレイド】が好きでね。小さい頃、ポケモンコンテストで見たエルレイドがカッコよくて、いつかゲットしたいって思つてたんだ」

なるほどねえ。

良い趣味してる。この子とは気が合いそうだ。

「ゲットできないなら、誰かと交換しようかなと思って声をかけたんだけど……」

そう言つて、目の前の少年は俺とラルトスを羨望の眼差しで見つめる。

「気持ちは分かるが、いくらお願ひされても俺のラルトスは絶対ダメだからな」

「そつか……はああ、残念」

俺が断固として拒否する姿勢を示すと、少年は肩を落として大きなため息を吐いた。

「まあ、頑張つて野生のポケモンをゲットするんだな」

あるいは、俺みたいにタマゴから孵すか。

「それができないから困つてるんだよお」

少年はまた大きなため息をつく。

「はああ……一応、交換してもらうために、おじさんから珍しいポケモンも用意してもらつたのになあ」

「へえ、そのポケモンつて?」

交換する気はサラサラ無いが、珍しいポケモンと言われると少し興味がある。

「【ケーシイ】だよ」

「よし、ゲットしよう!」

「ラルつ!」

俺の決断は早かつた。

——つづく。

14. ゲットの話

「僕はヒデオ。よろしくね」

「俺はトクサネシティのカズヤ」

「お、同じく、ヒトミです。よ、よよよ、よろしくお願ひします。ヒヒヒツ」

「う、うん。よろしく、ね」

俺とヒトミは少年と簡単な自己紹介をして、ラルトス探しを開始した。不気味な愛想笑いを浮かべるヒトミに、少年は頬を引きつらせて苦笑いで返す。

探ししている途中で話を聞いたところ、なんでもヒデオはトウカシティに住んでいて、先日、親から手持ちのポケモンを持つことを許され、最初の一匹に憧れのラルトスをゲットするため、時間を見つけてはこの辺りを散策しているらしい。遊ぶ時間はもちろん、『塾帰り』なんかにもこの辺りを歩き回っているとのことだ。

だが流石に一人だけで林の中に入るのは危ないため、おじさんから手持ちのポケモンを持たされた。そして必要なら、ラルトスを持つているトレーナーと、そのポケモンを交換しても良いと言つてくれたらしい。

そのポケモンが【ケーシイ】だ。

「それにしても、手持ちにだけじゃなく交換に出しても良いなんて、随分と気前の良いおじさんだな」

「ラルトスを持つているトレーナーなら、きっと心の良いトレーナーで大切に育ててくれるだろうから大丈夫だつて言つてた。それに、ケーシイは危なくなつたらテレビポートで家に帰ることができるからね」

「……そつか」

俺は話を切り、なんだか照れくさくなつて頬を指先で搔く。

「そういうえば、手伝ってくれるのは僕としてはありがたいけど、カズヤはゲットは得意なの？」

「うーん……実はまだやつたことないんだ。けど、知識としては知ってるし、相手がラルトスなら習性もよく知ってる。他のポケモンよりも上手くやれると思う」

そもそも、【ラルトス】がゲットしにくいつてのは、遭遇することが少ないのであって、ゲットの方法そのものは他のポケモンと変わらない。

ラルトスについて熟知している俺なら、むしろ簡単にできるだろう。

「習性？」

「【ラルトス】はきもちポケモンと言つて、生き物の心を敏感に察知するんだ」

「うん」

俺の解説に、ビデオは頷く。

「つまり、ラルトスを探す時は『見つけてやるぞー』とか『バトルするぞー』とか好戦的になつたり敵意を向けるのはダメだ。見つけるには心穏やかにすること。これが第一。そしてこれは、ゲットするトレーナーだけでなく一緒に行動する仲間も同じだ。一人でも心に敵意や暗い感情があると見つけることは難しい」

「えつ、ゲットするのを考えるなつてこと？　でもそれじゃあ、どうやっても見つけられないんじゃ……？」

「そうでもないよ」

そう言つて、俺は足を止めて頭の上にのせていたラルトスに手をやつて前に抱く。

ビデオは一瞬不思議そうにラルトスに目をやつたが、すぐにまた俺に目を戻す。

「ビデオはどうしてラルトスをゲットしたいんだっけ？」

「それは……小さい頃に見た【エルレイド】がカツコ良くて、僕も一緒にいて欲しくて」

「そう、その気持ちを持つて探すんだ。明るく前向きに、『友達になつ

て欲しい』って願いながらね。そうすれば、向こうもきつと答えてくれる

「そう、なの?」

「ああ。納得いかないっていうなら、試しに【ラルトス】をゲットした時のことを考えてみな? あるいは、もしも【エルレイド】に進化したらあ、とかな」

俺が促すと、ビデオは目を閉じて「うーん」と腕を組んで考え始めた。最初は眉間にしわを作っていたビデオだが、徐々に力が抜けていき、やがて穏和な顔つきに変わつていった。

「ラルー!」

「えっ!」

やがてラルトスが明るい声で鳴き、ビデオは驚いて目を開ける。

「ラル、ラルラルラー!」

「ほら。俺のラルトスも、今のビデオの気持ちが気に入つたみたいだぞ」

俺の言葉に賛成するようにラルトスが鳴く。『うん、今の気持ち好き!』と言つてくれている辺り、間違いない。

「なんだ……わかつた。やつてみる」

「よし。それじゃあ、続けてこの辺りを歩いてみよう」

「ラールー!」

引き続き野生のラルトスを見つけるため、俺達は散策を続けた。

それから二時間後。

「うーん」

「見つからないねえ」

ここまでずっとラルトスと遭遇しないことに、いよいよ俺とビデオは足を止めて、ため息をついた。

「どうだ、ラルトス？」

「ルーッ？」

「何かイヤな感じとかする？」

俺が訊ねると、頭にのつっていたラルトスはツノで何かを察知するようにして周囲を見る。そして、とある方向に目を向けた。

「ラールー、ラルラルラルラルう！」

「えっ！」

ラルトスの言葉に、俺は思わずラルトスと同じ方へ顔を向けた。そこには、ヒトモシとミミツキユを抱えたヒトミが立っている。俺の反応を見て、ヒデオも不思議そうにヒトミを見た。

「えっ！ な、なに？」

急に視線を向けられ、ヒトミはピクリと一瞬背筋を伸ばし、オロオロと慌てだす。

「いや、そのお……ごめん、ちょっとタイム」

俺はヒデオに頭を下げ、ヒトミの手を取つて少し離れた位置まで連れていった。

「な、なに？ どうしたのカズヤ？」

「それが、ラルトスが言うには、野生の【ラルトス】が出てこないのはヒトミが怖がつてるのを察して警戒されてるのかもって……」

「えっ！」

極度な人見知りのヒトミは、他人や初対面の人の前だとすぐに縮こまってしまう。ラルトス曰く、その恐怖心を察知して野生の【ラルトス】が姿を見せなくなっているらしい。

「うう……ごめんなさい」

「あーいや、苦手なものは仕方ないよ。でも、そのお……今だけでもなんとかできないかな？」

「う、うん……私も、できればそうしたい。でも……」

「それができれば、苦労はしない……か。」

ヒトミは視線を下にやつて胸の前で指をツンツンと合わせる。けど、やがて何かを思い付いたのか、俺の方へチラチラと目をやる。「その、えつと……方法が無いわけじやないの」

「えっ！ それは、どんな？」

「そのお、ポケモンの技でいうところの【アロマセラピー】、みたいな？」

顔を赤く染めながら言うヒトミの言葉が、いまいち理解できず、俺は首を傾けた。

「そのために、カズヤにお願いが、あるの」

「う、うん。なに？」

そのヒトミのお願いを聞いて、俺は更に混乱した。

「……ねえ、カズヤ」

「何？」

隣を歩くヒデオに声をかけられ、俺は辺りを観察しながら返事をする。

あれこら十分ほど歩いたけど、まだ【ラルトス】は見つかっていない。

「ヒトミの“アレ”、一体なんなの？」

「……う、うん。“アレ”ね。アレは、その、なんというか……」

ヒデオは後方を指さして訊ねる。だが俺は、なんと説明していくか分からず、頬をポリポリ搔いた。

「いわゆる、安心毛布つてやつ」

「毛布？ でもあれつて“カズヤの服”だよね？」

「う、うん。でもヒトミが言うには、あーすると安心するんだって」「ふーん」

背後には、俺のお気に入りの紫色の作務衣を持ったヒトミが、ヒトモシとミニツキユを連れて歩いている。

ヒトミは両手で俺の作務衣を自分の口元に当てて、ゆっくりと大きく深呼吸する。その顔は火照っているように赤く、締まりがない。目線は少し上へ向いているが視点も定まっていない。

「スンスン……んー、至福う！」

いくら昨晩洗濯したとはいえ、自分の服をクンクンと嗅がれるとい
うのは、かなり恥ずかしいし、なんだかむず痒くもある。

だが実情はともかく、これでさつきのようにヒトミが人見知りして
オドオドすることはないし、野生の【ラルトス】に警戒されることも
なくなるだろう。

「ラルー！」

「ラルトスも、大丈夫だつて」

「そう。まあ、二人が良いなら、僕は別にそれで良いんだけど……」

そう言つて、ヒデオはヒトミから俺が抱えているラルトスに目を移
す。

「そういうえばカズヤ、さつきから気になつてたけど、君、ラルトスの言
葉が分かるの？」

「えつ！ あつ、ああ、まあね」

「へえー、すごいなあ。良いなあ。僕にもできるかな？」

「俺とラルトスはもうずっと前からの仲だからな。ヒデオもゲットし
たポケモンを大切に思えば、きっと心を通わせられるよ」

俺の場合は超能力で言葉を正確に理解しているけど、超能力なんて
使わなくてもラルトスの言いたいことはなんとなく分かる。

「ふふつ、そうだと良いなあ……あつ！」

「ん？」

ヒデオが期待に胸を膨らませた笑みを浮かべていると、突然、声を
出して足を止めた。視線を辿ると、そこには林の中の一本の木が生え
ている。そして、その影には一匹の小さなポケモンが顔をのぞかせて
立つっていた。

顔といつても目元はおかっぱ頭のような緑の頭部によつて見えな
いが、緑の頭に赤いツノと、種族としての特徴は一致している。

「ラルう」

「あつ、あれは！」

野生の【ラルトス】が俺達の様子を伺つていた。そのラルトスは興
味混じりで、こつちを見ている。

「いた！」

「ちよつと待て！ 落ち着け！」

ラルトスを見つけて早速モンスター・ボールに手を伸ばそうとするヒデオを俺は止めた。ここで捕獲欲を見せると、多分あのラルトスは逃げてしまう。

「ここは慎重に行こう」

「慎重について、一体どうやつて？」

「まあ、見とけって」

そういうと、俺はヒデオをその場に残して、少しづつ木の影に隠れているラルトスに近づいていく。

相手に警戒されないギリギリの距離まで近づくと、俺はその場でしゃがみ、腕に抱えていたラルトスを地面に下ろした。

「ラルトス、頼むな」

「ラルー！」

ラルトスは俺の考えを察して『任せて！』と深く頷いた。

「ラルラル！」

「ラルラー？ ラルラルラル！」

「ラララル。 ラルラルラー！」

ラルトスはゆっくりと歩み寄ると、木の影に隠れた野生のラルトスに声をかける。野生のラルトスは首を傾げたが、俺のラルトスの明るい様子に、警戒しつつも木の影から出てくれた。

雰囲気から察するに、どうやらオスのラルトスらしい。

「ラルラル、 ラルラルラー！」

「ラル。 ラルラル」

「ラーラル。 ラルラルル」

「ラル？ ララル！」

俺のラルトスと野生のラルトスがコミュニケーションを取る。

通訳すると、こんな感じだ。

『こんにちわあ！』

『こ、こんにちわ』

『どうしたの？ 私達に何か用？』

『ううん。なんだか心地の良い波長を感じたから、ちょっと見に来てみただけ』

『そなんだ』

『あの人間の女の子、すごく幸せそうだね』

『うん、そうだよねえ』

ラルトス二人が揃つてヒトミを見るが、本人は気づかない。

『あなたは、この辺りに住んでるの？』

『うん』

『他に家族や友達は？』

『ううん。いないよ』

へえ、それは珍しいな。野生の【ラルトス】はキルリアやサーナイトと一緒に生活しているイメージがあつたけど、そうでもないのかな。

『じゃあ、ひとつ提案があるんだけど』

『なに？』

『実は、あそこにいるヒデオっていう子が仲間を探してるんだって』

『へえー』

『良かつたら、どうかな？』

『ボクが？』

『うん』

俺のラルトスがヒデオを指し、野生のラルトスもヒデオを見る。ヒデオは「な、なんだろう？」と首を捻るが、やがて野生のラルトスは俺のラルトスに向かつて大きく頷いた。

どうやらヒデオは、あのラルトスのお眼鏡になんつたらしい。話を終えると、ラルトス達はこつちにゅっくり歩み寄ってきた。

「ラルラール！」

「ああ、ありがとう。お疲れさま」

俺は自分のラルトスを再び抱え上げ、頭を撫でた。ラルトスは嬉しそうに口許を緩める。

「ラル」

「あつ、え、えーと……」

もう一方のラルトスは、ヒデオの足元まで来ると、彼の顔を見上げた。ヒデオの顔を覗き込み、内にある感情を探るようにジーッと顔を向ける。見られ続けるヒデオはどう反応して良いのか分からず困惑していたが、やがてラルトスが握手するように手を前に出した。

「ラルラル」

「えつ？」

どうやらヒデオは、このラルトスのお眼鏡にかなつたらしい。

「よろしく、だつて」

「えつ、ああ、そなんだ……」ちらりと、よろしくね

俺の通訳を聞いて、ヒデオは腰を下ろしてラルトスの手を取ると、お互いに信頼を置くように握手をする。

「よし。じゃあ早速、ラルトスをモンスターーボールに入れるんだ」「うん。そうだね」

ヒデオはポケットからモンスターーボールを取り出してラルトスの額にコツンと当てる。するとラルトスの身体がモンスターーボールの中へ吸い込まれる。

しばらくヒデオの手の中でユラユラと揺れていたが、ラルトスの入ったモンスターーボールはすぐに大人しくなった。

「やつた！ これでゲットできただことだよね？」

「ああ。おめでとう」

「カズヤのおかげだよ。ありがとう！」

ヒデオはラルトスの入ったモンスターーボールを、喜びと期待のこもつた目で見る。

初ゲットかつ初めての自分のポケモンとあって、感慨深いものがあるのだろう。

「それじゃあ御礼に、約束通りケーシイをあげるよ」

そう言つて、ヒデオはラルトスのモンスターーボールを仕舞い、代わりにケーシイのモンスターーボールを取り出して俺に差し出す。

「はい。大変にしてあげてね」

「ああ、ありがとう。大切にするよ……よし、出てこいケーシイ！」

モンスター・ボールを受け取って、念願のケーシイを手に入れた俺は、早速中にいるケーシイを外に出した。

ボールの中からの閃光と共に、ねんりき・ポケモンのケーシイが姿を現す。

空中に座るような体勢で浮遊するケーシイを見ながら、念願のポケモンをゲットした感激に、思わず抱きつきたくなる衝動をなんとか抑ええた。

「俺はカズヤ。こつちは相棒のラルトス。今日からよろしくな、ケーシイ」

「ラルラルう！」

「シイ！」

俺とラルトスが声をかけると、ケーシイは鳴き声を出しながら、その細い目で俺とラルトスを見る。

『今日から君がボクのご主人様か。まあ、よろしくね』

このケーシイ、まさかのボクつ娘である。

出会つたばかりとあつて少し素つ氣ないが、それでも感じの良い言葉を返してくれた。

「ラルラルー！」

ラルトスも初めての仲間が出来て嬉しそうだ。

明るいラルトスとクールなケーシイとで、性格的にも相性は悪くなさそうだ。

『それじゃあ僕はウチに帰るよ。おじさんにも報告しなきやいけないから……ケーシイ、元気でね』

『ああ、君もね』

そんな最後の言葉を交わしてヒデオはケーシイに別れを告げると、俺達に改めて御礼を言つて、その場を後にした。

こうして俺は今日、二匹目の仲間、ケーシイをゲットしたのだつた。『ところで、あの女の子は？』

『ああ、旅の仲間のヒトミだ。そばにいるヒトモシとミミツキユは、彼女のパートナー・ポケモン。仲良くしてくれ』

『へえ、手に持つてるのはカズヤの服かい？』

『そうだよ。あれがヒトミの安心毛布なんだって』

『ふーん、なんだか変態みたいだね』

「こらこら」

思ったよりも毒舌なケーシイに、俺は口で軽く叱りながら苦笑いした。

一つづく。